

早稲田大学審査学位論文

博士(スポーツ科学)

カポエイラのエスノグラフィー  
—リオデジャネイロにおいて創造される文化的固有性—

The ethnography of Capoeira

: The cultural originality created in Rio de Janeiro

2014年1月

早稲田大学大学院 スポーツ科学研究科

細谷 洋子

HOSOTANI, Yoko

研究指導教員: 寒川 恒夫 教授

## 目次

序章 はじめに-----	7
第1節 カポエイラの概要-----	8
1. 歴史的経緯-----	8
2. カポエイラの流派-----	9
3. カポエイラの動き、形式、世界観-----	11
第2節 現代流カポエイラの一団体「アバダ・カポエイラ」-----	13
第3節 ブラジルの地理的特徴と文化的特徴-----	14
第4節 問題背景と研究目的-----	15
第5節 先行研究と問題の所在-----	17
第6節 論の展開-----	22
第7節 本論におけるポルトガル語のカナ表記について-----	23
第1章 ナショナルアイデンティティ再創造とアフロブラジル文化-----	25
第1節 ブラジルの人種関係に対する国家的解釈の変容-----	26
第2節 アフロ系子孫のエスニックアイデンティティ形成-----	29
第3節 ナショナルアイデンティティを構成するエスニシティ-----	31
第4節 ブラジル政府の国民統合政策とカポエイラの内容-----	34
1. 2003年制定法令10639号のアフロブラジル文化と歴史の教育義務化-----	34
2. 2008年のブラジル国内無形文化遺産登録とアフロブラジル文化教育-----	36
3. アフロブラジル文化教育の文脈におけるカポエイラ教育実践の課題-----	38
第5節 国家形成の枠組みにおけるカポエイラの社会的役割-----	40
第2章 教育政策とカポエイラのゲームにおける鍵概念-----	43
第1節 国家教育計画とカリキュラム方針におけるカポエイラ教育内容-----	45
1. 『2004年アフリカとアフロブラジル文化歴史教育と民族人種関係教育の 国家カリキュラム方針』におけるアフロブラジル文化教育の目的-----	46
2. 『2009年アフリカとアフロブラジル文化歴史教育と民族人種関係教育の 国家カリキュラム方針実施国家計画』における幼児教育段階の目的-----	47
3. 『2009年リオデジャネイロ州教育計画』-----	49
4. 『2010年リオデジャネイロ市幼児教育カリキュラム指針』-----	51
5. 四つの政策における策定内容-----	53
6. 幼児教育におけるカポエイラの内容-----	54
第2節 リオデジャネイロ市の私立J幼稚園の調査結果-----	55
1. 調査概要-----	55
2. 調査方法-----	56
3. 調査結果-----	57
第3節 幼児対象クラスの教育内容と展開パターンと鍵概念-----	62
1. 教授内容と展開パターン、授業構成の観点-----	62
(1) 活動の種類-----	62

(2) 活動の展開パターン-----	64
(3) 教授内容を構成する観点-----	65
2. 授業構成の観点：即興を軸とした「ジョゴ」概念-----	67
(1) カポエイラ独特の世界観の希薄化-----	67
(2) 行為の意味「問いかけと返答」を重視する-----	68
(3) カポエイラの文化的特性「ジョゴ」概念-----	69
第3章 カポエイラ競技大会と文化的固有性-----	72
第1節 カポエイラの競技化-----	73
1. 競技化の経緯と先行研究-----	73
2. 現代流カポエイラの技術と理念の特徴-----	75
第2節 アバダ・カポエイラの競技大会-----	76
1. 競技化の目的-----	76
2. アバダ・カポエイラ競技規則-----	77
(1) 1997年第1回世界競技大会-----	77
(2) 2003年第4回世界競技大会-----	79
(3) 2009年第7回世界競技大会-----	80
(4) 2011年第8回世界競技大会-----	80
(5) 2013年第9回世界競技大会-----	81
3. カポエイラ競技大会のシステム-----	81
(1) カポエイラ競技の実施とゲームの種類-----	81
(2) 段位カテゴリーと性別-----	82
(3) 2012年から採用された性別カテゴリーと体重階級-----	83
(4) 採点項目と減点項目-----	84
(5) 同点決着基準-----	85
4. ゲーム評価の基準：言説によるカポエイラ競技における「良いゲーム」-----	85
(1) 倒し技のタイミング-----	85
(2) ゲームの文脈-----	85
第3節 競技化におけるカポエイラの文化的固有性の創造-----	86
1. 2013年競技規則前文「競技者の心得」にみる文化的アイデンティティ-----	86
2. カポエイラの競技化で志向される文化的固有性-----	86
(1) 既存の他スポーツ競技システムの導入-----	87
(2) 明文化されたカポエイラ独特の世界観-----	87
(3) 創造される「カポエイラ芸術」の形式-----	88
(4) 支配権力に干渉されない文化的固有性-----	89
第4節 カポエイラの競技化と文化的固有性-----	89
第4章 アバダ・カポエイラにおける「アマゾナス」のゲーム創造-----	91
第1節 メストレ・ビンバ・カポエイラ教育センター（CEMB）の理念-----	93
1. CEMBの活動理念-----	94
2. CEMBの理念の公的評価-----	98

第2節 「アマゾナス」のゲーム創造経緯-----	100
1. 弦楽器ビリンバウのリズム「アマゾナス」-----	100
2. カミーザ師範の言説によるゲームの創造経緯-----	101
第3節 「アマゾナス」のゲーム形式と動きの詳細-----	102
1. ゲーム形式と特徴-----	102
2. 「再現」から「表出」表現へ-----	103
第4節 新たな表現形式の創造と文化的固有性-----	104
第5章 劇場のショーにおけるカポエイラのエンタテインメント化-----	106
第1節 調査概要と分析方法-----	107
第2節 サルバドルの劇場におけるショー-----	109
1. バイア州都サルバドル市概要-----	109
2. ダンスカンパニー「バレエ・フォークロリコ・ダ・バイア (Balé Folclórico da Bahia)」概要-----	109
3. 調査結果-----	110
4. 上演内容の考察-----	111
第3節 リオデジャネイロの劇場におけるショー-----	114
1. リオデジャネイロ州都リオデジャネイロ市概要-----	114
2. 劇場「プラタフォルマ (Plataforma)」概要-----	114
3. 調査結果-----	115
4. 上演内容の考察-----	123
第4節 劇場ショーとしてのカポエイラの変容と表象-----	126
結章 創造されるカポエイラの文化的固有性-----	128
第1節 制度からみるカポエイラの社会的役割-----	129
第2節 リオデジャネイロにおけるカポエイラの文化的固有性-----	129
1. カポエイラにおける文化的固有性の内実-----	129
2. カポエイラにおける文化的固有性の位相-----	131
文献一覧-----	132
謝辞-----	142



## 図目次

図 1	ルゲンタスの「カポエイラ格闘」 (1824 年) -----	8
図 2	本研究の構造-----	16
図 3	リオデジャネイロ市 (左の半島部分) とイタボライー市 (右の内陸部分)	93
図 4	メストレ・ビンバ・カポエイラ教育センターの公式ウェブサイト-----	94
図 5	CEMB の理念に基づいたシンボルマーク -----	98
図 6	ビンバ師範の「アマゾナス」のリズム-----	100
図 7	2008 年 3 月 14 日公演の BFB のパンフレット表紙-----	110
図 8	演目「カポエイラ」のオープニングシーンの出演者の位置-----	116

## 表目次

表 1	カポエイラ用語のカナ表記-----	24
表 2	『2010 年リオデジャネイロ市幼児教育カリキュラム指針』による教育内容構成の観点-----	51
表 3	『2010 年リオデジャネイロ市幼児教育カリキュラム指針』による教育内容-----	52
表 4	アフロブラジル文化教育に関する国家教育政策とリオ州・市教育計画---	53
表 5	2010 年の参与観察日時と参加者数-----	55
表 6	参与観察 1 回目（2010 年 8 月 5 日木曜日）の活動内容-----	58
表 7	参与観察 2 回目（2010 年 8 月 10 日火曜日）の活動内容-----	59
表 8	参与観察 3 回目（2010 年 8 月 24 日火曜日）の活動内容-----	60
表 9	参与観察 4 回目（2010 年 8 月 26 日木曜日）の活動内容-----	61
表 10	2010 年 8 月カポエイラの幼児対象クラスの活動の順序と時間-----	63
表 11	2010 年 8 月カポエイラの幼児対象クラスの活動内容と時間-----	64
表 12	2003 年のブラジル国内外の競技大会-----	77
表 13	1997 年世界大会のステージと人数・組-----	78
表 14	1997 年世界大会の採点項目-----	78
表 15	1997 年の減点行為と減点数-----	79
表 16	ゲームの種類と時間の変化-----	79
表 17	2011 年の反則行為と減点-----	80
表 18	2013 年のゲームの種類と時間規定-----	82
表 19	性別とカテゴリー-----	83
表 20	体重階級-----	83
表 21	反則行為と減点数-----	84
表 22	ビンバ師範のビリンバウの「7 つのリズム」と対応ゲームの有無-----	101
表 23	「アマゾナス」のゲームにおける動物の動きの例-----	103
表 24	2008 年 3 月 サルバドルの劇場における上演内容-----	111
表 25	演目「カポエイラ」概要とソロ演技内容詳細-----	112
表 26	動画における 1 組のゲームの構成内容（約 15 秒～約 30 秒×3～4 組）----	112
表 27	2 つのゲームにおける演技内容-----	113
表 28	プラタフォルマの上演プログラム-----	117
表 29	プラタフォルマにおける演目「カポエイラ」の上演内容-----	120
表 30	プラタフォルマの演目「カポエイラ」の演技内容詳細-----	124
表 31	プラタフォルマの二つのカポエイラゲームにおける演技内容-----	124
表 32	演目「カポエイラ」に関するバイアとリオデジャネイロの比較-----	127

## 写真目次

写真 1	リオデジャネイロにおけるホーダの様子-----	12
写真 2	幼稚園中庭でビリンバウを弾く教師-----	56
写真 3	現在の CEMB の全景-----	94
写真 4	現在の CEMB のカポエイラ練習場-----	95
写真 5	現在の CEMB のカポエイラ練習場内（茅葺き屋根の半屋外施設）----	95
写真 6	旧 CEMB のカポエイラ練習場とビリンバウを弾くカミーザ師範-----	96
写真 7	左のプレイヤーのわき腹に、頭突きの攻撃をしているところ-----	108
写真 8	プラタフォルマの外観-----	115
写真 9	プラタフォルマのエプロン型舞台-----	116

# 序 章

## はじめに

## 序章 はじめに

### 第1節 カポエイラの概要

#### 1. 歴史的経緯

カポエイラは、ブラジル北東部のバイア州の港町サルバドル周辺において、アフリカ系黒人奴隷が過酷な労働を強いられる中で、自分の身を守る手段として行った護身の練習やダンスが基となり創造されたといわれている。特に N'golo というゼブラダンスに由来する説が有力とされ、バントゥ系民族<sup>1</sup>の文化的影響が強い<sup>2</sup> (Assunção, 2005, p.49)。創始時期については論者によって様々だが、1824年にドイツ人画家ヨハン・モーリッツ・ルゲントス

(Johann Moritz Rugendas, 1802年-1858年没)が「カポエイラ格闘 (Jogar capoeira)」というカポエイラをしている様子の絵を描いており、この頃には既に実践されていたと考えられる。



図1 ルゲントスの「カポエイラ格闘」(1824年)<sup>3</sup>

<sup>1</sup> ブラジルにおけるアフリカ出自のルーツを探る学術的な試みがなされてきているが、未だ議論は収束していない。しかしながら、おおよその傾向は見解が一致してきている。「ブラジルへの影響が顕著なのは、西アフリカの東半部（主に現在のガーナからナイジェリアにかけて）と中部アフリカの大西洋沿岸部（主に現在のコンゴ共和国からアンゴラにかけて）の二つの地域の文化とされる。前者に由来する人々や文化は『スーダン』、後者については『バントゥ（もしくはコンゴ＝アンゴラ）』というカテゴリーでそれぞれくくられる」（ブラジル日本商工会議所編，2005，p.311）。

<sup>2</sup> 論者によって起源は様々であるが、おおよその見解として一致している説を本研究では採用している。

<sup>3</sup> 出典： <http://www.ed.ac.uk/schools-departments/history-classics-archaeology/news-events/events/capoeira>（参照日 2013年10月1日）。

さらに、1835年にルゲントスの記述したものがカポエイラについての最初の文書記録であるという。それによると、当時のカポエイラはもっぱらならず者たちの遊びとされており、頭突きや足払い等でふざけあっていたのが不意に本当の喧嘩になり流血騒ぎになることもあったと記述されている（コンドゥル，2010，p.22-23）。

1830年代までカポエイラは黒人たちの遊びや楽しみの一種であると同時に、カポエイラをしていた人々の一部が警察の取締りの対象とされ、1890年には公布された刑法によってカポエイラが法の上では犯罪として指定された。リオデジャネイロやバイア地方等、地域によってカポエイラは異なる発展を遂げるが（コンドゥル，2010，pp.26-27）、奴隷制が廃止された後もカポエイラは奴隷文化の象徴であり国家の後進性を象徴するものとして帝国政府によって隠蔽されていた。しかし、1930年代の政権交代を機に多人種国家の国民統合を図るために「ブラジリダーデ」という混血性を称え、個々の人種を「混血」と捉えて同質化する戦略的な国家アイデンティティが掲げられた（テルズ，2011，pp.52-105）。そしてカポエイラはその象徴とされ、教育化・大衆化が図られたのである。その後、1950年代に当時のヴァルガス大統領によって国家的スポーツとして位置づけられた。

そして今日では、国民統合の理論が公定多文化主義に転じ、ブラジル社会における人種主義や民族人種差別を撤廃することが目指され、アフロブラジル文化が学校教育に導入されている。1930年代では「混血」の象徴とされたが、現在は逆に「アフロブラジル」というエスニシティが前面に出されているのである。2003年にはアフーマティヴ・アクションの人種政策の一つとして教育基本法改正法令 10639号によってアフロブラジル文化と歴史の教育が基礎教育段階の初等教育と中等教育において義務化された（Brasil, 2013）。

こうして、カポエイラは歴史文化教育や身体経験を伴う体育教育の教材として導入され、現在はカリキュラム化が着手されている。

## 2. カポエイラの流派<sup>4</sup>

現在、カポエイラには三大流派が存在するといわれている。1930年前後のナショナリズムの文脈においてカポエイラの流派が明確化されていった。その

---

<sup>4</sup> いくつかのカポエイラ関連邦語書籍では「流派」ではなく「スタイル」という表記が用いられているが、「スタイル」とは「3 建築・美術・音楽などの様式。型。」（池上他，2013）という意味である。一方、「流派」とは「技芸・芸術などで、方法・様式・主義などの違いから区別されるそれぞれの系統」（池上他，2013）という意味である。本稿ではより明確に意味が示されており、現状を的確に表している「流派」を用いる。

中心的な人物がビンバ師範（Mestre Bimba：本名 Manuel<sup>5</sup> dos Reis Machado, 1900-1974）であり、彼によって創出された「ヘジオナウ流カポエイラ（capoeira regional）」はバトゥーキ（アフリカ起源の男性の踊り）の攻撃的な身振りやレスリングからも影響を受け、カポエイラの新しい攻撃の型が 1928 年には完成したといわれている（アンジョス, 2010, p.83）<sup>6</sup>。そして「ヘジオナウ流カポエイラ」はその後のカポエイラ界を担う多くの弟子達を排出することとなった。カポエイラの発祥地とされるバイア州サルバドルにおいて、ビンバ師範は 1932 年にカポエイラ界において初めてアカデミア（道場）を開設し、1937 年にはバイア州によって公式なカポエイラ道場として承認された。ビンバ師範はカポエイラの技術を政府と連携して体系化したが、格闘性の高い技術へ傾倒したため、バイア地域特有のカポエイラと見なされた。そこで「地域的」を意味する「ヘジオナウ流（regional）」と称した。

その一方で、昔ながらのカポエイラは 1940 年代にパステーニャ師範（Mestre Pastinha：Vincente Joaquim Ferreira Pastinha, 1889-1981）が代表者となり「アンゴラ流カポエイラ（capoeira angola）」が確立された。カポエイラはアフリカのアンゴラへ回帰するという見解によって「アンゴラ流（angola）」と呼ばれた。しかし、純粋な伝統を継承しているわけではなく、ヘジオナウ流の対抗的流派としての新たな流派であるとの指摘もある（アビビ, 2010, p.13）。そして、現在ではヘジオナウ流とアンゴラ流の両スタイルの混淆型、あるいはヘジオナウ流を元に発展した団体等、多様な団体が生まれ、それらを総称して現代的なカポエイラを意味する「カポエイラ・コンテンポラネア（capoeira contemporânea）」（以下「現代流カポエイラ」と省略する）として 1980 年半ばから認識されるようになった（アビビ, 2010, pp.13-15）。

本研究において対象とするアバダ・カポエイラの創始者であるカミーザ師範（Mestre Camisa）<sup>7</sup>の雑誌インタビューにおける言説によると、1984 年にリオデジャネイロで開催された会議を契機に、その後オウロプレット連邦大学におけるカポエイラ雑誌で「カポエイラ・コンテンポラネア」が使われるようになり、1987 年には一般的に使われるようになったという（Abadá-Capoeira, 2010, pp.6-7）。また、アバダ・カポエイラも「現代流カポエイラ」の一種であ

---

<sup>5</sup> Manoel と書く場合もある。

<sup>6</sup> ヴィエイラとアスンソンによれば、ビンバ師範がヘジオナウ流カポエイラを開拓したきっかけは、昔からカポエイラが「バイアのヴァヂアソン（vadiacao baiana, バイアの遊び）」と呼ばれてきたことが不満だったためである（ヴィエイラとアスンソン, 2010, p.13）。

<sup>7</sup> 本名 José Tadeu Carneiro Cardoso. 1956 年バイア州に生まれた。1970 年以降のリオデジャネイロにおけるカポエイラの発展に貢献している。



るとカミーザ師範は述べている。本研究において特に断りの無い場合、カポエイラに関する記述は「現代流カポエイラ」におけるものである。

しかしながら、本研究ではこれらの流派は、外見的な形式の差異は認められるものの、少なからずカポエイラの理念として通呈する世界観があるという立場をとる。そのため、各章の主題によって、全てを包括した広義のカポエイラを論じる場合と、狭義の団体に限ったカポエイラについて扱う場合があるが、その都度説明を加える。

### 3. カポエイラの動き、形式、世界観

カポエイラの技術は、直線・回転系の蹴り、よけ、移動の動き、見せ技等があるが、特徴的なのは、基本のステップ「ジンガ」である。左右に重心を移し替え続けるジンガは、相手に動きを読まれにくくし、巧みな駆引きを可能にする。このようなゲームでは、ずる賢さや抜け目ない様子（「マリーシア

（malícia）」、「マランドラジェン（malandragem）」等と呼ばれる）が重視され、カポエイラプレイヤーの資質として求められる。相手の攻撃をよけ続けることで多様な展開が生まれる。現在は勝敗をつけることよりもそのプロセスを楽しむことが重視されている。

そして、カポエイラの動きは流派・団体によって異なるが、ゲームの原則として相手の蹴りはよけることが前提とされる。また、カポエイラの理念として、決定打はさけられ、ゲームの駆け引きにおいて相手の技を引き出しながら、自らの技も活かすというゲームが好まれる傾向にある。

「ジョゴ jogo」と呼ばれる二人で行うゲームでは、蹴りやよけを繰り返しながら心理的駆け引きを行う。その様子は時には遊びのようでもあり、時には真剣な闘いのようでもあり、役者のように演じる場面も垣間見られる。このようなジョゴはポルトガル語の動詞「jogar」の派生語であり、動詞「jogar」は英語「play」とほぼ同義語として用いられる。ジョゴの意味からも察することができるように、ジョゴには、遊びや闘い、ふざけあいのような様々な局面が包摂されている。

また、カポエイラでは楽器演奏や歌と運動が一体となって行われるという形式によっても特徴づけられる。カポエイラのゲームは人々によって作られる円隊形の中心で行われ、集会や円を意味する「ホーダ（roda）」と呼ばれる

（写真 1）。ホーダの一部をなすアフリカ由来の弦楽器や打楽器の演奏が二人のゲームの指揮をとり、ホーダを囲う人々も手拍子をしながら歌い、ホーダ全体が一体となって盛り上がる。カポエイラのゲームは、ホーダの中で常に楽器演奏や合唱との兼ね合いで進められる。ゲームの種類は、本研究で対象とする団体では、主に 5 種類ある（第 3 章第 2 節参照）。





写真 1 リオデジャネイロにおけるホーダの様子(2013 年 3 月 3 日, 筆者撮影)

今となってはカポエイラの代名詞といわれるベリンバウ (berimbau) という弦楽器の奏者が、カポエイラのゲームの種類を表すリズムを奏することで、プレイヤーは動き合わせる。時には、歌によってゲームへの忠告がなされ、歌と楽器演奏とプレイヤーの動きの相互作用によって即興的に場の文脈が創られていく。そのため、ホーダを構成する楽器奏者や輪の人々の手拍子と歌と密接に関わり合いながらカポエイラのゲームは進められ、どの要素も不可欠といえる。

このようにカポエイラは参加する者に高揚感を与えやすい形式で行われ、舞踊性、格闘性、芸能性を併せ持つ身体文化である。アフリカ系民族の文化の影響が強く、20 世紀初頭まではブラジルにおいてアフリカ系ブラジル人を中心に継承されてきた。現在はブラジル国内外において、アフリカ系ブラジル人に限らず幅広い階級、人種に普及している。

また、カポエイラにおける理念はアフロブラジル文化の民間信仰カンドンブレ (candomblé) の影響を受けており、元来魔術などのカポエイラ独特の世界観が基底を成している (アビビ, 2010, pp.71-78)。

カポエイラの師範であり、バイア連邦大学准教授であるアビビ<sup>8</sup>によると「ジョゴ」では「マンジンガ (mandinga)」と呼ばれる神秘的な魔術が必要とされる。マンジンガとは抜け目ない策略を意味すると同時に、神聖な世界とのつながりでもある。また、カポエイラにはカンドンブレにおける「神々の超自然的

<sup>8</sup> ペドロ・ホドルフォ・ジュンジェルス・アビビ (Pedro Rodolpho Jungers Abib) は、バイア連邦大学教育学部体育専攻における准教授である。

な力」を意味する「アシェ (axé)」がこもっているといわれている。これらマジンギンガやアシェに代表されるように、カポエイラの世界観は民間信仰の教えに由来する。つまり、カポエイラはカンドンブレにおける「事象への解釈の仕方」に基づいているのである (アビビ, 2010, pp.71-78)。

さて、多様な性質を帯びているカポエイラを冠する分類は、マーシャルアーツや伝統武芸、ダンス闘技等、論者やカポエイラが語られる文脈によって異なり、未だ明確な定義は与えられていない。しかし、そのような多様性が認められるのがカポエイラの特長でもある。そうした状況を踏まえ、本研究では「アイデンティティ共有意識 (エスニシティ) の存在を規定し、そうした意識を醸成する機能を備えた文化としてのスポーツ」 (寒川, 2002) である民族スポーツとしてカポエイラを捉える。

## 第 2 節 現代流カポエイラの一団体「アバダ・カポエイラ」

本研究では、リオデジャネイロを調査対象地とし、第 5 章以外はリオデジャネイロの代表的なカポエイラ団体であるアバダ・カポエイラの事例を扱う。

アバダ・カポエイラはポルトガル語で“ABADÁ-Capoeira”と表記される。

Associação Brasileira de Apoio e Desenvolvimento da Arte-Capoeira の頭文字をとったもので「カポエイラ芸術の発展と支持のためのブラジル協会」という意味である。1988 年にアバダはカミーザ師範と兄であるカミーザ・ホーシヤ大師範 (Grão Mestre Camisa Roxa : 本名 Edvaldo Carneiro e Silva, 1944~2013) と共にリオデジャネイロを本拠地に設立され、ヘジオナウ流カポエイラを源流に持つ現代流カポエイラの一団体である (Abadá-Capoeira, 2010)。

アバダ・カポエイラは、カポエイラを通してブラジル文化の普及を目的としており、ブラジルの人々の社会的立場を超えた社会的統合の契機となっている。そして、ブラジル国内はもとより海外におけるカポエイラの発展も担い、カポエイラの技術や理念の基盤強化へと、さらなる可能性を常に追い求め続けている。そのため、カポエイラの発展に寄与する新たな試みもなされている。現在、ブラジル国内外で多数の講習会を展開し、植林や資源リサイクルといった環境保全活動、献血やエイズ予防の啓発活動、貧困層の子どもへの無料授業実施のための地方自治体と連携したプロジェクト等、多数の社会活動に取り組んでいる。そして、ブラジル国内でもブラジル文化普及活動を行う優れた団体として認められている (Abadá-Capoeira, 2013a)。

ブラジル国内の 26 州 1 連邦区すべてにおいてアバダ・カポエイラは普及し

ており、海外は約 50 ヶ国においてアバダの教室が開講されている。国内外の全会員数は 40000 人を超えるという。カポエイラ組織としての規模は世界最大とされ、多数のカポエイラ関連書籍でも度々紹介されている。

### 第 3 節 ブラジルの地理的特徴と文化的特徴

次に、ブラジルという特殊な地域の文化を研究対象とするにあたり、ブラジルの特徴である多人種性と地域多様性、文化的地域区分について念頭においておかねばならない。

大航海時代、1500 年にポルトガル人に発見された時からブラジルの歴史は始まり<sup>9</sup>、先住民に加え、奴隷貿易で強制連行されたアフリカ系黒人<sup>10</sup>、ヨーロッパ系移民並びにアジア系移民等がブラジルへと移動した。そのため、ブラジルは多様な人種によって構成されている。そして人種間で交錯的に混淆した結果、肌の色や鼻や唇の形状等の身体的特徴による人種の分類が多数存在している。世界でも比較的人種混淆の進んだ多人種多民族国家である。

ブラジル地理統計院（Instituto Brasileiro de Geografia e Estatística、略称「IBGE」）によれば、2010 年のブラジルの人口は 1 億 9075 万 5799 人で、その構成は白人 47.7%、黒人 7.6%、黄色人 1.1%<sup>11</sup>、混血者 43.1%<sup>12</sup>、先住民 0.4%である（IBGE, 2010）。過半数が非白人によって構成されており「ブラジル人」の多様性が看取できる。

---

<sup>9</sup> 「ブラジルは、メキシコやペルーのように、マヤやアステカ、インカ等の先住民の古代文明が存在しないため、ポルトガル人によるブラジル『発見』のときから歴史を始め、独立までを植民地時代と呼ぶ」（ブラジル日本商工会議所編、2005, p.28）。

<sup>10</sup> 1532 年にマルチン・アフォンゾ・デ・ソウザが同行してきた奴隷がブラジル最初の黒人奴隷とされており、組織的な黒人奴隷の導入が始まったのは 1559 年 3 月 29 日付の勅令による。1850 年に奴隷貿易禁止令が制定されたが 1855 年まで継続された。現在、導入された奴隷数は 300～360 万人が妥当と推定されている。その数は、新大陸に導入された黒人奴隷数の 37%となり、ブラジルは新大陸で最多数の奴隷を導入した（ブラジル日本商工会議所編、2005, pp.221-222）。

<sup>11</sup> 黄色人という訳語は、『現代ブラジル事典』（ブラジル日本商工会議所編、2005）において、「統計上の人種分類」として記載されている。その分類は、白人（branca）、黒人（preta）、混血者（parda）、黄色人（amarela）、先住民（indígena）である（ブラジル日本商工会議所編、2005, p.219）。

<sup>12</sup> 「混血者」とは IBGE の人種分類の「パルダ（parda）」の訳語であり、『現代ブラジル事典』において採用されている。パルダとはポルトガル語で「褐色、茶色がかった、黒っぽい」という意味だが、同書における人種表記としては「白人とも黒人ともいえないという意味での混血者」とされている（ブラジル日本商工会議所編、2005, p.219）。しかし、全国的に共有されるパルダの分類は、白人と黒人の混血であるムラタ（mulata）、白人とインディオの混血カボクロ（caboclos）、黒人とインディオの混血であるカフゾ（cafusos）等があり、それらの中間型もあるためパルダは大変大雑把な分類である（荒井、1983, p.47）。

また、ブラジルは IBGE によると面積は 851 万 5767.049 m<sup>2</sup>であり (IBGE, 2013) 日本の 23 倍の広大な面積を有している。よって、地域ごとに気候や地形、環境等の地理的条件の差が大きい。

そして、ブラジリア大学の創立者のひとりである文化人類学者ダルシー・リベイロはブラジルの文化と歴史に根ざした民族人種分類を「5 つのブラジルの島」と表現している (住田, 2005, p.309)。リベイロによれば、ブラジルの多様性を含意して、国名の **Brasil** を複数形にした「オス・ブラジス」 (os blasis) と称し、5 つの民族人種の分類を示している (Ribeiro, 1995, pp.267-407) <sup>13</sup>。

堀坂によれば、ブラジルはこのような「オス・ブラジス」の多様性に加えて、未開と近代、先進性と後進性、繁栄と貧困が同居する二極構造・二重構造を指して「コントラストの国」という表現も使われてきた (堀坂, 2012, p.19)。そして、多様な国土や人種を統合することが、ブラジルが長年抱えてきた中心的な課題であった (堀坂, 2012, p.20)。

堀坂は、2010 年代の 10 年間は、ブラジルの「二つの統合」において重要な時期であると指摘している。すなわち「空間的な統合」と「社会的な統合」である。前者は広大で変化に富んだ国土を有機的にまとめて活用するための統合で、後者は格差ゆえに意識や生活様式に深い亀裂が生じていた国民を一体化させるための統合である (堀坂, 2012, p.20)。

本研究で着目するのは、ブラジルの「社会的な統合」の文脈における民族スポーツ、カポエイラをめぐる文化・教育政策とその実践である。特に 2003 年から 2010 年のルーラ大統領<sup>14</sup>の時期の現代における政策を対象とする。

#### 第 4 節 問題背景と研究目的

カポエイラは、先述したような人種混淆、地域多様性が認められるブラジルのナショナリズムに二度に渡って取り込まれてきた。

そして一度目は 1930 年代の「多人種性」を不可視化するナショナリズムの

---

<sup>13</sup> 5 つの分類とは、(1)アフリカのブラジルの「ブラジル・クリオウロ」、(2)先住民系混血的ブラジルの「ブラジル・カボクロ」、(3)北東部奥地住民的ブラジルの「ブラジル・セクタネージョ」、(4)サンパウロ内陸部住人的ブラジルの「ブラジル・カイピーラ」、(5)南部人的ブラジルの「ブラジル・スリーノ」である。

<sup>14</sup> ルーラ大統領は、35 代目大統領として 2003 年から 2010 年までの 8 年間就任していた。ルーラ政権は人種主義是正に積極的に取り組んだ。そして政権発足後の 2003 年に人種平等政策を主管する、大臣ポストの特別庁 (人種平等推進政策特別庁、SEPPIR) が大統領府のなかに設けられ、人種問題を扱った審議会やフォーラム、全国会議が開催されるようになった (堀坂, 2012, p.113)。



象徴として、二度目は 1980 年以降の「多人種性」を謳うナショナリズムの象徴として位置づけられた。カポエイラは政府によって恣意的に相反する社会的意味が与えられてきたといえる。

本研究は、このような相反する社会的意味を経たカポエイラが 2003 年以降の政策においてどのような社会的役割が付帯されているかを改めて検討し、実践者によって創造されるカポエイラに着目する。特にリオデジャネイロにおける、教育、競技化、観光、新種目の創造といった文脈から実証的にカポエイラの文化的固有性を明らかにすることを目的とする（図 2 参照）。

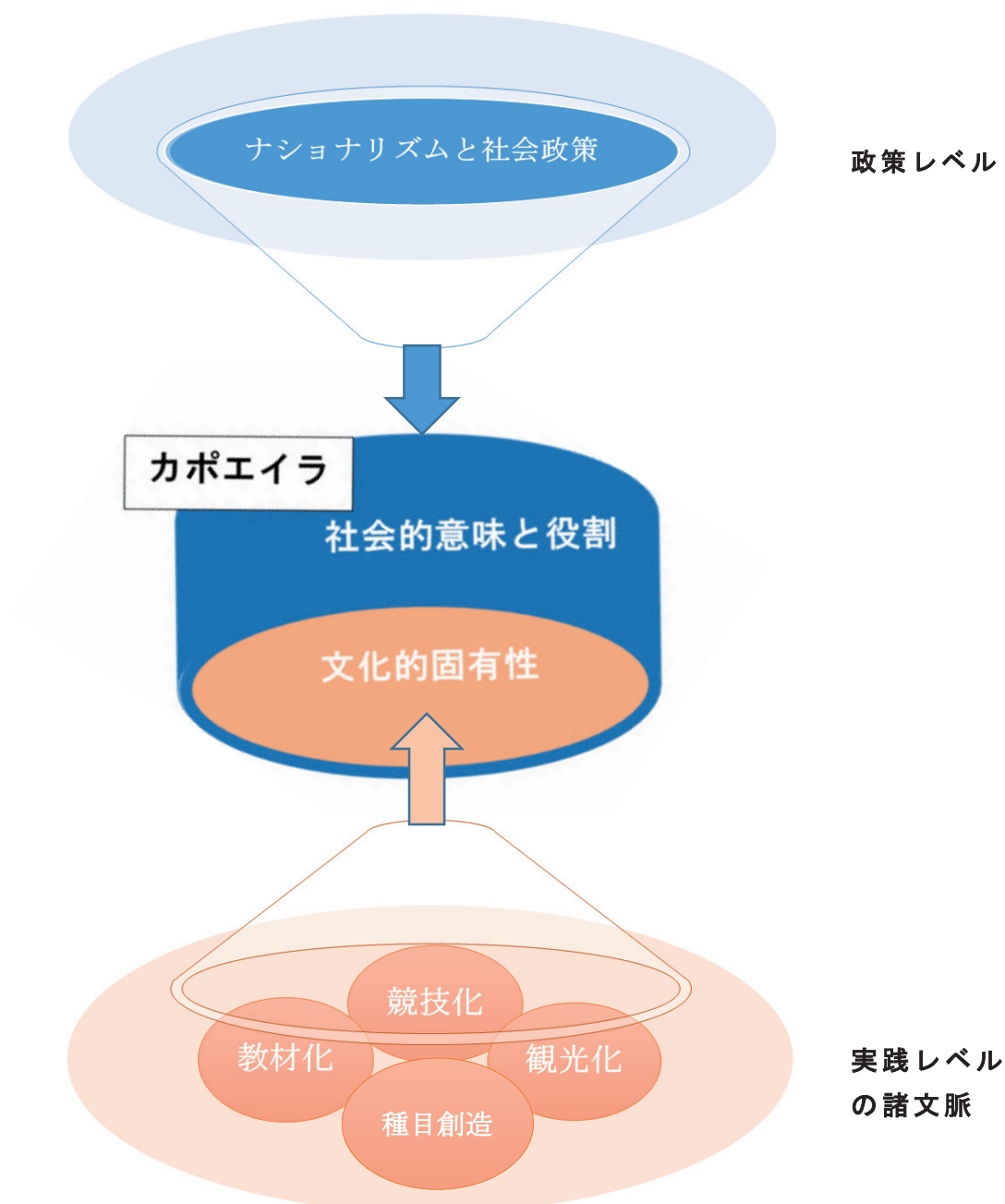


図 2 本研究の構造

（筆者作成）

尚、本研究はリオデジャネイロにおけるフィールドワークに基づく文化人類学的手法によってなされる。対象地域の選定理由は三つ挙げられる。

一つ目は、先述したとおりブラジルは地域の差異が大きい、カポエイラの実践内容も地域によって少なからず違いが認められると考えられる。よって、本研究ではまず地域を絞った上で、実践者レベルの活動に着目することが必要と判断された。

二つ目は、リオデジャネイロは観光地としても著名であり、新しいものに対する寛容な風土であるため、カポエイラにも何らかの影響を及ぼす外的要因が少なくないと考えられたからである。

三つ目は、リオデジャネイロの人種構成である。ブラジル地理統計院 (IBGE) の 2009 年の調査によると、ブラジルの主要 6 都市における〔「白人」と「黒人・混血者」〕の割合は、北部のレシフェが〔32.7%と 60.7%〕、北東部サルバドルが〔14.9%と 84.5%〕、南東部のベロオリゾンテが〔39%と 60%〕、南東部のリオデジャネイロが〔54.4%と 45.4%〕、南東部のサンパウロが〔62.6%と 35.6%〕、そして最後に南部のポルトアレグレが〔86.8%と 13%〕であった (LAESER, 2012)。北部・北東部は比較的「黒人・混血者」の割合が高く、その一方で南部・南東部は比較的白人の割合が高い。

本研究は、アフロブラジル文化としてのカポエイラの現況を捉えるため、それぞれの人種がある程度混在している地域が望ましいと考えられた。したがってリオデジャネイロが適切であると判断された。

## 第 5 節 先行研究と問題の所在

本研究における先行研究は二つの問題から絞られる。一つはブラジルのナショナリズムにおける国民形成政策に関する問題である。そしてもう一つはカポエイラそのものについて諸学問領域で関心が寄せられている問題である。

ブラジルのナショナルアイデンティティ形成に関する研究は、すでに 1 世紀近くなされてきている。社会学者ジルベルト・フレイレの著書『奴隷小屋と家父長制度』ではブラジル国民の人種混雑性を後進性の象徴としてネガティブに捉えるのではなく、多様性こそがブラジルの特徴であるとし肯定的に論じている。そして、このフレイレの主張は 1930 年代のブラジルのナショナリズムの源流となった古典として代表的である (フレイレ, 2005)。

他方で、カンピナス州立大学教授のオルティス<sup>15</sup>は、ブラジルナショナリズム

---

<sup>15</sup> レナット・ジョゼ・ピント・オルティス (Renato José Pinto Ortiz) は 1947 年サン

ム研究の第一人者であるが、ブラジルのナショナルアイデンティティについて、ベネティクトの論を引いて、「ブラジルではこれまで実体主義的な発想によるアイデンティティ形成を企図してきたが、想像に過ぎなかった」と述べており、1999 年以降のブラジルにおいて新たなアイデンティティ形成に期待するという見解を示している（オルティス, 1999, p.3）<sup>16</sup>。

ブラジルにおけるカポエイラの学術研究は 1980 年代より本格化した。Falcão<sup>17</sup>らは 1980 年から 2006 年までの人文学系のカポエイラ研究の方法と傾向を総括している（Falcão et al., 2009）<sup>18</sup>。それによると、85 件の研究が該当し、内訳は博士論文が 12 件、教授資格論文<sup>19</sup>が 2 件、修士論文が 71 件、であった<sup>20</sup>。32 の大学で既にカポエイラを主題とした学術論文が提出されていた。1984 年にブラジリア大学社会学部において提出された Júlio César Tavares の修士論文『闘いのダンス：保存された兵器（Dança da guerra: arquivo-arma）』（筆者訳出）がカポエイラ研究の初の学位論文であった。他方、博士論文では 1997 年のサンパウロ大学に Eduardo Marques によって提出された『カリオカの下層社会におけるカポエイラ実践者たちの身体と精神：1850~1890 年のリオデジャネイロ（Corpo e alma dos capoeiras no submundo carioca（Cidade do Rio de Janeiro, 1850-1890））』（筆者訳出）という歴史社会学研究がカポエイラをテーマにした初めての博士論文となった（Falcão et al., 2009, p.5）。

また、1993 年には年間で 3 件の修士論文が発表されたが、2004 年では年間 17 件（博士論文 5 件、修士論文 12 件）にのぼるという。

その領域は、教育学 23 件、体育教育 14 件、歴史学 12 件、社会学 9 件、人類学 6 件のほかは、法学、政治学、心理学、文学、音楽、演劇であり、言語学

---

パウロ生まれである。1975 年にフランスの社会科学高等研究院（École des hautes études en sciences sociales）の博士号を取得し現在カンピナス州立大学

（Universidade Estadual de Campinas）教授である。ブラジルのナショナルアイデンティティ形成や文化変容に関する著書多数。

<sup>16</sup> 引用元は上智大学の研究紀要（文献一覧参照）であるが、1999 年にオルティスが来日したときの講演内容の日本語訳が掲載されている。

<sup>17</sup> José Luiz Cirqueira Falcão はブラジルのトカンチス州生まれで 1975 年にカポエイラをはじめた。1982 年にブラジリアカトリック大学（Universidade Católica de Brasília）において体育教員免許を取得し、1994 年にリオデジャネイロ連邦大学（Universidade Federal do Rio de Janeiro）で体育教育学修士号を取得する。2004 年にはバイア連邦大学（Universidade Federal da Bahia）で同領域の博士号を取得し、全国誌や国際誌で様々な記事を執筆している。現在ゴイアス連邦大学の教授で体育教育の研究者でありカポエイラ師範でもある。

<sup>18</sup> 調査方法は、データの共有と討議を行うために、約 20 回の組織的会議と 5 回の研究者の討論会が開催された。調査グループは、学部生、博士課程大学院生と教授からなる 12 人で構成された（Falcão, 2009, p.4）。

<sup>19</sup> 教授資格論文とは、博士号を既に取得済みの者が、大学院等の高等研究機関で授業を受け持つ資格を請求する論文のことである。これをもっているとその研究機関の必修科目を受け持ち、博士課程の学生の学位請求論文の審査員となる資格が認められる。

<sup>20</sup> この数字には雑誌投稿論文は含まれていない。

と芸術学においては殆ど研究がなされていない (Falcão et al., 2009, p.5)。

このように、カポエイラの研究は 1980 年代から本格化した、その分野は教育学領域を中心に、歴史学や政治学、人類学や社会学等の多岐に渡って高い関心が寄せられているといえる。こうした近年の流れを踏まえつつ、本研究の関心を同じくするいくつかの先行研究を以下に挙げる。

本研究では、とりわけ現代のカポエイラの社会的位置づけと創造される文化的固有性に着目し、実践レベルから実証する。このような研究方法は先行研究にも見出すことができる。それは、1989 年に学術雑誌に掲載された Frigerio の『カポエイラ：黒人の芸術と白人のスポーツ (Capoeira: de arte negra a esporte branco)』(訳出筆者)であり、多数の研究で引用されている。Frigerio は、カポエイラのアンゴラスタイルとヘジオナウスタイルというカポエイラ二大流派について、ブラジル国内外のフィールドワークとカポエイラ教室の練習参加に基づき、その特徴を論じている<sup>21</sup>。

具体的には、カポエイラを「芸術」「闘技」「フォークロア」「スポーツ」という異なる文脈から捉え、それぞれの特徴を実証的に導き出している。その結果、「現代流カポエイラ」としての特徴が考察される。そして「伝統的」な練習場を定義することの困難さを述べながら、現代流カポエイラの特徴を明らかにしている。つまり、Frigerio は文化人類学的手法を用い、アンゴラとヘジオナウという異なる特徴を有する流派に基づいて、当時のカポエイラの実践から「現代流カポエイラ」という輪郭を浮き彫りにしている。現代における多くのカポエイラ研究においても、Frigerio の視点は示唆に富む研究として評価されよう。そしてカポエイラを多様な文脈に布置する視点は、現代におけるカポエイラにも有用であろう。本研究も Frigerio の視点設定に倣い、複数の文脈に布置することによって共通項として浮上する現在のカポエイラの傾向を捉える。

そこで、主題と方法論に関して本研究が類する研究として Falcão の挙げた人類学研究のうち 1 件 (Reis, 1993)<sup>22</sup>と、それ以前にまとめられた民族誌研究 1 件 (Rego, 1968) を検証する。

Rego, Waldeloir によって 1968 年に出版された『カポエイラアンゴラ：社会

---

<sup>21</sup> 1983 年から 1987 年まで 4 度に渡りアンゴラのカポエイラ教室があるバイアと、ヘジオナウのカポエイラ教室のあるバイア、サンパウロ、ベロホリゾンチと、海外はサンフランシスコ、ニューヨーク、ロサンゼルスでフィールドワークを行っている。そしてカポエイラのアンゴラスタイルで有名なジョアン・ペッケーノ師範の元で自ら学んだことと文献研究によって、主題について考察している。

<sup>22</sup> 人類学の論考は次の 2 件である。訳出は筆者による。

Rego, Waldeloir. (1968) 『カポエイラ・アンゴラ：社会民族誌の試み (Capoeira Angola: um ensaio sócio-etnográfico)』 Editôra Itapua.

Reis, Leticia Vidor de Souza. (1996) 『カポエイラのゲームにおける黒人と白人：伝統の再創造 (Negros e brancos no jogo de capoeira: a reinvenção da tradição.)』 サンパウロ大学 1996 年修士論文。



民族誌の試み（*Capoeira Angola: um ensaio sócio-etnográfico*）』では、「カポエイラの語源」「衣服」「カポエイラのゲーム」「リズムと攻撃」「楽器」「歌」「歌詞の意味」「社会的カポエイラの経緯」「道場」「カポエイラ文化と社会的上昇」「映画と演劇におけるカポエイラ」「芸術作品におけるカポエイラ」「ブラジルポピュラー音楽におけるカポエイラ」「文学におけるカポエイラ」についてそれぞれ章立てられており、最後に「社会民族学的観点から捉えたカポエイラにおける変容」が考察されている。

例えば「リズムと攻撃」の章では、著名な師範の音楽リズムと攻撃の種類を列举し、差異を述べている<sup>23</sup>。その上で、民間信仰カンドンブレの入信儀式的ダンスにおける身体技法とカポエイラにおける動きにおいて、滑らかで屈曲が多用されるという動きの類似性を指摘し、カポエイラの代表的な理念であるマリーシア（ずる賢さや狡猾な戦術）の源流であると結論づける。Rego 自身がカンドンブレの祭祀であったことから、微細な動きを見極められたため詳述が可能であったと推察される。カポエイラにおける民間信仰カンドンブレとの親和性が、自らの体験知を元にしたイーミック<sup>24</sup>な記述によって考察されており、民族誌的手法による成果といえよう。

また「社会民族学的観点から捉えたカポエイラの変容」の章では、観光化によって従来のカポエイラの形式が変容を余儀なくされる状況を「社会民族学的なカポエイラの衰退」として捉えている。そして、観光化はカポエイラが奴隷文化から社会的地位が上昇したことによって生じたという因果関係を認めており、カポエイラの真正性がいかに保存されるかが課題であると指摘している。

Rego の研究は、現代においても多くのカポエイラ研究者が引用し、これらのテーマに関心を寄せた研究が散見される。1968 年当時から現代に至るまで、カポエイラの認識に多大な影響を及ぼしていると考えられ大いに参考になる。

次に、Reis, Letícia Vidor de Souza によって 1996 年にサンパウロ大学に提出された修士論文『カポエイラのゲームにおける黒人と白人：伝統の再創造（*Negros e brancos no jogo de capoeira: a reinvenção da tradição.*）』は、ホブズボウムの『創られた伝統』の概念に依拠した論考である。特に第 2 章では、1940 年代にバイア州においてカポエイラが体育授業に導入されたときの法令において「我々のフォークロアのスポーツ」「ブラジルの典型的な格闘の形式」

---

<sup>23</sup> 音楽リズムと攻撃の動きにおいて、カポエイラの師範によって名称や動き方に差異が見受けられる。

<sup>24</sup> イーミックとは言語学や文化人類学等で、ある現象を分析する方法の一つ。文化に内在する概念によってその文化を記載しようとする立場。文化の内側から分析するものである（松井, 1991, p.208）。また、観察者は 2002 年 3 月からのべ 7 ヶ月間のブラジル滞在中に行為者として大人を対象とした練習クラス約 350 時間を観察的に参加しており、イーミックな観察が可能と考えられる。

と明記されたことによって、カポエイラにおける伝統が創造されたと指摘している。また第3章では「サンパウロ中心区におけるカポエイラの再創造」として二つのグループにおける実践を中心に論じている。**Reis** はサンパウロ中心地区におけるカポエイラの再創造について、サンパウロ的格闘カポエイラが創造されたと結論づけている。

日本国内では 1996 年度名古屋大学修士論文である久保原信司の『カポエイラの地位上昇過程について：黒人奴隷のシンボルから国家的スポーツへ』が、カポエイラを主題にした学位論文として国内初出である。**Rego** や **Reis**、**Soares** らの先行研究に基づき、法的・社会的圧力を受けていた奴隷文化としてのカポエイラが国家的スポーツとしての地位を獲得する経緯について、リオデジャネイロの 19 世紀から 20 世紀の政策や社会情勢との関わりから歴史学的に論じられている。

いずれの先行研究においても、カポエイラの社会的布置の変化やカポエイラの多様性が描写されており、その当時の現況が明らかにされているといえる。特に **Frigerio** と **Rego** の研究方法は本研究においても参考にされる。しかしながら、日々の実践によって変わりゆくカポエイラの現代における様子は、現代でこそ捉えられるものであるといえよう。カポエイラにおいて新たな傾向として捉えられる変容が実践者レベルにおいて既に見受けられている。そのような実践者レベルの現在の変容に着目することが本研究の特徴となる。

そして、本研究における分析概念としてホブズボウムの「創られた伝統」を挙げる。カポエイラにおいて「伝統」が創出された時期は、アンゴラ流カポエイラが台頭した 1940 年代とあって差し支えないだろう。カポエイラの「伝統」として、その起源が「アンゴラ」にあると主張したパスチーニャ師範は古き良き伝統的なカポエイラを指向していた。しかしながら、先述の通り先行研究において、アンゴラ流カポエイラは純粋な伝統を継承しているわけではなくヘジオナウ流の対抗的流派としての新たな流派であるとの指摘もすでにあるように（アビビ, 2010, p.13）創られたものであった。しかし、その後は 1970 年代より、それまでの二大流派の新派として、それぞれの融合型、あるいは一つの流派の理念や技体系を発展させた団体等が現れ、それらの総称として「現代流カポエイラ」が認識され始めた。そして現在、カポエイラは教育政策やブラジル国内無形文化遺産登録によって国民統合のために政治利用される一方で、支配権力のおよばないところでカポエイラの実践者らがカポエイラにおいて文化的に固有なものを探し求めている現況が認められる。

本研究では、創られた伝統としてのカポエイラの次の展開として、実践者らによって探求されている文化的固有性に着目する。このような視点で論じられた研究は、ブラジル国内においてもこれまでに見受けられない。

以上のことより、本研究の独自性は次の三点に集約される。

一つ目は、リオデジャネイロという特定の地域におけるカポエイラの現況について実践者によって「創造された文化的固有性」を論じる点である。ホブズボウムの「創られた伝統」では、それらの伝統は架空であると指摘されているが、カポエイラの「創造された文化的固有性」はいかなる特徴があるのか、多様化するカポエイラの一次資料に基づき実証的に明らかにする。

二つ目は、筆者の 10 年間の実践者としての経験を生かしてカポエイラの現況を捉えることである。本研究で散見される「実践者レベルにおいて」という表現は、実践者が行っている様子を客観的事実として着目すると同時に、実践者のイーミックな視点から捉えるということも含意している。

三つ目は、日本のカポエイラ研究における文化人類学的手法による実践レベルを詳述した研究としては、本研究が初めてとなることである。先述したように久保原によるカポエイラの歴史学的研究以外に文化表象としてのカポエイラに関して数件の論考が確認されるのみである（政岡，2007a, 2007b.; 田所，2004.）。よって、本研究は教育や観光、競技化等の異なる文脈において、創造されるカポエイラの文化的固有性を、実践レベルのイーミックな視点から捉え、その全体像を照射しようとするものである。

## 第 6 節 論の展開

本題にあるエスノグラフィーという用語は、一般的にフィールドワークの結果をまとめた報告書を指す場合と、フィールドワークという調査の方法あるいはその調査の作業やプロセスそのものを指す場合があり、両者を含意する場合もある（佐藤，2002, p.285）。本研究においてエスノグラフィーとは方法論でありかつ本研究そのものを意味する。そして、フィールドワークに基づく分析を通じて、カポエイラという民族スポーツの文化的固有性とは何かという問題に接近する。

第 1 章では、ブラジルのナショナルアイデンティティ創造の変容を踏まえ、主に教育政策と文化政策の検討から現代におけるアフロブラジル文化カポエイラの社会的位置づけを明らかにする。

第 2 章は、幼児教育における教育制度とカポエイラ教育実践を並置し、新たに付帯される教育内容と目標を制度と実践の両者から考察する。

第 3 章では、アバダ・カポエイラの競技大会競技規則によって明文化されるゲームの方法や競技者の心得等から、競技化によって目指される文化的固有性について明らかにする。

第4章では、アバダ・カポエイラにおけるゲームの新種目の創造について論じる。調査期間はブラジルが2009年8月10日～8月31日、2010年8月5日～8月26日、2011年8月5日～8月25日であった。アメリカにおける調査期間は2011年11月1日～7日である。日本国内は、2013年7月6日に東京で実施されたアバダ・カポエイラのブラジル人インストラクターによる講習会（東京都武蔵野市）と2013年7月14日開催のアバダ・カポエイラ日本競技大会（愛知県小牧市）が対象とされる。主に半構造化インタビュー調査、手記記録、動画・画像記録を行った。

第5章では、劇場のショーにおけるカポエイラのエンタテインメント化について論じる。サルバドルのショーと比較することで、リオデジャネイロにおけるショーの特徴を明らかにする。調査期間は、サルバドルは2008年3月15日であり、リオデジャネイロは2013年3月2日である。ショーを行う団体は、それぞれの劇場における契約ダンサーであり、アバダ・カポエイラのカポエイラプレイヤーではない。観客向けにショーダンサーとして出演しているカポエイラプレイヤーらである。

結章では、各章において明らかにされた現況を文化的固有性の創造の観点から総括し、政策レベルとは異なる実践者レベルにおけるカポエイラの変化を照射する。

## 第7節 本論におけるポルトガル語のカナ表記について

『現代ブラジル事典』（小池、2005、p.iv）の凡例にならい、カポエイラで用いられる技名、概念等には、ポルトガル語名を併記した（原則として各項の初出のみ）。ただし、州名および日本で一般的な都市名等の地名は、原則としてポルトガル語を省いた。

小池によると、ポルトガル語をカタカナにするときの表記についての原則は以下の通りである。

- ①州、都市名等の地名の中間点は省略した。たとえば Rio de Janeiro（リオ・デ・ジャネイロ）は「リオデジャネイロ」とした。
- ②人命、地名、組織名で、アクセントの位置を示す地名の音引、撥音便は原則省略した。ただし、日本で慣用化されたものについてはそれに従った。
- ③表音については、ão は[アン]、c は e と i の前では[s]、それ以外は[k]、ch は[sh]、de は[デ]、di は[ジ]、g は e と i の前では[j]、それ以外は[g]、f は[f]、gue は[ゲ]、gui は[ギ]、h は無音、lh は[ly]、nh は[ny]、õe は[オエ]、ou は[オウ]、r は[r]（例；リオデジャネイロ）、te は常に[テ]、ti は[チ]、v は[v]、x は

[sh]とした（小池，2005，p.iv）。

具体的に本研究において用いられるカポエイラ用語を次の表 1 にまとめた。ただしブラジル国内外のカポエイラ実践者の間では、技名や特有の理念等についてポルトガル語による発音が一般的に広く用いられており日本も例外ではない。そのため、本稿でもカタカナで表記するときにはポルトガル語の発音による表記を優先させている。

表 1 カポエイラ用語のカナ表記

ポルトガル語	凡例に基づくカナ表記	本研究における表記*	意味
capoeira	カポエイラ	カポエイラ	カポエイラ
berimbau	ベリンバウ	ビリンバウ	弦楽器
roda	ローダ	ホーダ	円隊形のゲーム
jogo	ジョゴ	ジョゴ	カポエイラのゲーム
meia lua de frente	メイア・ルア・デ・フレンテ	メイアルアヂフレンチ	蹴りの一種
bote	ボテ	ボッチ	よけの一種
pandeiro	パンデイロ	パンデイロ	タンバリン
cocolinha	ココリニャ	ココリニャ	よけの一種
escopião	エスコピアン	エスコピアオン	蹴りの一種
ponte	ポンテ	ポンチ	ブリッジ
benço	ベンソ	ベンソ	蹴りの一種
martelo	マテロ	マテロ	蹴りの一種
pião de mão	ピアン・デ・マン	ピアオンヂマオン	移動技の一種
cadeira	カデイラ	カデーラ	構え
aú	アウー	アウー	側転
almarda	アルマーダ	アマーダ	回転蹴りの一種
ginga	ジンガ	ジンガ	基本ステップ
Queta de quatro	クエタ・デ・クアトロ	ケータヂクワトロ	よけ・移動の一種

※ 本稿では場合によってはブラジル・ポルトガル語の発音に基づく表記を採用する。

（筆者作成）

## 第 1 章

# ナショナルアイデンティティ再創造 とアフロブラジル文化

## 第 1 章 ナショナルアイデンティティ再創造とアフロブラジル文化

2003 年に法令 10639 号「基礎教育段階<sup>25</sup>におけるアフリカ並びにアフロブラジル文化と歴史の教育義務化」（以下、「法令 10639 号」と略す）が制定された。これは、ブラジル教育基本法 9394 号の改正法令であった。この法令 10639 号制定の影響により、ブラジルでは保育所<sup>26</sup>から高等教育機関に至るまで体育授業や課外活動としてカポエイラが取り入れられ、アフロブラジル文化と歴史の教育の一環としてカポエイラが実施されている（Freitas, 2007a.; Freitas, 2007b.; Reis, 2001.）。

また、2008 年にはブラジル文化省の管轄下にあるブラジル歴史芸術遺産研究所（Instituto do Patrimônio Histórico e Artístico Nacional、略称「IPHAN」）によって、カポエイラはブラジル無形文化遺産として登録され（IPHAN, 2008）、アフロブラジル文化の象徴として提示された。このように現代ブラジル社会においてカポエイラは従来の武術的、民衆娯楽的な性格に加えて、教育や文化遺産等の文脈において新たに意義が見出されている。そして、その身体技法や実践方法は様々な変容を遂げつつある（コンドゥル, 2010）。

本章では、次節で詳述するブラジルのナショナルアイデンティティ創造の変容を踏まえ、主に教育政策と文化政策の検討から現代におけるアフロブラジル文化カポエイラの社会的役割を明らかにする。

### 第 1 節 ブラジルの人種関係に対する国家的解釈の変容

ブラジルの人種関係は次のような特徴がある。

まず、ブラジルは歴史的に異人種間の婚姻比率も他国より高く、世界的にも人種の混雑が比較的進み、人種ごとの居住地が近接している。そのため、歴史的に互いの文化を共有する機会に恵まれた（テルズ, 2011）。

次に、ブラジルにおける人種は、肌の色や体型等の身体的特徴による自己申告<sup>27</sup>のため相対的かつ主観的で人種区分が曖昧である。

<sup>25</sup> 基礎教育段階（Educação Básica）とは、教育施設名では保育園（0～3 歳）、幼稚園（4～5 歳）、義務教育の初等学校（6～14 歳）、中等学校（15～17 歳）をさす（堀坂, 2012, p.126）。

<sup>26</sup> 法令には、基礎教育段階の初等教育（義務教育）と中等教育の 6 歳～17 歳において義務化されると明示されており、保育園と幼稚園は義務ではない。しかし、実際にカポエイラを課外活動として取り入れている園も少なくない。

<sup>27</sup> ブラジルでは人種分類に関する法律は存在せず、肌の色や髪型、髪の色、唇の形等の身体的特徴に基づく自己申告制とされている。



そして、ブラジルの人種関係は、社会階級という垂直的關係と、人種的な流動性や異人種間の婚姻等の水平的關係の両軸から捉えることによって、ブラジル社会の制度や人種關係の問題が浮き彫りになるという（テルズ，2011，pp.32-34）。つまり、ブラジルにおける人種關係において、上級層～中間層は白人、貧困層は非白人という社会階級（垂直的關係）は、人種の自己申告という流動性や異人種間の婚姻等（水平的關係）の原因またはその結果として見られることが多い（テルズ，2011，p.33）。

ここで本節での語彙を整理すると、ブラジルにおけるこうした特殊な人種關係について「混血」、つまり同質性を意識した場合、本稿では「人種混淆」とする。それに対し、多種多様な人種の差異に着目し、個々の存在を認める見解を「多人種」とする。「人種混淆」と区別した上で、「人種混淆」と「多人種」という政府の見解の変容について本節で総括する。

ブラジルナショナリズムのキーワードともいえる人種關係に対するブラジル政府の見解は 19 世紀以降めまぐるしい変容を遂げている。19 世紀を通じてブラジルでは「人種混淆」が国家の後進性につながると考えられていた。そして 19 世紀後半から 20 世紀初頭には遺伝的な解決策としてブラジル独自の優生学に立脚した白人化<sup>28</sup>が奉じられた（テルズ，2011，p.49）。けれども一転して、1930 年代から「人種民主主義」<sup>29</sup>の証拠として、「人種混淆」を肯定的に評価するようになった（テルズ，2011，p.49）。このような「人種混淆」をブラジルらしさと捉えた「混血」のナショナルアイデンティティが国民形成の促進剤となった（住田，1979）。

しかしながら、この「混血」という考え方は様々な人種を同質化することに繋がり、ブラジルの「多人種」性が不可視化されてしまった。結果的に、「混血」のナショナルアイデンティティのもとで、人種主義は根絶に至らなかった。さらには 1968 年から 1974 年の経済発展により経済的格差も生じ、白人を中心とする中間層と非白人を中心とする貧困層との人種的不平等は拡大した（伊藤，2010，p.48）。

その一方で、1950 年代のユネスコにおける人種関連のプロジェクトの成果や、1970 年代に大西洋圏で展開されたネグリチュード運動がブラジルにも波及し、現実の人種主義を隠蔽することに繋がる「混血」という考え方に対する

<sup>28</sup> 伊藤は、ブラジル独自の優生学に立脚した「白人化」について、「黒人と混血人は劣等であるという認識を再確認しながらも、生殖能力に優れ遺伝的にも優位にある白人と非白人が人種混淆することで、黒人の要素は消去され、最終的には、ほとんど白人のブラジル人が生み出されるとされた」と述べている（伊藤，2010，pp.46-47）。

<sup>29</sup> 「人種民主主義」とは、ブラジル人社会学者のジルベルト・フレイレが代表的著書『大邸宅と奴隷小屋』で主張した考えである。「民主主義」という語は、政治制度よりも同語スペイン語のコノテーションである「友愛」や流動的な社会關係のニュアンスが強い（伊藤，2010，pp.47-48）。



黒人運動が本格化した（鈴木，2009.：北森，2011）。1980年代に黒人の地位に関する特別審議会がサンパウロ州をはじめ各州に設立され、1988年には新ブラジル憲法第215条を受けて黒人運動を推進する「パルマレス財団」<sup>30</sup>が文化省の管轄下に設立された（テルズ，2011，p.88）。

その結果、ブラジル社会の根深い階級意識<sup>31</sup>と人種・民族による偏見や差別に対して、現在、政府は現代ブラジルにおける社会問題とする認識を示している。そして国家政策の一環として教育によってそれらの偏見をなくすことを掲げ、それぞれの州・市で政治経済的コストに応じて具体的な施策をおこなっている（テルズ，2011，p.38）。

その「社会的排除」を是正する契機となったのは、1888年の奴隷制廃止後、その翌年に連邦共和制に移行して以来4度目の制定となった1988年憲法であった（堀坂，2012）。基本原則をうたった第1編における第3条第4項の中で「出自、人種、性別、皮膚の色、年齢に関する偏見および他のあらゆる形態の差別なしに、すべての者の福祉を促進する」と宣言しており、この頃から女性や子ども、高齢者の人権を保護する法律が成立した<sup>32</sup>。そして、ブラジル社会の雰囲気社会的に格差是正に取り組む「社会包摂」に変わってきたのはここ四半世紀のことである（堀坂，2012）<sup>33</sup>。

つまり、ブラジルにおいて1930年代の「人種民主主義」に立脚する「混血」というナショナルアイデンティティは、結果的に個々の人種的差異の不可視化をもたらした。そして1980年代を境にブラジルの国民統合の論理は「多文化主義」に転じた。それは、現在のブラジルにおける人種主義の現況を認めたくて「多人種」性を前提としたイデオロギーであった（伊藤，2010，pp.51-52）。

近年の多文化主義という包摂的イデオロギーによる政策は、2000年代になりようやく着手された。2003年にルーラ大統領率いる政権発足後は、人種平等政策を主管する大臣ポストの特別庁が大統領府のなかに設けられ（堀坂，

<sup>30</sup> 同財団は、そのホームページ（<http://www.palmares.gov.br/?lang=en>，2013年6月1日参照）によると「ブラジル社会の形成時に優れた黒人からもたらされる影響が生み出す文化的・社会的・経済的な価値を促進し保持すること」（筆者訳出）を目指している。さらに、同財団は「黒人の歴史や文化から生じた発展へ黒人が参加する可能性を生み出す公的な政策を作り出し実施する」ことを目標としている（テルズ，2011，p.88）。

<sup>31</sup> それは植民地から国家へ移行する際に戦争や大改革を伴わずに行われたため奴隷制に基づく社会構造がそのまま引き継がれたことに起因する（テルズ，2011，p.50）。

<sup>32</sup> 1985年にサンパウロで「女性保護のための警察署法令」，1990年に「子ども・青年法典」，2003年に「高齢者法典」，2010年に「人権平等法典」等の法律が公布された。

<sup>33</sup> ブラジルでは、現行の憲法で不足しているところを随時法令で改正し、現在の社会を円滑にする方法がとられている。他国から見ると大変奇妙に見えるかもしれないが、それだけ憲法の整備が発展途上であることの現れである。

2012)、ルーラ大統領によってブラジル史上初めて主要大臣に 3 人の黒人ならびに混血人が選ばれた<sup>34</sup> (テルズ, 2011, p.123)。そして、1990 年代後期から起こった社会的公正への国際的な関心の高まりの影響を受け、2000 年初頭からブラジルにおいても平等の原則の効果的な実施の追求としてアフーマティヴ・アクションが実施された。ブラジルの人種問題に通暁しているアメリカ人社会学者のテルズの言葉をかりれば、「この新たな局面は、主として人種主義が新規に認定されたこととそれに対する政府の是正の試みに表れている」(テルズ, 2011, p.38) といえる。

また、アフーマティヴ・アクションの一環として、2003 年には基礎教育段階におけるアフリカとアフロブラジル文化歴史の教育義務化が法令 10639 号で定められた (Rocha, 2006)。さらに 2008 年には法令 11645 号によって先住民文化の歴史に関する教育も内容に加えるよう一部改正された (Governo Federal do Brasil, 2013a)。2009 年にはその実施を普及するための国家計画が策定され、人種主義を認めた上で、多文化主義としての包摂的政策が具現化されている。

そのアフーマティヴ・アクションの教育政策については後述するとし、アフーマティヴ・アクションの対象とされたアフロブラジル文化と「アフロ系子孫 (afrodescendente)」のエスニックアイデンティティについて次節で検討する。

## 第 2 節 アフロ系子孫のエスニックアイデンティティ形成

ブラジルの国家形成の枠組みにおいて、「アフロ系子孫 (afrodescendente)」は先祖がアフリカに出自を持つエスニックグループである。そして、彼らによって共有されている文化的アイデンティティはアフロブラジル文化として知られている。アフロブラジル文化の習慣や行動様式は、料理、ダンス、民間信仰、衣装、音楽等、多岐にわたるが、なかでもカポエイラは当該文化の象徴的な闘技とされ、後述するブラジル憲法でも触れられているように「国家的スポーツ」とされている (Governo Federal do Brasil, 2013b)。

さて、石橋によれば、アフロ系子孫は「15 世紀末より 400 年のあいだに大西洋奴隷貿易によってサハラ以南のアフリカから強制連行され、奴隷化され、その後の抵抗過程を経て今日のアメリカ大陸諸社会の創建に寄与した人々の子孫」

---

<sup>34</sup> このときの文化省大臣が著名なポピュラー音楽の歌手兼作曲家のジルベルト・ジルであった (テルズ, 2011, p.123)。

を意味する（石橋, 2009, p.256）。この定義は、国連反人種主義・人種差別撤廃世界会議に先立つ 2000 年のアメリカ大陸準備会議（於チリ、サンティアゴ）においてラテンアメリカ各地のアフロ系運動家による熟議によって採択された（石橋, 2009, p.256）。

アフロ系子孫の持つエスニックアイデンティティは、元々は（カトリック、プロテスタント、民間信仰カンドンブレの）異なる宗教と（ブラジルや、西アフリカの民族 Gêge や Nâgo 等の）異なるアイデンティティから成る複数かつ、それぞれが重複する「想像の共同体」<sup>35</sup>によって形成された（Selka, 2007, p.2）。

ブラジル北東部に位置するバイア州は国内で最も黒人や混血人の居住率が高い地域である。テルズによる居住区と人種構成調査<sup>36</sup>によれば、特にサルバドル市<sup>37</sup>は、市民の 77%が黒人と混血人で構成されている（テルズ, 2011, pp.296-300）<sup>38</sup>。また、2010 年のブラジル国勢調査によれば、市民の 93.8%が非白人居住者であるとの報告もあり（IBGE, 2010）、統計的にはその比率に増加が認められる<sup>39</sup>。テルズによると、サルバドルにおけるアフロ系子孫の居住地域が孤立した状況は、そのアイデンティティ形成や維持の主な決定因子であった（テルズ, 2011, pp.310-311）。

Selka はサルバドルにおけるアフロ系子孫のエスニックアイデンティティが形成されるまでの 4 段階について、Nishida の論を引いている<sup>40</sup>。

第 1 段階は植民地時代にアフリカ出身の奴隷が黒人人口の大部分を形成していた時期であり、エスニックアイデンティティの最も重要な根源が供給された。

第 2 段階は、独立後（1831 年～1850 年）の新たなアフリカ人がほとんど導

---

<sup>35</sup> アンダーソンの「想像の共同体」概念を意味する。Matory は国家とエスニックの「想像の共同体」構築の観点から、国家形成においてアフロブラジルのエスニックアイデンティティを利用した政策が混血という均質性への対立項を与えた（Matory, 2005）と主張しており、Selka はこれに依拠している（Selka, 2007, p.2）。

<sup>36</sup> テルズの調査データは「ブラジル上位 10 およびアメリカ合衆国上位 8 の大都市圏における文理の指数と人種構成（1980 年）」という名称である。本調査は、ブラジルの指数は 1980 年のブラジルの国勢調査の調査区域レベルで計算されている（テルズ, 2011, pp.295-297）。

<sup>37</sup> サルバドルは、1549 年から 1763 年までブラジル建国の首都として栄えた。また、ブラジル屈指の貿易港として奴隷貿易の拠点となった。そうした歴史的背景によって、現在も非白人の割合が他地域よりも高くなっている（金七ほか, 2000, pp.18-49）。

<sup>38</sup> ブラジルの人種構成の統計データについて、テルズによれば、人種分類に対する教育についてや人種構成に関する研究は一つの場所に集中しがちであるために、地域による人種構成の違いに言及している著作はほとんどないか、全く存在しないという（テルズ, 2011, p.152）。

<sup>39</sup> ブラジルにおける人種は、自己申請によって決定される。そのため 1970 年代と 2000 年代では、社会的包摂の風潮が高まったことも黒人の割合が統計上増加した一因と考えられると指摘されている（テルズ, 2011, p.81）。

<sup>40</sup> Selka による引用元は、Nishida, Mieko.(1991)Gender, Ethnicity, and Kinship in the Urban African Diaspora: Salvador, Brazil, 1808-1888. Ph.D.dissertation, Johns Hopkins University.であるが、筆者は未読である。

入されなかった時期であり、結果としてアフリカの民族間に新たな「アフロブラジル(Afro-Brazilian)」のアイデンティティが形成され始めた。

第3段階（1850年～1870年）は、奴隷貿易廃止後に「アフロブラジル」のアイデンティティが定着し、第4段階（1871年～1888年）では、ブラジルで生まれたメスチソ（混血）がサルバドルにおいて黒人よりも数を上回るようになる。彼らの多くはアフリカ由来というアイデンティティを持たず、今日ではこの帰属意識の欠如がブラジルにおけるアフロ系子孫の連帯意識に関する活動において大きな問題となっているという（Selka, 2007, pp.18-19）。

Selka の指摘するように、現代ではこうした「アフロブラジル」のエスニックアイデンティティは、自ら何者であるかを表す「名乗り」としては薄れつつある可能性もある。しかし一方では、政策に掲げられることで他者による「名付け」を通じて相互作用が生じ「アフロブラジル」のエスニックアイデンティティは形成されているといえよう。

尚、エスニックアイデンティティとエスニシティについてここで明確にしておく。国民国家の枠組みにおいて、他の同様な集団との相互行為的状況のもとで出自や文化的アイデンティティを共有している集団をエスニックグループというため（石川ほか, 1993, p.101）、「アフロ系子孫」はエスニックグループとして捉えられる。その一方で、エスニシティはこうしたエスニックグループが表出する性格の総体を指しており（石川ほか, 1993, p.101）、本稿において「アフロブラジル」とした場合、「アフロ系子孫」が共有するエスニックアイデンティティの特質としてのエスニシティを意味している。

### 第3節 ナショナルアイデンティティを構成するエスニシティ

ブラジル政府のウェブサイトによれば「アフロブラジル文化のカポエイラ」は10年間法律によって禁止された<sup>41</sup>が、1930年代にはようやくカポエイラの実践が認められた。そして文化的顕現としてのスポーツという一つの変化が生じ、1953年にはビンバ師範<sup>42</sup>によってヴァルガス大統領に披露された。大統領はカ

<sup>41</sup> ブラジルは、1888年に奴隷制が禁止された翌年に帝政から共和制へと転じた。その当時、奴隷だけでなく低階級層もカポエイラに興じていた。社会的に弱い立場でありながらもアフロブラジル文化によって生き生きとしている彼らを抑圧するためにアフロブラジル文化が規制の対象となった。そうした中、カポエイラ実践者には犯罪に手をそめる者や政治に関与する者も現れた。その結果、共和国刑法によって1890年にカポエイラが犯罪と定められ、処罰の対象とされた（アブレウ, 2010, p.35-42）。それは、事実上1905年に他の法令で解除されるまで続いた（Correio, 2012）。

<sup>42</sup> 1930年代のカポエイラの体系化を牽引したバイア州のカポエイラの師範である。現在活躍する多くのカポエイラ師範は彼の生徒であった（序章参照）。

ポエイラを大変気に入って、『素晴らしい真の国家的スポーツ』と呼んだ」(Governo Federal do Brasil, 2013c, 筆者訳出)と解説されている。

カポエイラは、2010 年の憲法改正法令 12288 号で、ブラジルで創造されたスポーツとして認知されている (Governo Federal do Brasil, 2013b)。法令 12288 号では「第 4 節 スポーツと余暇」にて、第 21 条及び第 22 条でカポエイラについて述べられている。法令原文 (筆者訳出) は以下の通りである。

第 22 条 カポエイラは、ブラジル連邦共和国憲法第 217 項にあるように、ブラジルで創造されたスポーツとして認知されている。

1. カポエイリスタ<sup>43</sup>の活動は、スポーツ、闘技、ダンス、音楽等、カポエイラが露出されている全様式において認知されており、国土の全域で自由に実践されている。
2. 公立及び私立の機関(施設)において、カポエイリスタと、伝統的に公認されている師範らによって、カポエイラの指導が許可されている。(筆者訳出)

その法令において、カポエイラはブラジルで創られたスポーツであるとし、カポエイラの多様性を認めている。そして、ブラジル全土における実践を保証し、カポエイラの指導許可も明示している。現在、カポエイラはブラジルの 26 州 1 連邦区すべての地域に普及している<sup>44</sup>。1930 年代にヴァルガス大統領によって「真の国家的スポーツ」と認められていたカポエイラは、「混血」の象徴としてであった。しかし、2010 年の法令において「ブラジルで創られたスポーツ」と明示されたことによって、カポエイラは「多人種」の象徴としての国家的スポーツの地位を確立したといえよう。

このように、カポエイラは 1930 年代に「混血」のナショナルアイデンティティが掲げられた際に「混血」の象徴として大統領によって認知され、それまでの奴隷文化という認識からブラジルの「多人種」性を不可視化する国家的スポーツとして中産階級に普及するに至った。一方、2000 年以降は、反人種民族主義の表れとして、法令 10639 号によってアフロブラジル文化とアフリカの歴史が私立・公立学校の基礎教育段階で教えられるべき重要な内容として公示された。そして「多人種」性を明示する文化として「アフロブラジル」というエスニシティの象徴であるカポエイラが公文書によって改めて提示されたのである<sup>45</sup>。

<sup>43</sup> カポエイリスタとはカポエイラ実践者のこと。

<sup>44</sup> 現在のカポエイラは流派も多種多様であり、実践方法や身体技法に地域的差異が認められ、それらを見捨てることはできないが、ここではそのような差異に着目するのではなく、差異が認められるカポエイラを包括して捉えており、本研究ではそのようなカポエイラを対象としている。

<sup>45</sup> 先に述べた先住民文化も同様に、2008 年に法令 11645 号によって教育が義務化さ



さて、人種混淆は将来的にも進む可能性もあるという点<sup>46</sup>に留意すると、少数派であった混血者が多数派へと人口比率が変化しつつあるなかで、ブラジルにおけるアフロ系子孫のエスニックアイデンティティもまた不明瞭なものとなりつつある。こうしたなか、境界が曖昧になったエスニックアイデンティティをナショナルアイデンティティに対置される小さな分節として捉えるのではなく、ナショナルアイデンティティを構成する一部として公認し、その再創造へと取り込んでいこうとする思潮が台頭している。

また、エリクセンは、エスニシティを文化実践によって後天的に獲得することについて次のように述べている。

いわゆる「伝統的」な人びとを近代的な国民国家に取り込んでしまうと、象徴的な世界観が多く局面で姿を現す。実践と表象という点で人びとは類似性を増す。つまり、意思疎通のために身につけた能力や、当然のように受け止める日常のことがら一つまり文化一が共有されるようになる。こうした状況では、人びとは以前にも増して自らの生活様式を振り返り対象化して文化とか「伝統」だとみなすようになる。このようにして、人びとは抽象的な共同体意識と想像上の共通の歴史を有する「一つの民族」になる(エリクセン, 2006, p.165)。

この指摘によれば、ブラジルにおけるアフロ系子孫のエスニックアイデンティティの境界が曖昧になりつつも、アフロブラジル文化の共有によって共同体意識を有することになる。つまり、エスニシティがナショナルアイデンティティ形成の一助となる。

さらに、エリクセンは近代教育とエスニックアイデンティティについて次のように述べている。

政治目的のための歴史操作、選択あるいは再解釈は、エスニックに基づく忠誠心を作り出し、再創出する際には重要な行為となる。

このように大衆教育は、文化を標準的に具象化するときに効果的な補助と

---

れ、重要な教育内容とされている。

<sup>46</sup> 1970年の「国連人種差別撤廃委員(CERD)」への報告書の1972年の補遺において、ブラジル政府は「人種混淆が急速に増えていることが特筆される」と報告した(テルズ, 2011, p.75)。また、1940年から1991年までの期間に黒人人口の割合が14.66%から5.00%へ、白人人口の割合は63.58%から51.70%へ低下した。一方、混血人の人口は21.32%から42.67%へと2倍以上増加しており、これら国勢調査のデータ(Beltrão and Novellino, 2002, p.15)により、人種混淆がブラジルの人種構成の変化を引き起こす主要因であることが明らかになった。しかし、人種分類は人の一生のうちで変わりうるため、人種混淆よりもむしろ人種分類の変更が生じている可能性もある(テルズ, 2011, pp.79-80)。

なる。これによってエスニックアイデンティティが合法化されていくことになる。「我われ国民」とか「我われの文化」というのは歴史的な文化の継続性を前提とするエスニックアイデンティティを行き渡らせるための重要な道具となる(エリクセン, 2006, p.175)。

これに基づいてブラジルの政策の構造をとらえてみる。アフリカとのつながりを重視したアフロブラジル文化や歴史が、現代において保育所・幼稚園・小学校・中学校という基礎教育段階における教育内容とされることにより、学習者のアイデンティティを形成する一助となる。そして、エリクセンが述べたように共同体意識が生成される。現在、ブラジル政府は多文化主義国家として大衆教育を通じて「アフロブラジル」というエスニシティを活性させ、標準化し、共同体意識、つまり新たなナショナルアイデンティティを創造する企てに着手している。

そして、「国家的スポーツ」かつアフロブラジル文化の表象であるカポエイラによる教育は、身体的経験を通じたナショナルアイデンティティの創造と形成へ寄与することが期待されている。その目的はブラジルの歴史文化理解による人種差別・偏見の撲滅にある。「アフロブラジル」という新たなエスニシティを包摂するナショナルアイデンティティを創造しているブラジルは、「多人種」性を肯定的に解釈するために、政治主導でエスニシティをナショナルな範疇へとシフトさせることで多文化主義国家を実現しようとしている現状が読み取れる。次節では、教育省と州や市レベルの政策を中心にアフロブラジル文化歴史教育としてカポエイラの教育内容がいかに示されているのかを検討する。

#### 第4節 ブラジル政府の国民統合政策とカポエイラの教育内容

##### 1. 2003年制定法令10639号のアフロブラジル文化と歴史の教育義務化

ブラジルにおける教育は、1961年に教育基本法が制定されるも、少ない予算や政治介入による非効率的な予算執行、エリート教育に偏重した風潮等により初等教育の質の低下や地方によるばらつきが生じ、東アジア途上国やラテンアメリカの主要国に比べても立ち遅れていると言われて久しい(堀坂, 2012)。それを受け、1990年代後半より予算や制度面での改革や政策が施され、2021年には基礎教育開発指数のレベルをOECD(経済協力開発機構)諸国並みに引き上げる計画が立案された(堀坂, 2012)。このように教育改革の只中にあるブラ

ジルでは関連する法律も随時整備・改正され<sup>47</sup>、1996 年 12 月に制定されたブラジル教育基本法 9394 号の一部修正として 2003 年に法令 10639 号が制定された。

ブラジル連邦共和国の公式ウェブサイトに記載された法令本文（*Governo Federal do Brasil, 2012b*）によると、本法令によって基礎教育段階におけるアフロブラジル文化歴史教育の義務化が定められ、第 26 条 A-1 項ではアフリカの歴史並びにアフロブラジル文化の歴史、そしてブラジル国家社会形成へのアフリカ系ブラジル人の貢献等が主な教育内容として定められた。また、第 26 条 A-2 項ではその教育内容はブラジルの学校カリキュラムであるブラジル芸術文化、ブラジル文学・歴史、体育の全領域において執行されるとされている。

本法令上では、「アフロブラジル文化」の具体的な内容については言及されていない。したがって「アフロブラジル文化」と政府に公認されているカポエイラのような身体文化の他に、ダンスや音楽、料理、文学等が教育内容となりうると考えられる。

また、ブラジルの教育制度についてカルヴァーリョは次のように述べている。

ブラジルの教育制度の形態は、ブラジルの行政機関モデルに直接関連している。ブラジルの行政機関(すなわち連邦、州、市、連邦区)は極めて分権的であり、なおかつ 1988 年の憲法により保証された自治が広く行き渡っているため、ブラジルには、ブラジリア連邦特別区の教育制度に加えて、26 の州に 5507 の地方教育制度が存在している(カルヴァーリョ, 2008, p.165)。(和訳文を引用)

よって、地方自治体ごとにアフロブラジル文化教育に関する規則等が定められ、政策の実施状況も異なると判断できる。

また、私立と公立ではブラジルの教育制度における役割が異なり、「公立は運営主体（連邦、州、市）の異なるレベルに分類されており、それぞれブラジル憲法に則った教育的責務を負っている」（カルヴァーリョ, 2008, p.171）。また「市は基礎教育（就学前教育と初等教育、とくに低学年の初等教育）の提供を優先することが求められて」いる（カルヴァーリョ, 2008, p.171）。

後述するリオデジャネイロ州における J 幼稚園の事例のためにも、同州の教育方針をみておく。2009 年に作成されたリオデジャネイロ州の教育政策(Plano estadual de educação do Rio de Janeiro)によればアフロブラジルとアフリカの文化歴史の教育の実践について、次のように明記されている。

---

<sup>47</sup> 現在、ブラジル連邦共和国の憲法は 21 年続いた軍事政権から文民政権へ 1985 年に移譲後に制定された「1988 年憲法」であるが、憲法で規定した内容の修正作業が現在進行形でつづいている（堀坂, 2012）。



1988 年のブラジル連邦共和国憲法において、州は、州民に国家的文化資源に触れさせ、文化に関する全法律を完遂するよう保証しなければならないと定めている。目的はアフロブラジルのような民族文化表象の価値を上昇させ、その普及を奨励するためである。それは国民形成過程に参加する他団体組織と同じ様に実施されなければならない(法令 215 項)。2003 年 1 月 9 日の法令 10639 号と、ブラジル教育基礎方針の法律等の決定に則り、公私立の初等教育、中等教育機関においてアフロブラジル文化歴史の教育が義務化された(26-A 項)。そして 2005 年の州法令 4528 号において条項が同様に定められた(21 項, IV号, a,b および c 号)。

これを踏まえて、アフロブラジル文化歴史の教育実施は、黒人運動組織と共に、州教育委員会と市教育委員会の連携を必要とする。そして、そのいずれの組織も、民族人種関係の教育ならびにアフロブラジルとアフリカの文化歴史を教えるための国家カリキュラム方針を実施する。そして、その動向は自治体と共同運営によって監査されなければならない。それにより計画の重要性が高まり、緊急措置として教員養成講座が実施される。本法令は民族人種問題に関連したコミュニティの発展と調査、知識の構築とその普及を奨励している。

(Secretaria de Educação de Estado do Rio de Janeiro, 2009, p.26)

(筆者訳出)

これによると、国家カリキュラム方針の確実な実施に向けて、民間組織と共に州と市という自治レベルの異なる共同体の連携の必要性が強調されていることが読み取れる。いかに共同して運営できるかが重要であると考えられ、その点における問題点も生じやすいと推測できる。また、教員養成も喫緊の課題として挙げられている。

リオデジャネイロ州と市の教育カリキュラムと教育計画については、次章でさらに詳述することとし、次項では主に初等教育段階における 2003 年以降の政策に伴う文化教育を検討する。

## 2. 2008 年のブラジル国内無形文化遺産登録とアフロブラジル文化教育

2008 年 7 月 15 日に、ブラジル文化省の下部組織である IPHAN によってカポエイラはブラジル国内無形文化遺産に登録されたことにより、アフロブラジル文化の文化遺産としての教育価値が再評価されている (Zubaran & Silva, 2012.; Baccino, 2010.)。

ラテンアメリカ地域の歴史学者 Zubaran と Silva (2012) の論文では、学校における歴史文化教育の意義というアフロブラジル文化教育の根幹にかかわる

問題が論じられている。とりわけブラジルにおけるアフロ系子孫とアフロブラジル文化遺産の位置づけの再定義がなされていることが注目される。

Zubaran と Silva によれば、ブラジルにおけるアフロ系子孫のアイデンティティは歴史的な生物学的人種主義や白人化観念形態、人種民主主義といった社会的背景によって構築されてきた (Zubaran & Silva, 2012, p.134)。そして彼らは、ブラジルにおける学校は特定のアイデンティティの創造を含む社会的見解を学ぶ場であり (Zubaran & Silva, 2012, p.133)、アフロブラジル文化は起源を異にする文化の融合という文化的相互受容によって特徴づけられ、学校における歴史教育は、文化的本質主義にとらわれない政策との連携による人種主義撲滅の方法であると述べている (Zubaran & Silva, 2012, p.135)。また、アフロ系子孫のアイデンティティが政治的に構築されたことを理解し、ブラジルにおける国民一人一人の帰属意識を守り、アフロ系子孫たちのこれまでの経験はアフロブラジル文化遺産の保護とアフロブラジル系アイデンティティ形成のための基礎であるという見解を損なわないことが重要であると主張している (Zubaran & Silva, 2012, p.136)。このように、アフロブラジル文化の歴史的特性を踏まえ、人種主義撲滅の手段として学校におけるアフロブラジル文化の歴史教育の意義が論じられている。

また、Baccino (2010) はカポエイラで必ず用いられる弦楽器ビリンバウを用いたアフロブラジル文化歴史教育について論じている。Baccino は、カポエイラは社会的文脈や地域文化、そして人々の経験に適応しながら絶え間なく変容する一つの芸術であると定義している。また、人々がカポエイラについて深く知ることはブラジル社会と文化の価値上昇と統合に寄与すると述べている。そして、カポエイラが多様な要素によって構成されていることに着目し、カポエイラの師範はすなわち芸術、身体、音、歴史や詩、言い伝えの口頭伝承の師範でもあるという。さらに、カポエイラの音楽的側面を文化遺産教育の教育内容として構成し、カポエイラの音楽に接することによって、児童のカポエイラへの興味を促すと主張している。そのような授業で児童が得た楽器演奏のスキルや歴史的背景、カポエイラの音楽への知識は、ブラジル社会と文化の価値上昇の一助となりえるという。よって、カポエイラがブラジル国内無形文化遺産に登録されたことにより、ブラジルの歴史と文化を象徴する「身体文化」として再認識された。そして、カポエイラの運動だけでなく他の構成要素も教育内容として価値が見出され。カポエイラに関する技術や知識を得ることが、ブラジル社会と文化の価値上昇へつながると解釈されるに至った。

つまり、カポエイラで行われる運動以外の要素が教育内容として位置づけられており、「身体文化」としての特徴を「文化遺産教育」へ敷衍して教育内容が構築されている様子が看取できる。

### 3. アフロブラジル文化教育の文脈におけるカポエイラ教育実践の課題

さて、こうしたアフロブラジル文化歴史の教育義務化を受け、基礎教育段階における実践を通じた課題も挙げられている。

しかしながら、アフロブラジル文化教育の文脈におけるカポエイラの教育内容の検討は、現在各教育機関レベルかつ各地域において取り組まれているものの共時的・総合的な研究は未だない。

初等教育におけるアフロブラジル文化教育並びにカポエイラ教育をテーマに扱っている論文記事は 2003 年以降、増加傾向にある。その中でもカポエイラ教育の意義や目的、教育内容について論じられている論文記事を選定した。次章における事例はリオデジャネイロ州リオデジャネイロ市であるため同地域が望ましい。しかし、地域を限定すると対象となる論文記事が皆無であったため、地域は制限せず、実践的な事例を扱った 6 件の論文記事（ブラジル人研究者によるもの）に着目する（Galindo & Galindo, 2011. ; Gomes, 2011. ; Maranhão et al., 2007. ; Melo, 2007. ; Reis & Pereira, 2011. ; Silveira et al., 2011.）。そして、カポエイラの教育内容と実践上の課題を導き出す。

Maranhão らは、2006 年に州立小学校 3 年生（7～8 歳児）を対象に、遊び参加の観察とインタビューを行い、アフリカ文化やアフロ系子孫らのブラジル文化の肯定的な認識形成について、明らかにしている。対象者の児童は黒人の子どもと非黒人の子どもであり、カポエイラのようなアフリカ起源のゲームや遊び体験を行っていた。それによるとアフリカに対する先入観や偏見を抱いていた対象児童は、2006 年 9 月から 11 月にわたる 10 回の体育授業において、アフリカ起源のゲームや遊びの実施と関連した地図や民話、楽器等の補助教材を用いた学習によって、アフリカ文化やアフロ系子孫らのブラジル文化への歴史的貢献を理解し、アフリカ文化ならびにアフロブラジル文化に対する認識が肯定的に変容した。そして、調査を実施した短期間でのアイデンティティの修正は困難であったが、学校生活全体を通して体育教師が働きかけることが必要であると述べている（Maranhão et al., 2007）。

次に Reis と Pereira は文献、新聞記事やその他の印刷物による調査に基づき、法令 10639 号の制定で教育義務化されたアフロブラジル文化の要素を教えられるための主要な機会として体育授業をとらえ、その教育内容としての文化の重要性とアフロブラジル文化の要素を論証した。それは今日までブラジル社会に大きな影響を及ぼしているアフロブラジル文化の多大な貢献を評価する観点から、民間宗教のカンドンブレ、ウンバンダ、音楽においてはサンバ、パゴージ等、そして伝承的ゲームや遊び、カポエイラのような格闘的な活動をスポーツや体操のような運動要素として教材化し、体育の授業において教えられう

ると述べている (Reis & Pereira, 2011)<sup>48</sup>。

歴史文化教育の教材として、Melo はカポエイラを身体運動、楽器演奏、歌の 3 つの基本的要素から成り立つとし、かつてカポエイラは主に口頭伝承であったことに着目し、歌詞に語られている歴史や文化的要素を読解し解釈する方法論について述べている (Melo, 2007)。カポエイラの歌詞を学ぶことにより、中等・初等教育の生徒・児童が他のアフロブラジル文化、音楽やフォークロアにも興味を広げる契機となると述べている。

したがって、カポエイラをはじめとするアフロブラジル文化の表現形式を教材として用いることにより、文化や歴史に対する偏見をなくす可能性が示唆され、そのために体育授業ではそれらの文化的表現を用いて身体的経験を伴う内容の充実を図ることが重要視されている。また、カポエイラの口頭伝承文化としての特性に着目した歴史教育の方法も提示されており、文化的特性を生かした教材化の視点が読み取れる。

しかしながら、法令実施のための制度整備に関して、Gomes は先行研究に基づき、文化遺産と教育、支配劇としての学校、カポエイラの法令と教育等の複合的視点から現状の課題を指摘している。文化教育の教材としてのカポエイラの価値について、カポエイラをブラジル社会におけるエリート文化とアフロ文化の歴史的葛藤の表象としてとらえ、法令によって義務化され制度的に教育に導入するだけではなく、さらなる実践による普及の必要性を主張しており、制度整備に実践が十分に追いついていない状況を危惧している (Gomes, 2011)。

これについて、Silveira らはリオ・グランジ・ド・スル州サンタ・マリア市の教育局の課題として、学校においては新しい指針や課題が浸透しにくい傾向があることを指摘し、法令 10639 号の実行のためには教育者や指導者の養成が重要であると述べている (Silveira et al., 2011)。本稿における対象地域とは異なる地域であるが、現場で直面している課題としては見逃せない。

また Galindo & Galindo はアマパー州のサンタナ市における 35 の公立学校に調査を実施し、法令 10639 号の実施の状況と法令に対する認識の現状について明らかにしている。その結果として、彼らは学校において人種主義撲滅のための講演やプロジェクトを実践する上で教師が先導している状況を指摘している。しかし、各学校におけるプログラムが完了しているのは 35 校中 4 校と少ない。また、実施状況の開示を積極的に行い、教師、児童、地域住民がアフロブラジル文化とアフリカ文化、それらの歴史を学ぶためのプログラムを効果的

---

<sup>48</sup> Reis と Pereira は、文献研究によって基礎教育体育方針は、体育とその教育と学習の目的が身体文化の特徴をさらに発展させることを示唆していると捉えている。その上で、カポエイラや他の宗教活動における身体運動の要素を教材化することを提案している。しかしながら、具体的な方法については述べられていない (Reis and Pereira, 2011)。

に利用できるシステム構築が急がれると述べている（Galindo & Galindo, 2011）。

このように、現在のブラジルにおいては、子どもたちがアフロブラジル文化の歴史を学ぶことにより、民族人種問題に関する偏見をなくし、歴史的背景を含んだ文化に興味を広げられる契機として、身体的経験を伴う学習の重要性に着目した教材研究がなされている現状がうかがえる。しかし、各教育機関における本格的なアフロブラジル文化の歴史教育実践は初期段階ともいえ、そこでの課題は教育者等の養成、地域連携モデルの構築という法令の実施拡大のための各教育機関における制度整備であるといえる。

さらに、カポエイラという身体的経験を伴う活動に関して、Falcãoによると、ブラジルの体育教材開発はブラジルの文化的蓄積である様々な身体表現について海外からの関心が高まっているにも関わらず、いまだ国内における研究・調査の主題としては手薄である（Falcão, 2007）という。したがって、今後のブラジル国内における調査・研究によって、体育教育としてのカポエイラの価値が導きだされることが期待される。

## 第5節 国家形成の枠組みにおけるカポエイラの社会的役割

本章では、ブラジルにおいて1930年代に掲げられた「混血」というナショナルアイデンティティが、近年「多人種」性へと転換したことを踏まえ、「アフロブラジル」表象としてのカポエイラの社会的役割と実践レベルにおける諸問題を検討した。

その結果、ブラジルのナショナルアイデンティティ形成の文脈において、多文化主義を実現するための包摂的政策として掲げられた「アフロブラジル」というエスニシティは、諸政策を通じてナショナルアイデンティティを構成する一部として公認されたといえる。

こうした中、カポエイラの社会的役割とは、アフロブラジル文化の一つとして自国における文化・歴史を理解するための促進剤としての役割である。その目的はブラジルにおける民族人種意識による社会的排除の是正というよりもむしろ、その基盤となる国民のアフロブラジル文化と歴史に対する肯定的認識を、教育を通じて啓発することにある。

つまり、ブラジルにおいてカポエイラを教育現場で実施する基本的な目的は、エスニックアイデンティティに基づく、かつ超越した、ナショナルアイデンティティの再創造といえる。言い換えれば、ブラジルにおけるナショナルアイデンティティの再創造は、マイノリティ文化が国家レベルへ引き上げられるとい



う構図で目指されているのである。

マイノリティのエスニックアイデンティティを前面に出すことによって、当該民族集団の帰属意識を高めることは、他の多文化国家でも実施されている。しかし、ブラジルの場合は「アフロブラジル」の歴史や文化を学ぶことを通じて、自国を多人種、多文化主義の国であると国民に再認識させ、マイノリティだけでなく全国民の新たな帰属意識の生成を目論んだ政策だと考えられる。

このブラジルの政策は 2003 年の法令 10639 号制定以降、2008 年に法令 11645 号によって先住民文化歴史教育も加わり、2008 年の IPHAN によるブラジル国内無形文化遺産登録によってカポエイラの歴史的価値が高められ、2009 年のアフロブラジル文化教育国家計画が策定されるという教育省及び文化省による近年の取組みに基づいている。

その結果として、学校が国民形成の場所として再認識され、各教育機関における法令の実施拡大が求められているのである。

また、本章で明らかになったカポエイラの教育内容は次の 2 点であった。

- (1) カポエイラのようなアフリカ起源のゲームや遊び体験
- (2) かつては口頭伝承だった特性を生かしたカポエイラで歌われる歌詞を通じた歴史文化教育

このように、身体的経験を通じた歴史文化教育が、初等教育機関で取り組まれていることが明らかになった。

加えて、現場では次のような課題が指摘されていた。

- (1) 制度整備に実践が十分に追いついていない状況
- (2) 学校において新しい指針等が浸透しにくい傾向
- (3) 地域差の大きいアマパー州サンタナ市において、アフロブラジル文化歴史教育のプログラムが完成している公立学校は 1 割余りで、地域のさらなる連携強化が課題

これまで見てきたように、教育省の国家主導のアフロブラジル文化を利用したナショナルアイデンティティの再創造を志向するイデオロギーに強く影響されながら、カポエイラは教育現場において身体的経験を伴う活動としての新たな価値が生成され、特に幼児教育においては、発育発達の促進を含意した教育内容が実施されていた。その一方では、歴史文化教育としての役割も担っているといえる。

現在、教育的価値に基づく教育実践は萌芽期である。しかし、法令 10639 号



でブラジルの学校カリキュラムの体育以外の領域（ブラジル芸術文化、ブラジル文学、歴史）においても執行されると明記されていたことから、今後も実施は拡大されると考えられる。喫緊の課題として教育現場における実施拡大に向けて、教員養成等の制度整備及び制度に適うようなプログラムの構築や地域の連携等、現状を改善することが地方自治体レベルで求められているのである。

## 第 2 章

### 教育政策と カポエイラのゲームにおける鍵概念

## 第 2 章 教育政策とカポエイラのゲームにおける鍵概念

かつてカポエイラは口頭伝承で受け継がれ、師範が弟子の手を取り基本の足運びを教えていたといわれる。しかし、1930 年代のブラジルにおけるナショナリズムの文脈で、カポエイラを普及するために教授内容が体系化された。その後も、諸政策によってカポエイラ普及の取り組みがなされ、現在では学校教育におけるカポエイラ教授法に関する書籍もブラジルで多く刊行されている（Freitas, 2007a.; Freitas, 2008.; Reis, 2001; Campos, 2001a.; Campos, 2001b）。

前章で述べたように 2003 年に一部改正されたブラジル教育基本法によって、カポエイラを含むアフロブラジル文化と歴史をブラジルの義務教育課程の教育機関において教えることが義務化され、歴史文化教育としての目的も新たに設けられた。そして、体育教育や歴史教育をはじめとする全教科において教えられるようにカリキュラムづくりや教員養成等の制度整備が急がれている（Gomes, 2011.; Silveira, 2011）。

前章では検証したのは、カポエイラの社会的役割と、法令によって制定された教育制度であり、国民国家の枠組みにおける最も広義の制度であった。そこで、本章ではその下位制度である州・市レベルに着目する。

本章では、①政策レベルにおけるカポエイラの教育的意味と②実践レベルにおけるカポエイラ教育の実際という二つの側面からカポエイラを捉える。そして、州・市レベルの制度においてカポエイラがどのように位置づけられ、どのように教えられているのかを実証的に明らかにする。

さらに、本章では教育段階の対象を幼児教育に絞る。ブラジルにおける幼児教育は、0 歳～3 歳の保育園（creche）と 4 歳～5 歳 11 ヶ月までの幼稚園（pré-escola）があり、両者における教育を対象とする。

実際に、これまで筆者は民族スポーツとしてのカポエイラがどのように学校教育において教授されているのかに興味を持ち、ブラジルのリオデジャネイロ州リオデジャネイロ市において幼稚園 2 ヶ園の教授クラスを 4 回ずつで計 8 回分、小学校 1 校と中学校 1 校の体育授業におけるカポエイラ教授の様子を 2 回ずつで計 4 回分を参与観察してきた。フィールドワークの都合上、時間的制約のある中での参与観察であったが、その中でも最も幼稚園が、通常の一般的な習い事として行うカポエイラの教授内容には珍しい運動遊びが多く取り入れられており、カポエイラが教材として再構成されていると看取された。

本来の一般的な習い事として行われているカポエイラの教授内容だけではなく、教授対象者に応じて様々に展開されているということは、かつての担い手

のみならず広範に多くの人々に教授されていることの証左にほかならない。

つまり、国民教育の教材としてカポエイラが導入されたということは、民族スポーツとしての本来の性格、すなわち特定の担い手によって継承され、アイデンティティを形成するという性格にも何らかの影響があると考えられる。

したがって、カポエイラが現在のブラジル教育の文脈において如何に教材化されているかを本章によって明らかにすることは、民族スポーツの変化の一端を照射することであり、一般的な教材解釈に加えて、民族スポーツの担う役割の可能性について新たな知見をもたらすと考えられる。

そこで、本章は、前章で明らかにされた現在のブラジル教育においてカポエイラが担う社会的役割を踏まえて、幼稚園におけるカポエイラの内容の取り扱いを明らかにし、実際の教授内容に基づきカポエイラが教材としてどのように再構成されているかを検証する。そして、カポエイラの教材価値の読み直しを行うことを目的とする。

## 第1節 国家教育計画とカリキュラム方針におけるカポエイラ教育内容

ブラジルにおける教育制度の傾向を踏まえ、アフロブラジル文化歴史教育の義務化に関する政策における教育内容の取扱いについて検証する。特に、国家レベルから州、市レベルまでを一貫して扱うことで、政策によって策定された内容の連続性を捉えられよう。

そのために、対象となる政策は、次のとおり国家レベルの政策として法令 10639 号に関連する教育省によって策定された政策 2 つである。また、本研究の調査対象地であるリオデジャネイロ州の州と市レベルの政策 2 つである。四つの政策は次の通りである。

### 《教育省によるカリキュラム》

1. 教育省の人種平等促進政策特別局 (Secretaria Especial de Políticas de Promoção da Igualdade Racial) による策定

『2004 年 アフリカとアフロブラジル文化歴史教育と民族人種関係教育の国家カリキュラム方針 (Diretrizes Curriculares Nacionais para a Educação das Relações Étnico-Raciais e para o Ensino de História e Cultura Afro-Brasileira e Africana)』

2. 教育省の生涯教育局による策定

『2009 年 アフリカとアフロブラジル文化歴史教育と民族人種関係教育の国家カリキュラム方針実施国家計画 (Plano Nacional de

Implementação das Diretrizes Curriculares Nacionais para Educação das Relações Etnicorraciais e para o Ensino de História e Cultura Afrobrasileira e Africana)』

《リオデジャネイロの州教育局・市教育局による教育計画》

3. 『2009 年リオデジャネイロ州教育計画 (Plano Estadual de Educação do Rio de Janeiro)』

4. 『2010 年 リオデジャネイロ市幼児教育カリキュラム指針 (Orientações Curriculares para a Educação Infantil)』

この四つの政策において、(1)どのようにアフロブラジル文化教育の目的と内容が示されているのか、(2)どのようにカポエイラの教育内容が扱われているのか、の2点について検証する。本節以降における訳出は、特に断りのない限り筆者によるものである。

1. 『2004 年アフリカとアフロブラジル文化歴史教育と民族人種関係教育の国家カリキュラム方針』におけるアフロブラジル文化教育の目的

本方針（以下『2004 年国家カリキュラム方針』と略す）は、2004 年 3 月 10 日に国家教育審議会（Conselho Nacional de Educação）によって承認された。その経緯を見ることとする。

本方針の元となった法令 10639 号は、2003 年 1 月 9 日に制定された。この法令制定の後、2003 年 3 月 21 日には人種平等促進政策特別局（Secretaria Especial de Políticas de Promoção da Igualdade Racial）が創設され、人種平等促進国家政策が作られた。そして、人種平等促進政策特別局を通して、連邦政府は黒人ブラジル人人口の拡大を妨げている障害を打破するために、歴史的問題の解決に着手したのである。それが人種主義や差別であった。当局は、「豊かなブラジル国家を構成する異なるエスニック集団における機会均衡を促進し、人種主義を撲滅する取組み」の実行のために意見書を作成することが重要であると判断した。その意見書によって本方針が策定された。本方針には、このような経緯やアフロブラジル文化教育の最終目的が人種主義の撲滅であることが示されている。

次に、カリキュラム内容である。一般的にカリキュラムとは、学習者が何歳頃に何を学ぶかが記載されており、教授時期、教育の目標や内容が明記される。しかし、『2004 年国家カリキュラム方針』では教授時期については言及されず、教育目標・内容とみられる次の 7 項目が提示されていた。

それは「アファーマティヴ・アクションの再認知と価値上昇の政策」「民族人種関係の教育」「アフロブラジルとアフリカの文化と歴史」「(人権に対する) 政

治的認識と多人種性の歴史」「アイデンティティと権利の強化」「人種主義と差別撲滅のための教育政策」「アフロブラジル文化と歴史の教育の義務化と民族人種関係の教育」についてである。そして、それらを教授しなければならない根拠が、各項において示された。このように『2004 年国家カリキュラム方針』では、アフロブラジル文化歴史教育において何について教えられるべきかという教育内容が検討された。

## 2. 『2009 年アフリカとアフロブラジル文化歴史教育と民族人種関係教育の国家カリキュラム方針実施国家計画』における幼児教育段階の目的

次に、法令 10639 号と後の 11645 号の実施を普及するための具体的方針を定めた国家計画である『2009 年アフリカとアフロブラジル文化歴史教育と民族人種関係教育のための国家カリキュラム方針の実施国家計画』（以下『2009 年国家計画』と略す）の内容を検証する。その前文において、これらの法令は、単に偏見や差別撲滅のための手段としてではなく、ブラジルの豊かな文化的根源を重視する必要性を促進する場としての学校の役割の重要性を明確にし、国民形成の場所として学校を再認識することを目的とする是正のための積極的な法令であると位置づけ、学校のみならず家庭や地域コミュニティの社会的参加が不可欠であると述べている（Governo Federal, 2009, p.5）。

この計画の目的には、民族・人種に関する教育とアフロブラジルならびにアフリカの文化歴史の教育を実施する施設の設立、そのための教師育成、政治分野における戦略的実施の促進、教育制度や関連する教育機関との連携、教材の作成と調査の発展、専門家や関係者の協同、具体的な予定の立案と実行が掲げられている。また、計画の基本方針として 6 つの方針を挙げている。「1.法的限界の拡大」「2.教育の管理者と専門家養成の政策」「3.教材と教育のための専門家養成の政策」「4.社会的参加の民主的運営と構造化」「5.評価と監視」「6.制度整備」である。特に教育内容と関連している「3.教材と教育のための専門家養成の政策」において、教材については教科書としてアフリカとアフロブラジルの文化歴史や、反人種主義的観点からブラジル社会における偏見や差別、暴力と関連したテーマを取り扱うことを推奨している。また、ブラジル社会における国民の異なる文化的起源に対して肯定的な社会表象を構築するために、社会的意義のある文化を十分に理解した専門家の養成が目指されている。

『2009 年国家計画』の第 7 章では各教育段階における教育実施方針が述べられている。その中の幼児教育の項目において、冒頭より保育所と幼稚園それぞれにおける入園者数における白人と黒人の割合が示されている。「(人種の割合の) 数値を示すことは、アフロブラジル文化歴史教育と民族人種関係教育のための幼児教育政策を言及する上での大きな試みである」と明記されている。



さらにこの時期における民族人種関係教育の意義について次のように言及されている。

幼児教育の「白紙」の時期<sup>49</sup>は人間発達と人格形成、知的発達、学習において重要である。人生の初めの時期における(幼稚園や保育所のような)教育的集合空間は、あらゆる偏見、人種主義や差別の除去を促すための特別な空間である。そして、子どもたちはこの幼い時期に、ブラジル文化と歴史にとっての民族人種グループの差異の重要性を知り、再認識し、価値付けるという行為を自覚的に理解して行うのである。(Governo Federal, 2009, pp.49-50)

このように、幼児教育において差別や偏見等を与えないことがいかに重要であるかが強調されている。

そして具体的な「幼児教育行動原則」も7つ挙げられている。

- a) 幼児教育における的確な判断基準に従って、アフロ系子孫の子どもの受け入れの拡大を可能にするようにさらに注意を払うこと。
- b) 民族人種関係のための教育の発展と、アフロブラジル文化と先住民文化の教育内容の導入のために、幼児教育段階における教師・専門家としての初期養成と継続的養成を保証すること。
- c) 幼児教育国家カリキュラム方針において、教育ネットワークを通じて、民族、人種、性別、障がい者などの多様性を高く評価することの重要性を説明すること。
- d) 国家指定教科書による教育は、特に黒人と先住民の文化に関する著書を教えるシステムを可能にする図書を含み、幼児教育へ還元すること。
- e) 日々の教育における教材の入手と発展的な研究を実施すること。その教材は、多様性を促進し尊重するものであること。例えば遊びやゲーム、とりわけ様々な民族的特徴や性別の異なる人形など。
- f) 0歳から5歳の子どもの状況と関係についてのデータを作成するために、国立教育研究所(INEP)、ブラジル地理統計院(IBGE)、応用経済調査研究所(IPEA)と連携した活動を発展させること。幼児教育におけるアフロ系子孫の子どもの状況を理解し、背景を視覚化するという観点において、国立教育研究所のデータ収集は必ず保障すること。
- g) 幼児教育における人種平等の促進政策や行動実施のための市への技術的支持を保証すること。(Governo Federal, 2009, pp.49-50)

---

<sup>49</sup> 無限の可能性を認める隠喩表現。ジョン・ロックは「人間の精神は白紙(タブラ・ラサ)であり教育とは精神に印象を刻み込むことである」と述べた。

『2009 年国家計画』では、幼児教育を統括する地方行政組織あるいは幼児教育を担う教育機関に対する要請が主に示されており、教育内容については触れていない。具体的な行動として、入園者数の調整、教師養成システム、図書の管理、国家規模の調査への協力であった。

以上を踏まえると、教材に関する言及はあったが、具体的なアフロブラジル教育の教育内容は言及されておらず、主に地方行政組織・教育機関に対するアフロブラジル文化教育実現のための環境整備、幼稚園の外部公的機関との連携に関する内容であった。

つまり、本国家計画は制度を実現させるためのシステム構築に関する計画が中心であったといえる。そのため、カリキュラムや具体的な指導法までは言及されていなかった。

### 3. 『2009 年リオデジャネイロ州教育計画』

リオデジャネイロ州の教育方針である『2009 年リオデジャネイロ州教育計画』を検証する。前章にて既出であるが、再掲する。これによればアフロブラジルとアフリカの文化歴史の教育の実践について次のように明記されている。

1988 年のブラジル連邦共和国憲法において、州は、州民に国家的文化資源に触れさせ、文化に関する全法律を完遂するよう保証しなければならないと定めている。目的は、アフロブラジルのような民族文化表象の価値を上昇させ、その普及を奨励するためである。それは、国民形成過程に参加する他団体組織と同じ様に実施されなければならない(法令 215 項)。2003 年 1 月 9 日の法令 10639 号と、ブラジル教育基礎方針の法律等の決定に則り、公私立の初等教育、中等教育機関においてアフロブラジル文化歴史の教育が義務化された(26-A 項)。そして 2005 年の州法令 4528 号において条項が同様に定められた(21 項, IV号, a, b および c 号)。

これを踏まえて、アフロブラジル文化歴史の教育実施は、黒人運動組織と共に、州教育委員会と市教育委員会の連携を必要とする。そして、そのいずれの組織も、民族人種関係の教育ならびにアフロブラジルとアフリカの文化歴史を教えるための国家カリキュラム方針を実施する。そして、その動向は自治体と共同運営によって監査されなければならない。それにより、計画の重要性が高まり、緊急措置として教員養成講座が実施される。さらに州は、民族人種問題に関連したコミュニティの発展と調査、知識の構築とその普及を奨励する。

(Secretaria de Educação de Estado do Rio de Janeiro, 2009, pp.23-24)

これによると、繰り返しになるが、『2004 年国家カリキュラム方針』の確実

な実施に向けて、民間組織と共に、州と市という自治レベルの異なる共同体の連携の必要性が強調されている。いかに共同して運営できるかが重要であると考えられ、その点における問題点も生じやすいと推測できる。また、教員養成も喫緊の課題として挙げられている。

さらに、2009 年リオデジャネイロ州教育計画は、「幼児教育」の項では主に法律による州政府行動指針が示され、園児数の統計データによる近年の傾向がまとめられている。

また、本教育計画の冒頭では、まずリオデジャネイロ州政府による法令 2776 号（2009 年発令）の下位条項 7 項と、法令の位置づけや連携、開示、発効日について明記されていた。具体的内容は次のとおりであった。

#### 《リオデジャネイロ州政府》

第1条 リオデジャネイロ州の州教育計画(PEE/RJ)は、関連した法令の恒常的行政権の行使によって計画される。

第2条 州教育計画の見直しは、法令 4528 号(2005)の第 67 号独自の範囲において、州教育委員会を通した後に成される。

第3条 国、州、市の 3 つの権限の接合において、州は現在の州教育計画の目的と達成が成されるようにファシリテーターとなる。

第4条 州は、州教育計画の恒常的な目的の達成にむけて、必要なメカニズムを確立し、評価システムを設立する。

第5条 州の複数年に渡る計画と年次予算法案は、州教育計画における恒常的な目的へサポートする形式で計画される。

第6条 州の行政権は、計画の実施を見守り、計画の開示と、amplamente に社会知識のための目的とゴールの実現を開示すること。

第7条 本法令は、その公布日に効力を発する。

—2009 年 12 月 18 日、リオデジャネイロー

「アフロブラジル文化教育」の頁では、「1988 年ブラジル連邦共和国憲法において、州は文化的権利の完全行使を保証しなければならないことが決定された」ことを挙げ、「民族文化の象徴の普及」と、州と市の教育委員会並びに民間の黒人運動組織と連携して実施することの重要性が述べられている (Secretaria de Educação de Estado do Rio de Janeiro, 2009, pp.25-26)。

本教育計画において、アフロブラジル文化教育に関しては、法令に基づく州の行動指針と実施体制のシステムについて、州と市の連携、さらには官民の連携といった制度について言及されていた。しかしながら、本計画書においてはカポエイラ指導教育内容への具体的な言及はなされていなかった。

#### 4. 『2010年リオデジャネイロ市幼児教育カリキュラム指針』

リオデジャネイロ市レベルにおける政策である『2010年リオデジャネイロ市幼児教育カリキュラム指針』では、具体的な教育内容が示されている。表3（紙面の都合上 p.52 に掲載）にあるように、教育内容として「歴史」「フォークロア」「動物の世界」「植物の世界」「自然保護」「大気・水と大陸」「惑星」「季節」「交通」「家族」「アイデンティティ」「スポーツ」「オリンピック、コパカバーナのサッカー世界大会」「ブラジル人アーティスト、他の国民的アーティスト」「職人芸、手工芸品」「文化遺産」「音楽の種類」「人間の身体」「五感」「人との違い」「居住地と住居の種類」「私達の街・地域」「世界の色彩」の23の内容が掲げられている。「この分類は読み安さを配慮して便宜上細分化されたのであり、幼児教育においてこの（教育内容の）区分は日常における幼児の体験や多様な経験に応じて融合されるものである」ことが強調されている。その際、教育内容構成の観点として「言語：話す、書く」「計算」「社会科学と自然科学」「身体と動き」「芸術的言語：音楽」「芸術的言語：視覚芸術」の6つが挙げられ（表2）この観点に基づいて「多様な教育内容を融合する」ことが指南された。表3の教育内容においては、「細目」及び「話題提供の会話例」の記載内容の量や記載方法（箇条書き、文章表記等）にばらつきがあった。

表3の「細目」によれば、カポエイラは「スポーツ」に含まれている。但し、先述のように便宜上の分類である可能性も否定できない。さらに、子どもの経験や地域の状況を踏まえて、他の教育内容と融合させた活動の展開が可能である。ゆえに、民族人種関係の教育として「アイデンティティ」や「フォークロア」「歴史」等の教育内容と関連させた構成も考えられよう。

市レベルのカリキュラム方針が、教師が具体的な教育内容を知るための公文書となるが、教育内容の細目と構成観点は示されており、どのようにアレンジするかは教師や教育施設に委ねられているといえる。

その際に、カポエイラに関しては具体的な授業の展開の骨組みとなる観点は示されておらず、各園の状況に応じて教師の独自の観点によって構成されると推察される。

表2 『2010年リオデジャネイロ市幼児教育カリキュラム指針』による教育内容構成の観点

教育内容構成の観点	
・言語：話す、書く	・身体と動き
・計算	・芸術的言語：音楽
・社会科学と自然科学	・芸術的言語：視覚芸術

（記載内容を基に筆者作成）



表 3 『2010 年リオデジャネイロ市 幼 児 教 育 カ リ キ ュ ラ ム 指 針』による教育内容

教育内容	細 目	話題提供の会話例
歴史	おとぎ話, 作り話, 動物・子ども・地域・人物・国についての一般的な歴史	(記載なし)
フォークロア	典型的な祭り, 音楽の祭り, 演劇, 文学, 仲間や大人の文化・宗教の違いに対する敬意と平等主義	(記載なし)
動物の世界	海・川・森林・樹木・大気・地面に生息する生物, 動物の分類, 自然に生息, 絶滅危惧種等	(記載なし)
植物の世界	樹木, 枝, 根, 葉, 花, 食用植物, 大陸と水中の植物, 植林, 材木, 植物の分類, 絶滅危惧種等	(記載なし)
自然保護	アマゾン熱帯雨林, 大西洋岸の森林, チジューカ(リオデジャネイロ市東部)の森林, リオデジャネイロ市内にある公園や州立公園, 子どもや園の地域において重要と見なされる自然	(記載なし)
大気・水と大陸	(記載なし)	空気って何? / 水は何のために役立ちますか? / 大陸(土)はどんな色ですか? / 大地は私たちに何を与えますか? / これらの要素と人間の関係は?
惑星	太陽, 月, 空	なぜ昼と夜があるのですか? / 太陽はどんな感じ? / それらは私たちに何をしてくれる? / 私たちはその惑星をこの陸地から見ることができるかな?
季節	夏, 秋, 冬, 春	それぞれの季節の特徴はなに? / 何を着るのかな? / (食べ物と関連付けて)なぜ季節があるのかな?
交通	(記載なし)	その乗り物は空中, 陸, 水中のどれかな? / どんな形かな? / 何のためにあるの? / 子どもが使うのはどのタイプ?
家族	家族構成, 人数	(記載なし)
アイデンティティ	人種と民族, 文化等	(記載なし)
スポーツ	フットボール, バレーボール, テニス, インディアカ, 水泳, 体操, バレエ, カポエイラ等	これらのスポーツはどのようにプレイしますか? / バレエは? / そのスポーツは何?
オリンピック, コパカバーナのサッカー世界大会	(記載なし)	アスリートはどれ? / どれが代表チームかな? / どこで開催されるの? / 代表団の一員は誰? / 2010 年現在, コパカバーナ地域に住んでいる人は誰?
ブラジル人アーティスト, 他の国民的アーティスト	音楽, 造形芸術, 詩, 絵画等のアーティスト	(記載なし)
職人芸 手工芸品	(記載なし)	それは何? / 誰がつくったの? / どうやってつくるの? / 何の材料が使われていますか?
文化遺産	(記載なし)	どうやって文化遺産になりましたか? / 誰が名前をつけましたか? / 誰が無形文化財(保持者)になったかな?
音楽の種類	クラシック, ポップ, ボサノバ, サンバ, フォフォ, フレーヴォ, ショーロ, 童謡, 外国の歌等	(記載なし)
人間の身体	(記載なし)	何が見える? / 見えないものは何? / どうやってそこ(身体の一部)は動くのかな? / どうやったら気をつけられる?
五感	視覚, 聴覚, 嗅覚, 味覚, 触覚	(記載なし)
人との違い	(記載なし)	子どもと大人, 男の子と女の子, 男性と女性(どう違うの)? / 私たちの髪, 目, 肌の色はどんなかんじ?
居住地と住居の種類	(記載なし)	人々はどこに住む? / なぜそこに住んでいるの? / どうやって家はできるの?
私達の街・地域	社会的特徴, 経済的特徴, 地理的特徴	私たちはどこにいるの?
世界の色彩	(記載なし)	その色はどこにある?

(記載内容を基に筆者作成)

## 5. 四つの政策における策定内容

これまでの四つの政策における策定内容をまとめると、表4のとおりである。アフロブラジル文化教育の目的とそれに関連する要請事項が多岐にわたっていることがわかる。

表4 アフロブラジル文化教育に関する国家教育政策とリオ州・市教育計画

	政策名	策定機関	主な策定内容
1	2004 年 アフリカとアフロブラジル文化歴史教育と民族人種関係教育のための国家カリキュラム方針	教育省・ 人種平等 促進政策 特別局	・策定経緯 ・アフロブラジル文化教育の目標・内容とその根拠
2	2009 年 アフリカとアフロブラジル文化歴史教育と民族人種関係教育のための国家カリキュラム方針の実施と国家計画	教育省 生涯教育 局	・アフロブラジル文化歴史教育の意義 ・教材(教科書) ・地方行政組織・教育機関の環境整備 ・外部機関との連携
3	2009 年 リオデジャネイロ州教育計画	リオデジャ ネイロ州教 育局	・法令による州の行動指針 ・実施体制のシステム
4	2010 年 リオデジャネイロ市幼児教育カリキュラム	リオデジャ ネイロ市 教育局	・内容構成の観点 ・教育内容事例 ・指導法(ことばかけ)

(筆者作成)

表4に基づいて、本章第1節において掲げた2点の検証について、次のように総括される。

「(1)どのようにアフロブラジル文化教育の目的と内容が示されているのか」については、「豊かなブラジル国家を構成する異なるエスニック集団における機会均衡を促進し、人種主義を撲滅する」ことを目的としていることが『2004年国家カリキュラム方針』によって示された。そして、アフロブラジル文化教育の意義は、『2009年国家計画』によって、幼児教育において差別や偏見等を与えないことが重要であることが強調された。また、『2009年リオデジャネイロ州教育計画』においては、幼児教育を統括する地方行政組織と幼児教育を担う教育機関への要請が示され、アフロブラジル文化教育実施のための環境整備が中心であった。そして、唯一具体的内容が記されていた『2010年リオデジャ



ネイロ市幼児教育カリキュラム指針』には、具体的な種目名としてカポエイラは明記されていたが、「アフロブラジル文化歴史教育」という枠組みの教育内容は示されていなかった。

次に、「(2)どのようにカポエイラの教育内容が扱われているのか」に関しては、『リオデジャネイロ市幼児教育カリキュラム指針』において、スポーツとしてカポエイラが示されていたが、便宜上の分類であるため、子どもの経験や地域の状況を踏まえて、他の教育内容と融合させた活動の展開や工夫が必要であることが示唆された。

リオデジャネイロ市における政策と教育内容の取り扱いを踏まえると、実質的に教育内容の構成はすべて指導者に一任されていることが看取できる。

次項では先行研究から本研究における着眼点雄明らかにする。そして次節ではリオデジャネイロ市の幼稚園におけるカポエイラを教えている実際の様子を観察し、教育内容を検証する。

## 6. 幼児教育におけるカポエイラの教育内容

先行研究は、Jorge Luiz de Freitas の幼児を対象としたカポエイラの教材研究である“Capoeira Infantil ; A arte de brincar com o próprio corpo (幼児期のカポエイラー自分の身体で遊ぶ芸術)” (Freitas, 2007a) が挙げられる。著者はアバダ・カポエイラの準師範<sup>50</sup>であり、自ら幼児から成人の受講者にカポエイラの指導をしている。本書は幼児・児童向けの一般的な「遊び」要素を多く取り入れた活動事例が豊富な実用書として大変価値が高いと判断される。また、Freitas は中世の教育学者らペスタロッチやフレーベルの教育論を援用し、幼児教育において心身の発達に重要な遊びを軸にカポエイラにおける遊びの活動を提示している (Freitas, 2003, 2007a)。つまり、教育学的視点からカポエイラの教授内容をアレンジし再構成している。本書は幼児教育における心身の発達促進効果に着目したカポエイラの教材化の事例であり、幼児の心身の発達促進の観点から発達刺激としてカポエイラを位置づけている。

しかしながら、これら先行研究を管見したところ、カポエイラをアレンジした数ある遊びの中からどの遊びを選択し、どのような観点で教授すればよいのかという授業構成の観点についての考察は行われていない。

したがって、本稿ではカポエイラ教材化の目的が曖昧で混在している幼児教育の文脈において、先述した本研究の目的のために、事例におけるカポエイラの教材としての再構成を明らかにする。具体的には、実際に幼稚園で行われて

---

<sup>50</sup> 準師範とは Mestrando (メストランド) という段位であり、アバダ・カポエイラにおける段位システムの全 17 段中の最高位から 3 段目にあたる。

いるカポエイラのクラス（以下「幼児クラス」と略す）に基づき、次の3点を明らかにする。

- ① 幼児クラスにおける活動の種類
- ② 活動の展開パターンの抽出
- ③ 授業構成の観点

①、②、③を踏まえて授業構成の鍵となる概念を検討し、カポエイラの教材価値の読み直しを行う。鍵となる概念とは、カポエイラの活動（ゲームや楽器を伴う形式の円隊形で行われるホーダ）において中核となる理念のことである。

## 第2節 リオデジャネイロ市の私立J幼稚園の調査結果

### 1. 調査概要

調査の対象は、ブラジルのリオデジャネイロ市メトロポリタン地区の認可私立幼稚園である。O Jardim Escola Caminhando 幼稚園<sup>51</sup>（以下「J幼稚園」と略す）におけるカポエイラクラスの参与観察を行った。1951年に設立されたJ幼稚園は、リオデジャネイロ市有数の総合病院の目の前に位置し、中産階級の子どもが通う。一日当たり13:00から17:30まで保育・教育がなされており、2013年9月現在は保育園が35名、幼稚園が20名である。通園している園児の身体的特徴によれば、白人が半数程度で、もう半数は黒人と混血者であった。

対象者は、3歳~5歳の男児と女児7~9名であった。毎回のクラス参加者数は変動し、平均8名だった（表5参照）。幼稚園のカリキュラムは13:00から開始されるため、予定が合う幼児は参加するようになっていた。それまでカポエイラクラスと同時刻にクラシックバレエのクラス（女児のみ）も開講されており、幼児の活動を親があらかじめ選択し受講する制度であった。

表5 2010年の参与観察日時と参加者数

回数	月日	参加者数		
		男児	女児	合計
1	8/5(木)	7	2	9
2	8/10(火)	6	3	9
3	8/24(火)	5	2	7
4	8/26(木)	6	3	9

（筆者作成）

<sup>51</sup> 住所：Trav Frederico Pamplona16, Rio de Janeiro, RJ

実施場所は、園内の 10 畳程度の半屋外の広場であった。練習クラスを行う場所は、幼稚園内の中庭的な広場である。

広さは 10 畳程度で、四面は壁に囲まれ天井は吹き抜けで空を仰ぐことができた。また、子ども用のロボのイスや遊具が 2～3 点隅に置いてあり子どもの遊ぶ場所として機能していた。調査の日程は表 5 のとおり 4 日間行った。対象のカ



ポエイラクラスは火曜日と木曜日の週（2010 年 8 月リオデジャネイロ市にて筆者撮影）2 回、12:15～12:45 の 30 分間であった。写真 2 幼稚園中庭でピリンパウを弾く教師

## 2. 調査方法

一般的に参与観察において観察者がカポエイラクラスの実施に影響を及ぼすことが考えられる。影響をすべて排除することは困難であるが、極力実施中には子どもにかかわらないように留意し、観察を行った。

記録方法は、手記記録とデジタルカメラによる写真撮影並びに一部は動画撮影であった。その際「対象者の活動内容と活動の展開」「対象者の活動の様子」「教師の働きかけ」の 3 点に着目し、さらに教師の働きかけや達成度に対する評価基準に留意して記録を行った。

また、授業構成の観点として「活動によって生まれる文脈」と「活動が何を志向しているのか」も意識される必要があるだろう。これらの項目において、カポエイラの理念を、活動をする上で教師側がどのように意識しているかについても留意する。

尚、本稿ではカポエイラの練習クラスの観察ならびに記録の方法論として日本の体育科教育学における授業の記録方法を参照とする<sup>52</sup>。

ここで、カポエイラの理念が行動として表れている状況を客観的に判断することについての妥当性を述べておきたい。カポエイラの代表的な理念を基盤とした価値観によってホーダ実施時に行為者の行動が方向付けられる。価値観とは「何に価値を認めるかという考え方。善悪・好悪などの価値を判断するとき、その根幹をなす物事の見方」（広辞苑）であり、本稿において「価値観」が意味するものはカポエイラのジョゴを行う中で、文脈において良し悪しを判断するときの物事の見方である。また、ジョゴの中でこの価値観が行為者にまだ備わ

<sup>52</sup> 『学校体育授業事典』では、授業記録のまとめ方に関して次のように述べられている。「授業の事実を正確に客観的に把握することが、授業研究の方法の基底であるが、そのためにもっとも基礎的な方法は、授業中の教師や子どもたちの発言・行動をありのままに記録した授業記録の作成である」（宇土，1995，p.715）。よって本稿ではこの方法にならって記録する。

っていないと判断される場合は、教師や兄弟子によって何らかの形でフィードバックされる。よって、カポエイラのジョゴにおいてはその場で共有される価値観が行動をすべて方向づけるものとして捉えられていると考えられる。つまり、活動内容を観察する過程で行為者にそれらの価値観が備わっているかどうかは判断できるといえる。観察者は、2002年3月からのべ7ヶ月間のブラジル滞在中に行為者として大人を対象とした練習クラス約350時間を観察的に参加しており、イーミックな観察が可能と考えられる。

### 3. 調査結果

本節では、幼児クラスの教授内容を「活動内容」「学習者の様子」「教師の働きかけと言葉かけ」の3項目について記録し、表にまとめる。1回目（2010年8月5日）は男児7名、女児2名の合計9名で、教具は打楽器のパンデイロや遊具の椅子がもちいられた。その様子は表6の通りである。同様に、2回目から4回目も表で総括した（表7～表9）。

このクラスは一年を通じて特別な行事の時期以外継続的に行われており、毎回少しずつ異なる内容が行われた。3～5歳の異年齢児が受講しており、個人の運動能力の発育段階に応じて動きのレベルには差が見られた。調査した時期は、子ども対象で行うカポエイラの基本動作を子どもたちは一通りこなせる段階であり、初歩の段階であった。具体的には子どもたちは基本のステップや動きの名称を覚えており、指導者の指示に応じて基本の動きを反復して練習することが可能な段階であった。

但し、調査中の様子によると動きの習熟度はまだ低く、効率化し洗練させる余地が十分にあると見受けられた。園長によればクラスの目的はアフロブラジル文化を体験し、カポエイラを通じて心身の発育発達を促進することだった。

カポエイラ教師は外部講師で、カポエイラ歴約15年のインストラクターレベルの男性（当時25歳）が時給制で雇用されていた。彼へのインタビューによると「子どもは遊びが好きだからね。カポエイラにはリズム、歌、手拍子、そしてたくさんの動きがある。とにかく遊びながらカポエイラを学ぶのが大切なんだよ」と答えており、遊びを通してカポエイラを学ぶ教授方針であった。

毎回の活動内容は少しずつ異なり、全4回の活動内容を分類した結果、17の活動が行われた。最も時間が割かれていたのは「ジンガと蹴り」というカポエイラの基本技の反復練習であり、次いで「手拍子と歌」の練習、「ジョゴ」（二人が対面で行う蹴りや避けのゲーム）並びに「様々な姿勢」（避けや構えの姿勢）であった。また、4回目には「楽器」の演奏体験や1回目にはカポエイラの昇段式やゲーム上のルールなど（「様々な話」）もなされていた。参与観察の結果、幼児を対象としたカポエイラの教育内容として、身体技能のみならず、歌（合

唱)や手拍子並びに楽器演奏というカポエイラに不可欠な要素も行われており、カポエイラの昇段式について話を通じて教えられていることが明らかになった。

4 回目の参与観察の活動内容を表したものが表 9 である。教具は弦楽器「ビリンバウ」とロバの玩具イスが用いられた。4 回目の参加者 9 名について対象者の身体的特徴（肌の色、髪型、鼻や唇の形状等）の観察者による判断では、白人は 4 名、混血者は 4 名、黒人は 1 名であり、様々な人種の子どもを対象にしていた。全 4 回の事例では子どもの運動遊び要素が多く取り入れられていた。

表 6 参与観察 1 回目(2010 年 8 月 5 日木曜日)の活動内容

出席者数:男児 7 名、女児 2 名/道具:打楽器パンデイロ、ロバの玩具イス

時刻	活動内容と行い方	学習者の様子	教師の働きかけ
12:15	<b>1. 走る</b> パンデイロが鳴っている間は左回りに走り続ける。 一度歩いた後、再度走る。		パンデイロを叩きながら歌う。 「周りを良く見て、音聞いて」 「ほら、次は誰がすわれるかな」
12:17	<b>2. いすとりゲーム</b> 真ん中にロバのイスを置き、パンデイロが鳴っている間は走り、鳴り止んだらイスに座る。		
12:20	<b>3. ジンガと蹴り</b> ロバのイスの両端を相手に見立てて、基本の蹴り「メリアルアジフレンチ」を蹴る。		パンデイロを叩きながら、言葉をかける 「うわ〜いいジンガだね」 「リズムに合わせて」 「ジンガとまらないで」 「足は交互に下げて、ジンガの手は顔の前だよ」
12:24	<b>4. ジョゴ</b> 二人ずつジョゴをする。 周りの子どもは、手拍子をしながら歌を歌う。		二人組みを指示する。 歌と手拍子を促す。 「手拍子はどうしたの？お友達のゲームをちゃんと見て」
12:27	<b>5. 動物のマネ</b> 指導者が指示したポーズになる。動物のマネ、サッポ(カエル)、エスカンピオン(サソリ)。		パンデイロを叩きながら歌い、指示を出す。「誰がうまくできるかな」
12:29	<b>6. 様々な姿勢になる</b> 基本の避け「コリニャ」、応用の避け「ポッチ」、動物のマネ「エスカンピオン」、初めは皆一斉に指導者の後に全員で動く。		「覚えてるかな」 「ちゃんとしゃがんで」 「ガードの手はどこかな」
12:33	<b>7. 鬼ごっこ</b> 指導者の歌が終わったら鬼がタッチしに行く。「コリニャ」をするとタッチはできない。つかまったら皆の前でジンガを行う。		指導者は、パンデイロを叩いて歌う。 「そうそう、ちゃんと見て」 「次は〇〇が鬼だよ」 「走ってごらん」
12:37	<b>8. 壁掛け倒立</b> 10 秒間を 2 セット		
12:38	<b>9. フリッジ</b> 10 秒間を 2 セット		
12:39	<b>10. ホーダの話</b>		ホーダにおける手拍子と歌の役割について、段取りについて。

※「メリアルアジフレンチ」は「前方の半月」という意味で、下限の月の弧を目の前に片足で描くようにして蹴る。「コリニャ」は体育座りの腰を浮かせたような姿勢でよけの一種。（筆者作成）



表 7 参与観察 2 回目(2010 年 8 月 10 日火曜日)の活動内容

出席者数: 男児 6 名、女児 3 名 / 道具: 打楽器 パンデイロ、ロバの玩具イス

時刻	活動内容と行い方	教師の働きかけ
12:15	<b>1. 走る</b> パンデイロが鳴っている間は、左回りに走り続ける。一度歩いた後、再度走る。	パンデイロを叩きながら歌う。
12:17	<b>2. 各部位のストレッチ</b> 腕をまわす。首を回して、前後左右をストレッチする	
12:18	<b>3. 様々な姿勢になる</b> 「コロリニャ」「ボッチ」「ジンガ」の姿勢になる	パンデイロを叩きながら歌い、指示を出す。
12:20	<b>4. 腕立て伏せの運動</b> 二人組みで手押し車の状態で、歩く。	
12:24	<b>5. 鬼ごっこ</b> 鬼が誰かをタッチする。 タッチされるときに、「コロリニャ」になれば無効となる。	ンデイロを叩きながら歌う。
12:28	<b>6. 蹴りの動き</b> 直線蹴り 3 種をおこなう。「ベンソ」「メリアルアジフレンチ」「マテロ」	パンデイロを叩きながら歌い、指示を出す。
12:34	<b>7. 様々な姿勢になる</b> 「サッポ(カエル)」、「ボッチ」、「コロリニャ」を一つずつ指導者と一緒に行う。 その後、パンデイロに合わせてジンガをし、パンデイロが鳴り止んだら、様々な姿勢になる。	パンデイロを叩きながら歌い、指示を出す。
12:37	<b>8. 壁かけ倒立</b> 10 秒間を 2 セット	
12:39	<b>9. フリッジ</b> 10 秒間を 2 セット	
12:40	<b>10. ジョゴ</b> 二人組みで、ジンガを行う。	パンデイロを叩きながら歌う。

※ 「ベンソ(benção)」は祝福という意味があり、片足を抱えて押し出すように足の裏全体で蹴る。「ボッチ」は片膝立ての状態で座り、手を地面に突っ張るような形で上体を支え、腰を浮かせた姿勢。よけや移動の動きとなる。「サッポ」はカエルと言う意味で、両手両足を地面につくしゃがんだ姿勢。

(筆者作成)



表 8 参与観察 3 回目(2010 年 8 月 24 日火曜日)の活動内容

出席者数:男児 5 名、女児 2 名/道具:打楽器パンデイロ、ロバの玩具イス

時刻	活動内容と行い方	子どもの様子	教師の働きかけ
12:15	<b>1. 走る</b> パンデイロが鳴っている間は左回りに走る。一度歩き、再度走る。	 声を上げながら走り回る。	パンデイロでカポエイラのリズムを叩きながら歌う。
12:19	<b>2. 首と脚ストレッチ</b> 腕を回し肩のウォーミングアップ。首は前後左右に回し、脚は膝を抱え、バランスをとりストレッチする。	 教師の演示をまねし、一緒に数えながら行う。	数字を数えながら、手本を見せる。
12:22	<b>3. ジンガと蹴り</b> パンデイロが鳴っている間はジンガする。音がやんだら「ベンソ」をける。	 教師の演示を見ながら、一緒に行う。蹴る方向はどこでもよい。	教師が演示する。
12:24	<b>4. 様々な姿勢</b> ジンガを踏み、様々な姿勢になる。「コリニャ」「ピアオンジマオン」「カデーラ」「ポッチ」	 「コリニャ」は両足をそろえて座る。「カデーラ」で腕を左右に動かす。	合図を出し、子どもと一緒にを行う。わからない子どもには、直接指導する。
12:26	<b>5. 側転「アウー」</b>		
12:28	<b>6. イスとりゲーム</b> パンデイロが鳴っている間は走り、音がやんだらロバのイスに座る。あぶれたら「ジンガ」を踏む。 これを3セット行う。	 走った後はロバのイスに座る。一台あたり3名まで座れる。あぶれたらジンガを踏む。	
12:32	<b>7. 蹴りの動き</b> ロバに向かって「ジンガ」をして、「ベンソ」「アマーダ」「アウー」を行う。一人ずつ行う。他の子どもは歌と手拍子を行う。	 ジンガをしながら、数回イスに向かって蹴る。	教師が演示する。 歌と手拍子を促す。
12:36	その後、ロバのイスの両端を相手に見立てて、4 名一斉に行う。		
12:41	<b>8. 障害物を飛び越える</b> ロバを二つ並べて、その上を閉脚ジャンプする。	 一列に並び、2回障害物を飛び越える。	

※「ピアオン・ジ・マオン」:は地面に着いた腕を軸にしてその周りを回る。「カデーラ」は両足を肩幅より広く開き、膝を 90 度近くまで屈曲し、両手で顔面をガードする基本の構え姿勢。「アマーダ」は回転蹴り。

(筆者作成)

表 9 参与観察 4 回目(2010 年 8 月 26 日木曜日)の活動内容

出席者数:男児 6 名、女児 3 名/道具:打楽器パンデイロ、ロバの玩具イス

時刻	活動内容	指導者の指示内容と子どもたちの様子	教師の働きかけ
12:15	1. 走る ピリンバウが鳴る間は左回りに走る。一度歩き再度走る。		指導者は「ピリンバウの音が鳴っているときは走って、鳴りやんだら止まるよ」と指示し、ピリンバウでカポエイラの歌を弾き歌う。
12:17	2. 各部位のストレッチ 腕・首を回す。		
12:20	3. 壁かけ倒立 10 秒キープする。		
12:22	4. 様々な姿勢になる 「ケータジクワトロ」で歩く。片足をあげてバランスをとる。	 	楽器のリズムに合わせて動く。指導者の合図で、コリニャで歩く。「(コリニャの姿勢の時の)肘は曲げてる?ちゃんと肘曲げて。」と言葉かけをする。指導者は「足を上げて。高く上げてね。顔はどこ向いているかな?こっちゃんを見るんだよ!」と言葉をかけ、子どもは片足を挙げてバランスをとる。
12:25	5. ポッチとカデーラの動き 基本姿勢「カデーラ」で下がる。途中で応用姿勢。		指導者はピリンバウを弾き「音をよく聞いて、低くカデーラして。ちゃんと膝を曲げて。」と言葉掛けをする。
12:27	6. 側転	教師がはじめに演示し、個別に指導する。	
12:30	7. 鬼ごっこ 鬼が走りタッチをする。ただし両足をそろえてしゃがむ姿勢をするとタッチは無効。		教師がピリンバウを弾き、「コリニャはカポエイラの大事なよけだよ。タッチされたらすぐにしゃがんで」と言葉かけをし子どもの活動が活発化するように促す。
12:34	8. 楽器「ピリンバウ」演奏体験/子供用の小さいピリンバウ(長さ 80cm 程)を弾く。		「カポエイラの大切なリズムだよ。カポエイラをする人はみんな弾けないといけないよ。」と言葉かけをし、弾きたいと申し出た子どもから順にピリンバウを渡す。
12:39	9. ジョゴ 一人ずつ指導者とジョゴ(ゲーム)を行う。他の子どもは手拍子をして歌う。		指導者は、「カポエイラは音楽なし?そうじゃないでしょう?はい、ちゃんと手を叩いて、盛り上げて!声が出てない子はいないよね?大きな声を出して」と歌と手拍子を指示する。

※「ケータジクワトロ」は仰向けで両手両足を地面についた姿勢。

(筆者作成)

### 第3節 幼児対象クラスの教育内容と展開パターンと鍵概念

#### 1. 教授内容と展開パターン、授業構成の観点

##### (1) 活動の種類

参与観察した全4回の活動内容は表10の通りである。全4回を通して活動内容は表11の通りのべ17活動であった。具体的には「走る」「ストレッチ」「腕立て伏せ運動」「壁掛け倒立」「ブリッジ」「動物のマネ」「様々な姿勢」「アウー（側転のような動き）」「カデーラ（基本の構え）とボッチ（よけ姿勢）」「ジンガ（基本の足運び）と蹴り」「イス跳びこし」「イスとりゲーム」「鬼ごっこ」「ジョゴ」「手拍子と歌」「楽器を弾く」「ホーダの話」である。いずれの活動も9分以内であり、最も時間がかけられたのは3回目の参与観察時に7番目に行われた「ジンガと蹴り」の9分間であった。活動内容と各所要時間は表11の通りである。これらの活動を目的に応じて分類したところ「①基礎体力運動」「②カポエイラ基本動作」「③遊び混合ゲーム」「④ホーダ構成要素」の4つの活動の種類が抽出された。

##### ① 基礎体力運動

最終的に体力の定義の構成要素である筋力や敏捷性、柔軟性等を高めることを目的としていると判断される活動である。「走る」「ストレッチ」「腕立て伏せの運動」「壁掛け倒立」「ブリッジ」が該当する。

##### ② カポエイラ基本動作

蹴りやよけ、移動の動き等のカポエイラのゲームをする際の基本的な動きである。教師へのインタビューによるとくり返しながらカポエイラ特有の動きの習得をねらいとしている。「動物のマネ」「様々な基本姿勢」「アウー」「カデーラとボッチ」「ジンガと蹴り」の5つの活動である。ただし「動物のマネ」は、教師の所属するカポエイラグループにおけるゲームの種類の一つに、動物の模倣をしながら行うゲームがあり、そこで行われる「サソリ」や「カエル」を模倣した動きが行われていたため「カポエイラ基本動作」に分類した。

##### ③ 遊び混合ゲーム

「イス跳びこし」「イスとりゲーム」「鬼ごっこ」の3つの活動である。鬼ごっこやイスとりゲーム等の一般的なルールのある遊びを元に、カポエイラ基本動作を取り入れてアレンジしている活動をさす。たとえば、鬼ごっこの場合は鬼が走っている子どもを追いかけるが、その子どもが鬼に迫られたときにカポエイラの基本の構え姿勢になった場合は、鬼がタッチできないというルールで



ある。「イス跳び越し」の場合は、イスを跳び越した後にジンガをするという活動が組み合わされていた。

#### ④ ホーダ構成要素

ホーダを構成する要素に関連する活動が該当する。例えば表 11 中の項目「14. ジョゴ」は通常ホーダの真ん中で行われる。また「15.手拍子と歌」は、ホーダを囲む人々によってなされ、リズムに合わせて手を叩き、カポエイラの歌を歌う。「16.楽器を弾く」は、4 回目に行われたビリンバウに触れる活動が該当する。

表 10 2010 年 8 月カポエイラの幼児対象クラスの活動の順序と時間

時刻	1 回目	2 回目	3 回目	4 回目
12:15	1.走る	1.走る	1.走る	1.走る
12:16				2.各部位ストレッチ
12:17	2.イスとり ゲーム	3.壁掛け倒立		
12:18				3.様々な姿勢
12:19	2.各部位ストレッチ	4.様々な姿勢		
12:20			3.壁掛け倒立	
12:21				3.ジンガと蹴り
12:22				
12:23	4.様々な姿勢			
12:24		5.カデーラと ポッチ		
12:25			5.アウー (側転)	
12:26				6.アウー (側転)
12:27	6.イスとり ゲーム			
12:28		7.鬼ごっこ		
12:29			7.鬼ごっこ	
12:30				7.鬼ごっこ
12:31	7.鬼ごっこ			
12:32		7.鬼ごっこ		
12:33			7.鬼ごっこ	
12:34				7.鬼ごっこ
12:35	7.鬼ごっこ			
12:36		7.鬼ごっこ		
12:37			7.鬼ごっこ	
12:38				7.鬼ごっこ
12:39	7.鬼ごっこ			
12:40		7.鬼ごっこ		
12:41			7.鬼ごっこ	
12:42				7.鬼ごっこ
12:43	7.鬼ごっこ			
12:44		7.鬼ごっこ		

基礎体力要素
  カポエイラ基本動作
  遊び混合ゲーム
  ホーダ構成要素

(筆者作成)

表 11 2010 年 8 月カポエイラの幼児対象クラスの活動内容と時間

種類	活動数	活動内容	8/5(木)	8/10(火)	8/24(火)	8/26(木)	活動合計 時間(分)	
			時間(分)	時間(分)	時間(分)	時間(分)		
①基礎体力運動	1	走る	2	2	4	2	10	28
	2	ストレッチ		1	3	3	7	
	3	腕立て伏せの運動		4			4	
	4	壁掛け倒立	1	2		2	5	
	5	ブリッジ	1	1			2	
②カポエイラ基本動作	6	動物マネ	2				2	44
	7	様々な基本姿勢	4	2	2	3	14	
		基本姿勢のゲーム		3				
	8	アウー(側転)			2	3	5	
	9	カデーラとボッチ				2	2	
③遊び混合ゲーム	10	ジンガと蹴り	4	6	2 9		21	23
	11	イス跳び越し			4		4	
	12	イスとりゲーム	3		4		7	
	13	鬼ごっこ	4	4		4	12	
④ホーダ構成要素	14	ジョゴ	3	5*		6*	14	39
	15	手拍子と歌	2	5	3	6	16	
	16	楽器を弾く				5	5	
	17	ホーダの話	4				4	
活動時間合計			30	30	33	30	123	123
のべ活動時間合計			30	35	36	30	134	134
合計活動数			11	10	8	10		

注:「15 手拍子と歌」の活動は、表中\*印の「14 ジョゴ」時に同時に行われていた。

そのため、2 回目と 4 回目の合計活動時間は 30 分である。

よって、実際の合計時間は 123 分であるが、のべ活動時間は 134 分となる。

(筆者作成)

## (2) 活動の展開パターン

前節で分類された 4 つの活動の種類における「②カポエイラ基本動作」と「④ホーダ構成要素」はカポエイラそのものの活動となるが、「③遊び混合ゲーム」は一般的な遊びの展開の一例でありカポエイラ導入のための遊びといえる。

そして「①基礎的運動」は、遊びの展開ではなく体力向上を目的とした運動であり、先の②④とは第一義的目的の異なる活動といえる。活動の展開は③のカポエイラ導入の遊びを挟みながら、①による体力向上あるいは②や④のカポエイラそのものの活動へ展開するパターンが抽出された。

さらに、「②カポエイラ基本動作」として行われていたのは、ステップ、蹴り、よけ、移動、構えの 5 種目であった。これらの基本動作は、②の時間にゲーム感覚で繰り返すという工夫がなされていた。また同時に「③遊び混合ゲーム」の一要素としてゲームにも取り入れられていた。

### （３）教授内容を構成する観点

教授内容を構成する観点として、活動順序と活動時間、評価の観点の 3 点について結果をまとめる。

また、カポエイラの構成要素に着目し、音楽的要素の教授内容としての扱いについても検討する。理由は、カポエイラの特徴としてジョゴだけでなく、歌や楽器演奏等の音楽的要素を伴う点が民族文化的性格を強く表しており、カポエイラの教授において不可分であると判断されるためである。

#### ① 活動順序と活動時間

表 10 に基づいて活動順序を見てみると、クラスの前半は「①基礎体力運動」で、後半は主に「④ホーダ構成要素」が行われた。これは一般に学校以外の場所で開かれているカポエイラの定期練習等でも、1~2 時間の練習時間中の最後 20 分でホーダを実施することが慣例となっている。そのため、指導者の身に染み付いたカポエイラの練習の流れである可能性が考えられる。カポエイラの「④ホーダ構成要素」の活動も後半であることから、ウォーミングアップも含めてホーダを行う前に行っていたとも考えられる。

表 11 を基に、参与観察 1 回目～4 回目の合計活動時間の長い順に並べ替えを行った結果、最も時間が割かれていたのは「②カポエイラ基本動作」に分類される「ジンガと蹴り」の活動が 21 分間であった。次は「手拍子と歌」で 16 分となり、3 番目は 14 分間の「ジョゴ」であった。いずれも「④ホーダ構成要素」に分類される。同じく 3 番目の 14 分間だった「様々な姿勢」のカテゴリーは「②カポエイラ基本動作」であった。つまり活動時間別にみた上位 4 つの活動内容は「②カポエイラ基本動作」と「④ホーダ構成要素」の練習であった。

また、各クラスにおける活動の種類別の合計時間によると「④ホーダ構成要素」が 39 分間、「②カポエイラ基本動作」が 44 分間で合計 83 分間となり、カポエイラそのものの活動が全 4 回の活動合計時間の 6 割を占めていた。そして残りの 4 割が幼児の体力向上や遊びを志向する運動遊び活動であった。

さらに「④ホーダ構成要素」の具体的な活動内容を見ると、先の表 11 に基づくと実際のゲームを行う「ジョゴ」以外は、すべてカポエイラ基本動作を伴わない活動内容であった。「手拍子と歌」が 16 分、「楽器を弾く」が 5 分、「ホー



ダの話」を聞く<sup>53</sup>が4分となり、39分中の25分間がカポエイラのホーダの行い方を習得するための活動内容であった。このことから、カポエイラの練習において身体運動のみならずホーダの行い方を習得することは、カポエイラ習得の一環として位置づけられていると看取できる。

## ② 音楽的要素の扱い

表9における「教師の働きかけと言葉かけ」に基づく、「カポエイラ基本動作」や「遊び混合ゲーム」において、教師がパンデイロやビリンバウの弾き歌いを伴った活動が活動時間の過半数を占めており、常に音楽的要素が伴った活動であった。これは参与観察した他の回にも共通する特徴であった。また、教師の言葉かけにも、楽器のリズムに留意することや、手拍子を促す内容が散見され、学習者に対して動きながら意識させようとする意図が見受けられた。こうして、学習者に動きと音楽・リズムは常に一体のものとして体験されると考えられる。

「手拍子と歌」や「楽器を弾く」の活動でも、学習者自身が歌や楽器に親しむことで、カポエイラにおいて音楽的要素が必要不可欠かつ身近なものであるというカポエイラ実践者間に共有されている一般的な感覚を伝えようとする様子がうかがえた。

## ③ 活動の評価と傾向

「ホーダ構成要素」として重要な活動内容「ジョゴ」において、ゲーム内容を教師がどのように指導していたかについて、1回目～4回目の練習クラスにおける教師の留意点（表6～表9の「教師の働きかけ」参照）に基づく、カポエイラの理念であるマリーシアやマンジンガ等には言及していないことが分かる。まずは相手と向かい合いカポエイラ基本動作を相手の動きに応じて行うことが優先課題であったことが読み取れる。

また、先述したように5つの「カポエイラ基本動作」は「遊び混合ゲーム」の一要素としてゲームにとりいれる、あるいは「カポエイラ基本動作」の習得をゲーム感覚で繰り返すという2つの方法で行われた。その際、基本動作の達成度について、表6～表9の「教師の働きかけ」に基づく、基本動作の正確さよりも、行為そのものを重視していたと見受けられた。

具体的な「カポエイラ基本動作」の習得における学習者の達成度は次の通りであった。

---

<sup>53</sup> ゲームの始め方や手拍子の仕方等のホーダを行う上での決まりごとについて話した。

- ・ 基本ステップは、右手と左手が逆になっても教師は特に注意はせず、学習者の多くは音楽のリズムに合わせて足を入れ替えることが出来ていた。
- ・ 蹴りは片足立ちになり、自身の目の前で半円を描くように蹴り脚を動かす種類の蹴り「メリアルアジフレンチ」だった。その際、全員片足立ちになれたが、上げた脚を体側から前まで弧を描くように回せた学習者は半数程度だった。
- ・ よけは学習者全員が行うことが出来た。
- ・ 構えは足が複雑な位置になるため、全員は出来ていなかったが、教師を模倣してしゃがむ事は出来ていた。

これらの教師の学習者への働きかけと学習者の達成度合いから、「ジョゴ」において、身体技法の完成度は重視されていないようだった。

## 2. 授業構成の観点：即興を軸とした「ジョゴ」概念

### (1) カポエイラ独特の世界観の希薄化

4つの活動の種類と活動時間の結果を踏まえると、学習者である幼児の心身の発育発達段階を考慮して、身体技法の完成度よりも、行為そのものを重視しているようだった。その一方で、活動の展開パターンでは、カポエイラ基本動作が複数の活動の種類において取り入れられていた。当然ながら、単調になりがちな基本動作の繰り返しを楽しんで行うための工夫がなされていたと考えられる。

また、教授内容の構成では、カポエイラのホーダの行い方の練習もカポエイラの習得の一環として位置づけられていた。ただし、カポエイラ独特の理念であるマリーシア等（狡猾さ、ずる賢さ）は教授されていなかった。これについて、乳幼児の遊びの発達構造を見ると、個人差はあるが3歳～5歳は「集团的遊び」に興じるようになり、7歳頃には「明確なルールのある遊び」が中心となるといわれている（高内, 2009, p.73）。そのため、カポエイラ独自の理念が重視されなかったことは幼児の精神的発達段階を考慮すれば当然のことであり、「ジョゴ」においてもルールを踏まえた上で相手と心理的に高度な駆け引きを伴う蹴りとよけの攻防は、3歳～5歳児では難しいと考えるのが妥当である。よって、幼児対象の練習クラスにおいてはマリーシア等の駆け引きは重視されず、基本動作を相手に合わせて行えることが優先課題となった。つまり幼児を対象とした場合、カポエイラ独特の世界観が希薄化された「ジョゴ」が行われていると考察された。

次に「行為の意味」を重視するというカポエイラ固有のゲームの精神を検証する。これまで幼稚園における参与観察で得られた結果を踏まえて、文献も含め、あらためてカポエイラの教育的意義を考察する。

## （２）行為の意味「問いかけと返答」を重視する

前項で考察された活動の傾向は対象者の発達段階によるものであったが、注視すべきは先述したように、技の完成度は重視されておらず、むしろ行為の意味に着目するという点である。幼児を対象とした場合、一般的に個人の発達の違いを理解し、運動そのものを楽しむことを優先し、幼児の自発的な活動を促すということが、幼児の運動指導において重視されている（宇土, 2009, pp.70-75）。しかし、イーミックな見方をすればカポエイラでは他の視点からもジョゴを捉えている。これは、参与観察における幼児同士のジョゴにおいても看取されたことである。つまり、技の完成度よりもジョゴをしている二人の間において技が行われることに意味があるという見方である。ジョゴをしている相手へ働きかける技は、「問いかけ *pergunta*」の意味を持ち、それに対応して動く「返答 *resposta*」の意味が込められているのである。

これは体育教材としてカポエイラのジョゴにおける身体的対話によって形成される身体について初めて論じた **Silva and Ferreira** も指摘している考えである。彼は、社会学的視点からこの身体的対話「問いかけと返答」を重ねることで「カポエイラの身体」が構築されると述べている（**Silva and Ferreira, 2012**）。カポエイラのジョゴは身体的対話であるという教えはこれまでも多くの師範が語ってきたことでもある。例えば、ビンバ師範の弟子で、アバダ・カポエイラの創始者であるカミーザ師範もリオデジャネイロ市における指導の中で、頻繁にジョゴの「問いかけと返答」の意味と重要性について日常で行う会話のコミュニケーションに例えて主張している。またカミーザ師範の弟子にあたるカングルー準師範によって 2010 年 10 月に名古屋で行われたカポエイラ講習会においても、彼はジョゴにおける「問いかけと返答」が重要であると指導していた。

ただし、本稿ではさらにその考えを敷衍して捉えることを試みたい。「ジョゴ」に限らず、カポエイラでは楽器の演奏についても楽器間に存在するヒエラルキーに基づき演奏者同士の「問いかけと返答」が重視され、また歌においても主となる歌い手とその他の人々による合唱という形で「問いかけと返答」がなされている。つまり、楽器、歌、ジョゴといったカポエイラの各構成要素において多層的に「問いかけと返答」が重視されている。その根拠として一つのエピソードを紹介したい。

2013 年 5 月に神奈川で行われたカポエイラの楽器と歌の講習会でのボアボズ先生の指導内容である。ボアボズ先生は、カポエイラ界における歌い手としてブラジル国内では大変著名な人物である。彼がその講習会の時に、弦楽器同士、打楽器と弦楽器、打楽器同士において「問いかけと返答」という表現を用いて、交錯的にそれを意識させる指導を行っており、主となる歌い手と合唱と

の掛け合いについても同様の表現を用いていた。

ゆえに、Silva and Ferreira の提示した「問いかけと返答」はジョゴだけでなく、ホーダの各構成要素内、あるいは各要素間においても必要な考えであることが明らかであり、カポエイラ実施の必要条件といえよう。つまり「問いかけと返答」はカポエイラの核となる概念であり、文化的特性といえる。そして授業構成において不可欠な観点である。

次項ではカポエイラの核となる概念について詳述する。

### （３）カポエイラの文化的特性「ジョゴ」概念

ここで「ジョゴ」における「問いかけと返答」という意味を重視することについて一つの例を紹介する。

初心者の多くは、初めて行うカポエイラの「ジョゴ」を大変難しく感じる。共に練習に参加している上級者は滑らかに動き、簡単そうに「ジョゴ」をしている。しかし、いざ自分の番になると、相手の動きに対してどのように振舞っているのかわからず戸惑うという場面が多く見受けられる。相手と対面したら教師から教わった動きを真剣に、忠実に行おうと腐心する。しかし、ベテランのカポエイラプレイヤーは真剣な相手をからかうかのように時折笑いながらフェイントをかけ、蹴りもせずにジंगाというステップだけで相手を翻弄するのである。多くの人はこのような場面を体験して初めて「ジョゴ」は真剣さや忠実さだけでは太刀打ちできないと気づく。その一方で、共に練習している初心者の中には、初めてにもかかわらず相手の動きにゆっくりではあるが、ちゃんと応じられている人もいる。先ほど習ったばかりの技の完成度は決して高くないが、なんとかベテランの動きに応じているのである。教師もその「ジョゴ」に対して、賞賛の言葉をかけている。いったい何が違うのか。当然、プレイヤー自身の競技歴や基礎体力が影響することは否めないが、このエピソードでわかることは、前者は自身の「動きの完成度」に意識を向けすぎ、相手の動きの意図を考える余裕がなかったのである。一方、後者は相手の行為を読み取ることにもまず集中し、自身のできる範囲の動きで即興的に応じていた。つまり前者と後者には即興の度合いが異なっていたのである。カポエイラで求められる「問いかけと返答」とは当然後者である。

よって「問いかけと返答」という意味生成において即興性が基軸となる「ジョゴ」概念が措定される。そして、この「ジョゴ」概念はカポエイラの各構成要素間においても多層的にかつ交錯的に意識されうる。さらには音楽リズムとジョゴにおける動きの両者の「問いかけと返答」も互いに応じあうという即興性を高めることが重要であることはいうまでもない。

授業構成においてこの即興性を重視した「ジョゴ」概念を軸に各活動を工夫

することによって、いずれの活動においてもカポエイラの「問いかけと返答」の意味生成が可能となる。それによって、ダイレクトにあるいはメタファーとして学習者に「ジョゴ」概念が経験されるのである。これは高度な駆け引きが可能となる児童以上を対象とする授業構成においても当然意識されることが望まれる。

これを踏まえて、本稿において明らかにされた幼児対象の授業パターンを読み直すと、4つの活動の種類のいずれにおいても常に伴っていた音とリズムに意識を向けつつ、即興性を高めるプロセスが経験されて、内化されていたといえよう。換言すれば、カポエイラの学習において即興を高める意識を通じてカポエイラ独自の文化的特性である「ジョゴ」概念が身体化されたのである。

このように、即興性を軸とする「ジョゴ」概念はカポエイラの文化的特性であり、カポエイラの授業構成の重要な観点となる。

本章では、幼児対象のカポエイラクラスにおける教授内容の明確化を通して、抽出された活動パターンによる授業パターンを基に、授業構成の観点を考察した。そして、ジョゴにおいて「問いかけと返答」という即興性が鍵となる「ジョゴ」概念を軸にした活動の展開が重要であるという知見が得られた。これらの教材解釈は、民族スポーツカポエイラの教材価値を読み直すことによって、文化的概念を捉える試みであった。

ブラジル政府は近年カポエイラが「スポーツ」として世界に普及していることを懸念し、2010年にはブラジル外務省から『**Texts of Brazil** カポエイラ』という和訳書籍を刊行している。本書では、近年のカポエイラの学術的研究成果がまとめられており、文化としてのカポエイラ普及のために当初より日本国内のカポエイラ団体に無料配布されている。その冒頭において「こういった（近年蔓延しているカポエイラの）定義は、おもにカポエイラのスポーツとしての面を取り上げているので、カポエイラが、スポーツ以外にも、いろいろな分野でブラジル社会に関係してきたことが、全て省略されてしまっています。だからこそ本書で、カポエイラのスポーツ以外のいろいろな分野での、カポエイラの役割を考察していきます。社会の中で、大切な役割をしているからこそ、カポエイラは、ブラジルの、もっとも複雑な文化表現の一つとされているのです。」（ブラジル共和国外務省, 2010, p.7）と明記されている。つまり、カポエイラが単にスポーツとして普及することは本意でないことを示し、カポエイラが文化表現として認識されるよう啓発している。

この指摘を踏まえて、本章における授業構成の観点についての考察は、カポエイラにおける文化的概念の考察と位置づけられる。そして、伝統派やスポーツ派といった近年のカポエイラの近代化によるジョゴの変容を超えた、言い換えれば、魔術等のカポエイラ独特の世界観を基底とした「ジョゴ」についても、

体育授業における「ジョゴ」についても、それらに通呈する普遍的な「ジョゴ」概念を考察する端緒となろう。



## 第 3 章

### カポエイラ競技大会と文化的固有性

### 第3章 カポエイラ競技大会と文化的固有性

#### 第1節 カポエイラの競技化

本章はカポエイラの競技化という現代の実践者らの経験に着目することで、創造されるカポエイラの文化的固有性の内実を明らかにすることを目的としている。

後述するように、カポエイラの競技化への足掛かりは、古くは1920年代に既に確認される。当時は国民的体操としてカポエイラを基に考案され、競技化のための競技規則の検討がなされた。その後、1930年代にボクシングという他競技を後ろ盾に競技化が着手された。カポエイラの民族文化的な性格がスポーツ競技化されるプロセスにおいて、どのように競技規則として扱われるべきかが、長年にわたり議論されている。

こうした中、アバダ・カポエイラという会員数が最多といわれている団体において、1997年から競技大会が継続的に実施されている。それはブラジル国内にとどまらず、ヨーロッパ各国を始め徐々に世界各国に普及している<sup>54</sup>。本章では、アバダ・カポエイラの本拠地であるリオデジャネイロにおけるフィールドワーク（2009年8月10日～9月1日、2010年8月5日～8月26日、2011年8月5日～8月25日）と、入手できた関連資料の文献研究を行う。そこで、彼らが競技大会を通じて、カポエイラのどのような性質を高めようとしているのか、また競技化によって何を守ろうとしているのかといった、実践者の経験と志向に着目する。それにより、一種の文化変容として、カポエイラの競技化における文化的固有性の創造が考察されよう。

#### 1. 競技化の経緯と先行研究

本章でいうカポエイラの競技化とは広義のカポエイラの「スポーツ化」とは区別される。カポエイラにおける「スポーツ化」については、1930年代のビンバ師範によって創出された「ヘジオナウ流カポエイラ」の体系化を源流に据えた論考が挙げられる。現代までの過程で生じた身体技法やゲームの目的の変化は「スポーツ化」として論じられている（Alvez and Montagner, 2008）。

本章では、そのような広義の「スポーツ化」の分流として見なされる「競技化」に焦点を当てている。特に、明文化された競技規則が制定され、定期的に

---

<sup>54</sup> 日本では、2006年7月に神奈川県横浜市で第1回日本競技大会が開催され、日本国内でも初の試みとなった。その後、第2回は2013年7月13日～14日に、愛知県小牧市にて開催された。

競技大会が開催されることとその過程を意味する。

近年の現代的カポエイラにおける競技大会に関する研究は増加傾向にある。そうした状況を踏まえて本稿では次の2つの先行研究を挙げる。一つは2012年にブラジルのカンピナス州立大学体育教育学部のポスドク研究員 Correio による投稿論文である。そこでは各流派の競技大会の比較によるスポーツ的側面が考察された。もう一つはポルトガルのコインブラ大学においてカポエイラを歴史学・人類学的見地から研究している Jaquera<sup>55</sup>によって2013年に発表された投稿論文である。その論文は、競技化に関する史料に基づいて論じられている。本章では、先に競技化の経緯を含めて総括し、先行研究の検討を行う。

競技規則を始めて検討した Zuma (本名 Annibal Burlamaqui) は、1928年にリオデジャネイロで出版した『国民的体操法:カポエイラジェン』において、カポエイラ競技を想定して、競技エリアの規定や、審査員、同点判定基準、使用靴が検討され、カポエイラのトレーニング方法や打撃の命名を行った (Correio, 2012)。

その後、Zuma を中心に、1936年におけるボクシング・サンパウロ連盟 FPP のブラジル闘技「カポエイラジェン」部門が創設され、国家的スポーツとして認識されるようになった。

1941年には、ブラジルスポーツ協議会の設立に伴い、法令 3199 号によってブラジル初となるブラジルの国技に関する制定がなされ、当時ブラジルボクシング連盟の傘下にあった競技的な性格の強いカポエイラ部局も対象とされた (Correio, 2012)。

1960年には、ブラジル学校競技会におけるカポエイラは、政府のスポーツ記念日の一部として創始され精度の高いスポーツを目指し、教育的な活動としての価値を高めることも視野におかれていた。ブラジル学校競技会はカポエイラ競技大会における評価の範囲について試行錯誤が続いた (Correio, 2012)。

しかしながら、「格闘系スポーツ」として技術や形式のみが体系化され、カポエイラの文化的側面、つまりカポエイラ独特の世界観を基底としたカポエイラの良さを保とうとする流れが台頭し、技術偏重の競技としてのカポエイラは下火になった。1989年には、ブラジル学校競技会が競技大会を再編成し、ゲームだけではなく歌や集会形式ホーダの演出、師範との話し合いを含むワークショップがなされた。ブラジル学校競技会の競技大会モデルは、今日まで多くの流派に参考とされている (Correio, 2012)。

---

<sup>55</sup> Aqueira は、ブラジルで修士課程まで修了し、コインブラ大学体育スポーツ科学領域における博士号を取得後、現在は同研究領域の助手として研究活動を行っている。2002年にブラジル国内で開催された「スポーツ、レジャー、ダンス、体育教育の歴史のブラジル学会」においてカポエイラ研究における新たな要素として人類学的分析を用いた研究を提案している。

後に、複数の団体によって、文化的表現としてのカポエイラの競技化が試みられている。つまり、技術に偏らず歌や楽器も含む形式を保持し、それを生かした競技運営や競技評価方法の確立がなされている。例えば、サンパウロ州カポエイラ連盟やブラジルカポエイラ連盟、国際カポエイラ連盟、アバダ・カポエイラなどが、明文化された競技規則を各団体で有しており、定期的に競技大会を開催している（Correio, 2012）。

Correio による研究では、カポエイラの競技大会の現状が明らかにされている。2012 年にサンパウロ地区におけるサンパウロ州カポエイラ連盟とアバダ・カポエイラによって開催された二つの競技大会の競技規則などの比較によって、カポエイラの競技化の多様性が考察された。Correio は、カポエイラにおける競技大会が本来のカポエイラの性質を失い、「高い効率性と見世物化」を志向するスポーツを特徴づける傾向になっていると指摘している。そして、今後「芸術なのかスポーツなのか」という議論を伴いながら新たな形式が生成されることを示唆している。

一方、Jaqueira は、カポエイラのスポーツ競技化に最初に着手したブラジルボクシング連盟の 1968 年と 1969 年に開催されたシンポジウムの報告書に基づき、当時の競技規則化における問題点を論じている。結論として、カポエイラの競技化に際して、「身体的な表現の可能性を追求する」過程で、「カポエイラの固有性をスポーツ競技における判断基準とする規則化がなされなかった」と指摘している。Jaqueira は、当時の関連文書が抹消されており入手できない中で、ブラジルボクシング連盟の報告書には、1970 年末に、ボクシンググループ所属のスポーツ形式としてカポエイラ競技大会が実施されることが明記されており、「フォークロアからスポーツ形式としてのカポエイラへ変容する」という文言が記されていることにも言及している。

これらの先行研究では、通時的にも、共時的にも、カポエイラが競技化によって新たな「形式（modalidade）」の創造がもたらされることが示唆された。しかしながら、具体的にどのような「形式」が生成されているのかその内実については言及されていない。Correio の言葉を借りれば、カポエイラの競技化において、その形式には「多様性が認められる」のである。ゆえに本章では、アバダ・カポエイラの競技規則の採点項目を事例に、その多様性がいかなるものか検証される。

## 2. 現代流カポエイラの技術と理念の特徴

カポエイラの技術は、直線・回転系の蹴り、よけ、移動の動き、見せ技等があるが、特徴的なのは、基本のステップ「ジンガ」である。左右に重心を移し替え続けるジンガは、相手に動きを読まれにくくし、巧みな駆引きを可能にす

る。このようなゲームでは、ずる賢さや抜け目ない様子（マリーシア、マランドラジェン等）を重視するカポエイラ独特の世界観に基づく理念が基底となっており、カポエイラプレイヤーの資質として求められる要素である。

カポエイラの流派によって異なるが、原則として相手の蹴りは避けることが前提とされる。また、カポエイラの理念として、決定打は避けられ、ゲームの駆け引きにおいて相手の技術を引き出しながら、自らの技術も活かすというゲームが好まれる傾向にある。

カポエイラのゲームは、人々が囲むことでできるホーダと呼ばれる輪の中で、楽器演奏や合唱との兼ね合いで進められる。ゲームの種類は、本稿で対象とする流派では、主に 5 種類ある。今となってはカポエイラの代名詞といわれるピリンバウという弦楽器の奏者が、カポエイラのゲームの種類を表すリズムを奏することで、プレイヤーは動き合わせる。時には、歌によってゲームへの忠告がなされ、歌と楽器とプレイヤーの動きの相互作用によって即興的に場の文脈が創られていく。このようにホーダを構成する、楽器奏者や輪の人々の手拍子と歌と密接に関わり合いながら、カポエイラのゲームは進められていくため、どの要素も不可分といえる。

## 第 2 節 アバダ・カポエイラの競技大会

### 1. 競技化の目的

先述したように、アバダ・カポエイラ Abadá-Capoeira とは、Associação Brasileira de Apoio e Desenvolvimento da Arte-Capoeira の頭文字の略語で、「カポエイラ芸術の支持と発展のためのブラジル協会」という意味である（以下「アバダ」と略する）。1988 年にアバダはカミーザ師範（本名 Jose Tadeu Carneiro Cardoso 1955~）と兄であるカミーザ・ホーシャ大師範（本名 Edvaldo Canreiro e Silva 1944~2013）と共にリオデジャネイロを本拠地に設立され、ヘジオナウ流カポエイラを源流に持つ現代的カポエイラの一流派である（Abadá-Capoeira, 2010）。

アバダは、カポエイラの伝統の保存と進化を目指しており、カポエイラの発展のための新たな試みもなされている。約 50 ヶ国においてアバダの教室が開講されており、会員数は 40000 人を超えるという。カポエイラ組織としての規模は最大とされ、多数のカポエイラ関連書籍でも度々紹介されている。

第 1 回の世界競技大会は、リオデジャネイロにおいて 1997 年に開催された。その後は、隔年で開催されている。2000 年頃からブラジル国内の様々な地域や、海外においても競技大会が開催され始めた。その過程で徐々にゲームにおける

採点項目や開催要項が体系化された。

2003 年 7 月発行の機関紙 “Jornal Abadá-Capoeira” (Sodré et al., 2003) によると、2003 年のブラジル内外における競技大会日程が掲載されていた（表 12 参照）。ブラジル以外は、ベルギーやアメリカで実施されている。ヨーロッパはカミーザ・ホーシャ師範が中心となり 1970 年代からカポエイラの普及活動が行われたため、各国にアバダの教室が存在する<sup>56</sup>。

表 12 2003 年のブラジル国内外の競技大会

月 日	大 会 名	国	都 市
4/17～4/21	ヨーロッパ競技大会	ベルギー	ブリュッセルにて
5/ 24～5/25	サンパウロ大会	ブラジル	サンパウロ州アメリカーナ
5/31、6/1	リオデジャネイロ地方競技大会	ブラジル	リオデジャネイロ州 アングラ・ドス・ヘイス
6/1	南ブラジル競技大会	ブラジル	サオンクラメンチ州フロリアノポリス
6/5～5/6	ゴイアス競技大会	ブラジル	ゴイアス州ゴイアニア
6/15	連邦地区競技大会	ブラジル	連邦地区ブラジリア
8/18～8/24	世界競技大会	ブラジル	リオデジャネイロ州リオデジャネイロ
不明	サンフランシスコ競技大会	アメリカ	サンフランシスコ

(Sodré et al., 2003 の記載内容を基に筆者作成)

## 2. アバダ・カポエイラ競技規則

本節では、1997 年から隔年で開催されている世界競技大会（Festival Internacional da Arte Capoeira Jogos Mundiais）のうち、入手できた資料を基に、1997 年第 1 回、2003 年第 4 回、2009 年第 7 回、2011 年第 8 回、2013 年第 9 回における競技規則を検証する。以下で「カポエイラ競技」と表記した場合はアバダ主催の競技大会を指す。アバダ・カポエイラ競技規則は全てポルトガル語であるため、訳出について明記されない場合は筆者によるものである。

### （1）1997 年 第 1 回 世界競技大会

1997 年第 1 回世界大会のアバダ・カポエイラ競技規則の冒頭に、カポエイラ競技の目的が次のように明示されている。

アバダ・カポエイラの最大の留意点は、カポエイラの特徴ができる限り最大に保障さ

<sup>56</sup> 2013 年 10 月現在、ドイツ、オーストリア、ベルギー、ベラルーシ、ブルガリア、キプロス、スロバキア、スペイン、フランス、ギリシア、オランダ、ハンガリー、イタリア、ルクセンブルグ、ポーランド、ポルトガル、イギリス、チェコ、スウェーデン、スイス、ウクライナに教室が存在している（Abadá-Capoeira Links, 2013）。



れるような競技大会を可能にする競技規則を構築することであった。競技と評価システムは、個々のプレイヤーではなくゲームに対して与えられるように構成された。それゆえに、もし個人のプレイがよくなければ、ゲームも良いものではなくなり、二人のプレイヤーに低い評価が与えられる。カポエイリスタは、次の点に気を付けなければならない。リズム、技術、創造性、戦略的展開、特徴、動きの連続性、そしてカポエイラ芸術の文化的アイデンティティの知識である。

上の文中のカポエイリスタの留意点に挙げられている「特徴」とは、4 種あるゲーム種目をそれぞれ特徴づける性質のことである。そして、カポエイラの特徴を最大に保障することを目的に、「カポエイラ芸術の文化的アイデンティティ」を競技者が意識すべきこととして強調している。これにより、主催者は文化的アイデンティティを前面に意識しており、カポエイラの固有性の探求を競技化において目指していると看取される。また、カポエイラ芸術の要素として「リズム、技術、創造性、戦略的展開、ゲームの特徴、動きの連続性」を強調している。

第 1 回目の競技大会では、470 名以上のエントリーがあり、64 名が予選を勝ち抜き、本選へ進んだ。64 名のうち 24 名は外国人で、40 名はブラジル人であった。ファイナリストとなった彼らは、4 人一組になり、競技者は他の 3 名と必ずゲームを行う。すべての競技者は各ステージで、4 つのゲーム種目である「サオンベントグランジ」と「イウナ」、そして「ベンゲラ」か「アンゴラ」のうちのどちらかの合計 3 種のゲームを行う（ゲーム種目の説明は後述する）。そのうち上位 2 名が次のステージへ勝ち進む。そして、最終ステージで最高得点の競技者が優勝となる（表 13 参照）。

1997 年のゲームの得点は合計 10 点で、採点項目は 5 つあり、表 14 のとおりである。

表 13 1997 年世界大会のステージと人数・組

ステージ		人数 と 組数
第 1	ラウンド A	4 人 1 組 × 16 組
第 2	ラウンド B	4 人 1 組 × 8 組
第 3	準々決勝	4 人 1 組 × 4 組
第 4	準決勝	4 人 1 組 × 2 組
第 5	決勝	4 人 1 組 × 1 組

(Sodré et al.,1997 の記載内容を基に筆者作成)

表 14 1997 年世界大会の採点項目

採点項目	点数
技術と創造性	0～3 点
リズム	0～1 点
戦略的展開(マリーシア)	0～2 点
継続性	0～2 点
独自性	0～2 点
合計	10 点

(Sodré et al.,1997 の記載内容を基に筆者作成)

表 15 1997 年の減点行為と減点数

対象行為	減点
相手に対する意図的な打撃や掴みかかること	2 点
ゲームの特徴の欠如	1 点

(Sodré et al.,1997 の記載内容を基に筆者作成)

得点は、競技者個人ではなく 2 人のゲームに対して与えられ、各ステージで累積される。しかし、次のステージに上がると 0 点になる。

同点決着について 1997 年では、第一に各ゲーム種目のうち最高得点となる一種目において点数が基準となり、それでも同点の場合は、第二にビリンバウの演奏で競うとされている。

減点行為については表 15 にある 2 項目について個人に対して減点される。減点数は累積なのか、ステージごとに 0 点に戻されるのかは定かではない。

## (2) 2003 年 第 4 回 世界競技大会

第 4 回では、第 1 回と同じく 64 名のファイナリストが選ばれるが、方法が異なる。事前に行われたヨーロッパとアメリカで開催された競技大会において、32 名の外国人が選ばれていた。そして、残りの 32 名中の 14 名はブラジル国内の競技大会において最優秀競技者が選ばれた。残りの 18 名は 500 名以上のアバダ所属の世界のカポエイリスタから選ばれた。

その他、ステージ数や対戦方法、採点項目、同点決着方法は 1997 年競技規則と同じであった。

ただし、ゲームの時間（表 16 参照）は、アンゴラとベンゲラのみ、15 秒間少なくなっていたが、後述するように、2013 年にはアンゴラは再び 90 秒、ベンゲラは 50 秒となっていた。

表 16 ゲームの種類と時間の変化

ゲーム種類	1997 年	2003 年	2009 年	2011 年	2013 年
サオンベント	45 秒	45 秒	40 秒	記載なし	45 秒
イウナ	60 秒	60 秒	45 秒	記載なし	60 秒
ベンゲラ	90 秒	75 秒	55 秒	記載なし	50 秒
アンゴラ			65 秒		90 秒

(Sodré et al.,1997, 2003, 2009, 2011, 2013 の記載内容を基に筆者作成)

### （３）2009 年 第 7 回 世界競技大会

第 7 回は、予選方法、各ステージの対戦方法、採点項目、同点決着、反則行為はすべて 2003 年競技規則と同じであった。

しかし、ゲームの時間のみ、大幅な変更がみられる。すべてのゲームにおいて短縮されている。例年参加者が増加し、夜中 12 時近くまで競技大会が行われたこともあったため、縮小化を図ったと考えられる。実務的な事情により、ゲーム時間の変更はやむを得なかったようである。その他、参加者数などは記載されておらず不明である。

### （４）2011 年 第 8 回 世界競技大会

第 8 回は、予選方法、各ステージの対戦方法は前回までと同じであった。しかし、得点、同点決着、反則行為が変更になっている。

得点は、従来 1 ゲームあたり 10 点満点だったが、第 8 回では 5 点満点に変更された。採点項目の詳細については競技規則上で言及されていなかったため、配点は把握できない。

同点決着については、第一段階としてイウナの得点の良い方が勝ち上がり、第二段階はビリンバウと歌で競う。前回までは、第一段階ではゲームの種類を問わず最高得点を比較していたが、今回ではイウナにゲームが限定された。

反則行為については表 17 のとおりである。

表 17 2011 年の反則行為と減点

	反則行為	減点
A	相手への意図的な外傷的攻撃	2 点
B	挑発や意識的な掴みかかり	2 点
C	未完成の技術	1 点
D	ゲームの特徴の欠如	1 点

(Sodré et al.,2011 の記載内容を基に筆者作成)

上の表の A では、相手が競技続行不可能となってしまった場合、反則者は競技に参加できないという処分が記されている。第 7 回までの反則行為よりも、項目が細分化されて減点対象が増え、より具体的に明記された。

このように 2009 年の第 7 回よりも 2011 年第 8 回において競技規則が大幅に変更された。また、採点項目という最も重要な内容は非公開であった。

### （５）2013 年 第 9 回 世界競技大会

2013 年 8 月にリオデジャネイロで開催されたアバダ・カポエイラ主催「カポエイラ芸術の国際大会第 9 回世界競技大会」においては、明文化された競技規則が大会用ウェブサイト上に一部公開された。この競技規則は、これまでの簡易の競技規則とは異なり、前文や章、条、項によって構成されており、より精緻な内容であった<sup>57</sup>。

その競技規則には、前文で「本競技規則に記載されている章や記事は一切行政との関係はありません」と断り書きがされたうえで、アバダ・カポエイラにおけるカポエイラ世界大会の評価や経緯のための共通理解を目的とすると明記され、解説されている。

また、競技規則の第 1 章では、「カミーザ師範は、カポエイラの理念（哲学）を損なうと、カポエイリスタの技術は改善しないと考え、カポエイラの理念に基づくカポエイラの競技化を模索していた。1997 年にその目的のための足掛かりとして十分であると確信をもって、第 1 回の競技大会は成功が納められた」と記されている。

採点は二人で行うゲームに対してなされ、得点はゲームの点数として計上されていた。従前の競技規則よりも、政治的関与を一切否定し、カポエイラ芸術の探求を重んじる姿勢が強調して記された。

2013 年におけるカポエイラ競技の競技規則やシステムは次節にて明らかにされる。

## 3. カポエイラ競技大会のシステム

カポエイラ競技の概要を、競技規則に基づいて、カポエイラ競技の実施とゲームの種類、段位カテゴリーと性別、体重階級制についてまとめる。

### （１）カポエイラ競技の実施とゲームの種類

カポエイラ競技におけるゲームの種類は、「第 18 条リズム」において次の表 1 の通り、4 種類に分けられている（表 18）。

各ステージにおいて、それぞれのリズムが演奏され、競技者は各ホーダで 3 つのリズムのゲームを行う必要がある。

---

<sup>57</sup> 以前から正式な競技規則が作成されていた可能性もあるが、主催者に対してその点については未確認である。

表 18 2013 年のゲームの種類と時間規定

ゲーム種類	ゲームの特徴*	時間
a) ベンゲラ	ゆっくりのリズム、連続する巧みな戦術の駆引き中心	50 秒
b) イウナ	見せ技中心、調和重視	60 秒
c) サオンベントグランジ	速いリズム、格闘性高い、蹴り技、倒し技中心	45 秒
d) アンゴラ	ゆっくりのリズム、表現力必要、狡猾な戦略的駆引が中心	90 秒

（「ゲームの特徴」は、筆者による補足説明。Sodré et al.,2013 の記載内容を基に筆者作成）

アバダが刊行している機関雑誌“Revista Abadá”にて解説されたゲームの特徴（Abadá-Capoeira, 2010, pp.13-14）は次の通りである。

サオンベントグランジは、速いゲームで、エネルギーがあり、即興的な多くの攻撃に特徴づけられるゲームである。ホーダの皆が歌い手拍子で参加し、格闘性が最も高い。

ベンゲラにおけるゲームは、よりリズムにのってゆったりとしており、表現的である。特徴は連続する戦略的な攻撃である。手や頭を使った地面の動きに器用さが必要とされ、連続的な動きの伴う知能的なゲームである。

アンゴラは、狡猾で戦略的なゲームであり、時として最も危険である。遊びのようにカモフラージュされる闘いである。遅いリズムで、ラダイーニャという歌い手の独唱によって場が統率される。カポエイリスタの多くの身体表現が必要とされ、相手の前で時には大きく、時には小さく振舞おうとされる。その攻撃は完全に崩れており、移動しながら行われる。

イウナは、合唱が行われないリズムであり、手拍子のエネルギーによってのみ行われる。高い技術のゲームであり、身体の修練と技術の精度を必要とする。上級生のカポエイリスタのみ行うことができ、精度の高い攻撃と多くのアクロバットによって特徴づけられる。

## （２）段位カテゴリーと性別

アバダ・カポエイラの段位は合計 19 段あり、試合の可能なレベルは、原則として段位 9 段目の上級生以上とされている。例外として、9 段目未満のレベルの試合も行われることがある。

出場者の人数にもよるが、試合のカテゴリーは 2~3 つに分けられる。2013 年の競技規則によると、次頁の表 19 の通りであった。

段位カテゴリーで、男女別になったのは実は 2012 年ブラジル国内競技大会からである。それまで、男女混合でゲームを行っており、表彰だけ男女別に行われていた。

表 19 性別とカテゴリー

	男性	女性
カテゴリー	段位*	段位*
C	9～10 段目	なし
B	11～12 段目	9～12 段目
A	13～16 段目	13～16 段目
マスター	すべての段位、40 歳以上	

\* 最上段位が 17 段目(大師範 Grão Mestre)として数えている。

(記載内容を基に筆者作成)

女性のカテゴリーは、2011 年ころから徐々に体系化する動きが生じていた。その根拠は、2011 年から年に数回、リオデジャネイロにて女性だけの合宿を行い、女性だけのカポエイラのゲームが研究されていた事実による。そうして、正式に 2012 年 5 月には一回目となる女性だけのカポエイラ競技大会がリオデジャネイロで開催され、2012 年 8 月のアバダ・カポエイラブラジル国内競技大会では、男女別のカテゴリーが設けられた。表 19 にあるように、男性に比べて女性のカテゴリーが少ないのは、上級者ほど女性競技者が少ないためと考えられる。

2013 年から新しく設けられたカテゴリーマスターとは、40 歳以上のすべての段位が該当する。カミーザ師範は常に「カポエイラは人を選ばない」と述べており、いかなる人への門戸も開いており、アバダ・カポエイラの理念とされている。そのような意味からも、生涯スポーツとしてカポエイラへの参加を促進させようという意図による。

### (3) 2012 年から採用された性別カテゴリーと体重階級

また、2012 年 8 月には男性に限り体重階級制も採用された。2013 年の競技規則によると、3 つの階級に分かれており、他の階級制の格闘技よりも階級が少なく、また設定体重が比較的重くなっていることが特徴的である(表 20)。

表 20 体重階級

階級名	体重
ヴィオラ(軽)	76.9 kg 以下
メジオ(中)	77kg～85.9kg
グンガ(重)	86kg 以上

(Sodré et al.,2013 の記載内容を基に筆者作成)



また、階級名はカポエイラで用いられる大・中・小の三つの種類の弦楽器ピリンバウの名称が用いられている。

これによって、各階級における表彰が可能となり、各階級のゲームの特色も際立ってくると考えられる。今後階級別のゲームの特色を生かす新たな競技規則が設けられる可能性も否定できない。

#### （４）採点項目と減点項目

公開された競技規則において、採点項目について言及されている箇所は、「第 6 章 第 21 条 得点について」である。それによると「ゲームにおける主な評価要素は、特性、基礎、継続性、創造性である」とされている。「特性」というのは、ゲームごとに特徴があるため、そのゲームらしさを表す特徴が重要な評価要素とされているのである。

これらがカポエイラ競技のゲームにおいて重視されている点といえよう。これよりも詳細な要素については明記されていないため、競技規則からは競技者が具体的に知ることができない。

次に、カポエイラ競技における反則行為は、第 8 章 第 30 条に明確に記されている（表 21）。それによると、減点はゲームではなく個人に対してなされる。

競技者がもし表 21 にある「a）ゲームの文脈にはずれた外傷を与える打撃による相手への意図的な攻撃」を加えた状況になった時、組織委員会が競技者に相手を傷つける意図という悪意があったと判断した場合、その者は競技を続けることはできない。反則者は競技から除外されると明記されている。また、2011 年の反則行為に加え、新たに「基礎の不足」に対して 1 点減点が加えられた。

1997 年の第 1 回から、カポエイラのゲームでは、意図的な外傷を伴う攻撃は理念と反しており、禁止されている。そのため、根本的には反則行為は変わらないが、より明確に行為が分類された上に、基礎の不足という習熟度合も対象とされるようになった。

表 21 反則行為と減点数

反則行為	減点
a) ゲームの文脈にはずれた外傷を与える打撃による相手への意図的な攻撃	2 点
b) 動きを停滞させたり相手を掴むことでゲームの継続を防止する	2 点
c) 低いテクニックによる実施	1 点
d) ゲームを行わない	1 点
e) 基礎の不足	1 点

（Sodré et al.,2013 の記載内容を基に筆者作成）

## （５）同点決着基準

競技規則上（Sodré et al.,2013）での同点の場合の決着基準は次の通りであった。

最初の同点決着の基準は、サオンベントグランジの合計得点である。さらに同点の場合は、ベンゲラのゲームの合計得点となる。それでも同点の場合は、競技者が選択したビリンバウのリズムを用いて、競技者が選択した既に発表されている歌で演奏によって競われる。

第一の基準として 2011 年ではイウナが採用されていたが、このように今回はサオンベントグランジが採用され、第二の基準も新たに設けられたのである。この点は特筆に値する。この変更から推察できることは、主催者側がアクロバットな技を競うイウナよりも、サオンベントグランジをカポエイラ競技の特徴を最も表しているゲームと捉えているということである。また次の基準とされている、ゆっくりのリズムで巧みな戦術による駆引きが可能なベンゲラも同様である。つまり技の難度よりもゲームでの戦略の展開で生成される創造性と継続性を重視するというアバダの志向するカポエイラ競技の固有性が看取できよう。

## ４．ゲーム評価の基準：言説に基づくカポエイラ競技における「良いゲーム」

### （１）倒し技のタイミング

2012 年 10 月来日時に、アバダのモルセゴ師範は「観客が盛り上がるゲームは、大抵はよくないゲームだ」と述べている。例えば、カポエイラで重要とされる「ゲームの調和」や「ゲームの流れ」を汲んでいないゲームや派手な倒し技、不適切なタイミングでテイクダウンを狙いにいくゲームなどである。

しかし一方では、2013 年 7 月来日時にアバダのペイシクル師範はサオンベントグランジのゲームの特徴は「攻撃（golpe）と倒し技（queda）」であり、積極的に攻撃と倒し技を仕掛けることが重要であると述べている。

つまり両者の言説が含意することは、カポエイラ競技のゲームでは、ゲームの流れや文脈に応じた倒し技が求められているということである。そして、先に見た評価要素にあるように、審査員はゲームにおける「連続性」や「創造性」を期待しており、それらを満たすゲームが良いゲームとされている。

### （２）ゲームの文脈

2013 年 7 月 13 日、名古屋にてペイシクル準師範によってゲームの展開について話し合いの指導が行われた。ゲームにおいて、相手との距離、全体の動き

における空間の使い方、高い動きと低い動きのバランス、互いの攻防の度合い、攻撃の流れなどが話題に取り上げられた。その中でも「ゲームのボリューム」という表現で、ゲーム中の多様な動きの展開や即興性が重要であることが指摘されていた。

### 第3節 競技化におけるカポエイラの文化的固有性の創造

#### 1. 2013年競技規則前文「競技者の心得」にみる文化的アイデンティティ

2013年競技規則の第4章、第6条においては次のような説明が記載されている。

この競技規則の準備に関してアバダ・カポエイラがもっとも配慮したことは、カポエイラの特徴を最大に維持するための競技の実現を可能にすることであった。

個々のカポエイリスタではなく、ゲームにポイントが与えられる競技システムと評価システムを組み立てた。

カポエイリスタは他のプレイヤーと試合をし、すべてのゲームのポイントが累積される。

実際に、カポエイリスタはそれぞれのゲームで個人のパフォーマンスだけを気にするべきではない。ゲームにおける最終的な良いスコアを達成するように、対戦相手のゲームの能力の適応と限界について、可能性と潜在性のすべてを追求しなければならない。

このように、「カポエイラの特徴を最大に維持するための競技の実現」を目指しており、競技規則を体系化するにあたって、カポエイラの特徴、つまり主催者や競技者たちにとってのカポエイラの固有性を第一義的に重んじていることが見て取れる。また、競技者の心得として、ゲームにおける良いスコアのためには、「個人のパフォーマンス」よりも、「対戦相手」の実力を引き出すように心がけることが求められているのである。

このような理念は、本来カポエイラにおいて暗黙裡に共通理解されていたことであった。つまり、カポエイラ独特の世界観において育まれていた身体文化としての中核理念といえる。このたび競技規則として明文化されたことによって、カポエイラのオリジナリティとして実践者によって改めて前面的に意識されることとなったといえる。

#### 2. カポエイラの競技化で志向される文化的固有性

冒頭で見た Jaqueira & Correio の先行研究において、カポエイラにおける競技大会の問題点が指摘されたが、具体的にどのような「形式」が生成されているのかは提示されていなかった。よって、本章ではアバダの競技大会の検証

結果を基に、まず多様化する「形式」の内実について明らかにする。次に、それによって示唆される、アバダにおける競技化の傾向を考察する。

### （１）既存の他スポーツ競技システムの導入

1997 年の第 1 回世界競技大会の時から、対戦システムには変更は加えられていない。一貫して 4 人一組で、第 1～第 5 ラウンドまで勝ち進む形式である。他のいずれの競技が参考にされたかは不明だが、これは既存の対戦型スポーツの競技システムと同様である。

また、体重階級制は、2012 年 8 月ブラジル国内競技大会から男性に限り採用され、2013 年の第 9 回世界競技大会も同様であった。この体重区分基準や参照された競技は不明だが、既存のスポーツの競技システムである。

このように、アバダのカポエイラ競技における競技化傾向の一つとして、対戦方法に関して既存のスポーツ競技システムが採用されていたことが明らかになった。

### （２）明文化されたカポエイラ独特の世界観

アバダは、カポエイラの特徴を最大に保障することを目的に、「カポエイラ芸術の文化的アイデンティティ」を競技者が意識すべきこととして強調している。その際に重視されたのは「カポエイラの理念に基づくカポエイラの競技化」であった。

こうしたなか、競技化においてカポエイラの理念が端的に表れたのは、採点方法と競技者の心得であった。具体的には、採点は競技者個人ではなく「二人のゲーム」に対してなされ、競技者は「個人のパフォーマンス」よりも「対戦相手」の実力を引き出すように心がけること求められると競技規則上で明記されたのである。

そして、これらは他でもないカポエイラ独特の世界観において育まれてきたカポエイラの身体文化としての中核理念であった。例えば、カポエイラのゲームにおいて勝敗を決めることが目的ではなく、「問いかけと返答」という考えを尊重したやり取りがゲームでは重視されている。それゆえに、二人のゲームのボリューム（動きの種類の多様性、創造的な展開、有効な空間使い等）が重視され、よいゲームを行うために「対戦相手」の得意な展開や動きを引き出す動き方などに配慮が求められている。このように、元々暗黙裡に共有され、個々人で実施されていたことは、カポエイラ独特の世界観に内包されていた。しかし、カポエイラの競技化において、この世界観が競技規則として明文化され、前面に意識されるようになったのである。

### (3) 創造される「カポエイラ芸術」の形式

前項で述べたように、主催者はカポエイラの理念に基づきカポエイラの固有性の探求を競技化において目指しており、その文化的アイデンティティを前面に意識している。したがって、彼らの競技大会におけるカポエイラを「カポエイラ芸術」と称していることから鑑みられるように、文化的アイデンティティ、つまり文化的固有性として、カポエイラの芸術性を意識していると考えられる。

これは、既に先行研究において示唆されていたように、カポエイラが競技化において新たな「形式」の創造がもたらされていたが、その一つとして、アバダの競技化では「カポエイラ芸術」が意識され、創造されたといえよう。その「カポエイラ芸術」における特徴は採点項目と減点項目から考察されよう。

1997年から一貫して反則とされていることは「相手への意図的な攻撃」である。これは元来カポエイラのゲームにおいて重要な特徴である。現代のカポエイラのゲームでは互いの攻撃の流れを受けて、次の動きへいかに展開させるかというプロセスが重視される。つまり、相手を打ち負かすことが第一義的目的ではないのである。特に2013年の減点項目では「ゲームの文脈」という文言が用いられ、以前よりもゲーム全体の流れが強調された。その上、2013年に「低いテクニックによる実施」と「基礎の不足」という個人技術に関する減点項目が追加された。これらの減点はプレイヤー個人に対してなされ、近年のアバダでは基本の動作が更に重視される傾向にある。つまり、一般的には基本動作の完成度を高めるということは、ゲームにおける技術の効率化であるため、「スポーツ」的な性格が強化されているといえる。しかし、その一方で基本動作の重視は「カポエイラ芸術」の特徴を高めることにもつながると考えられる。なぜなら、基本動作の細かい姿勢は流派によって異なり、アバダにおいては動き方がアバダのアイデンティティを表すと考えられているためである<sup>58</sup>。

これは、採点項目からも同様のことが言える。1997年当初の採点項目における「戦略性」「独自性」「リズム」が2013年の「ゲーム特性」となった。そして1997年の「技術と創造性」は2013年では「動きの基礎」と「創造性」に分割された。アバダにおけるゲームでは、「戦略性」とはマリーシアやマランドラジェン等のカポエイラ独特の理念によるもので、ゲームにおける抜け目のない展開や戦略的な誘導を可能とする。しかし、各ゲーム種目において、その「戦略性」の程度や表れ方は異なるため、「ゲームの特徴」として内包されたと考えら

<sup>58</sup> 2013年7月13日に名古屋で行われたアバダ・カポエイラの講習会にて、来日中だったペイシクル準師範は、動き方の指導において基本のステップ「ジンガ」の重要性に言及していた。それによると、ジンガは各流派によって異なり、ジンガの動きによって流派が識別できるほど重要なものであるという。そして、それはジンガが流派のアイデンティティとなるものであるため、基本の動き方（手の位置や腰の位置、足運びなど）を習得しなければならないと述べていた。



れる。この「ゲームの特徴」も基本動作と同様に、アバダ独自の相手との間合いや駆け引きがあるため、流派としてのアイデンティティが重視されている。また、「動きの基礎」という項目が 2013 年に増やされているのは、減点行為における「動きの基礎」の重視傾向も踏まえ「流派のアイデンティティ」への意識の高まりとみなすことができよう。

したがって、先行研究で Jaqueira が指摘したように、競技における判断基準にカポエイラの固有性を重視していなかったこれまでの競技化と比すると、アバダのそれはカポエイラの固有性よりもむしろ、流派のアイデンティティを競技における判断基準に採用しているといえる。

#### （４）支配権力に干渉されない文化的固有性

2013 年の競技規則の前文で「本競技規則に記載されている章や記事は一切行政との関係ない」と断り書きがなされていたように、一流派として他の権力が関与しない、「カポエイラ芸術」の発展のための競技大会であることを宣言している。「カポエイラ芸術」の高まりのためには、技術が不可欠なため、スポーツにおける効率化と重なる部分があるが、カミーザ師範の目指すものはスポーツではないことは、競技規則の変遷を見てきたとおり明らかである。カポエイラがナショナルレベルでブラジル歴史社会の象徴とされているように、担い手レベルから発信する何かを芸術性に求めている。これは、今後も探求され続け、形成されていくと考えられる。

### 第 4 節 カポエイラの競技化と文化的固有性

これまで見てきた中でも言及されなかったように、カポエイラ競技の規則や競技方法において直接的にアフロブラジル文化としてのアフリカが意識されることが殆どないことは自明である。カポエイラは、1920 年代に既に競技化へと流れが生じ、1960 年代には観光化の文脈において変容が生じていたことは Rego の指摘するところであった。

しかしながら、本章の事例における競技化は、結果的にカポエイラの基底をなすカポエイラ独特の世界観（これが唯一の「アフロブラジル」との繋がりとなる）を明文化することによって、その世界観が「カポエイラ芸術」の固有性として、またはアイデンティティとして保存されている。更には政治的権力が関与しないことを明示し、カポエイラ芸術の固有性を主張しているのである。つまり、競技化という枠組みにおいて明文化されるカポエイラ独特の世界観や形式的諸要素（身体技術や理念に基づく競技の目的など）を通じて、支配権力の及ばない領域で「アフロブラジル」の世界観を喚起する文化的固有性を創造



していたといえよう。そのような出自を含意する諸形式は「芸術」と解され、「カポエイラ芸術」というジャンルとして捉えられた。そして、「カポエイラ芸術」の競技化を通じて、既存のスポーツ競技システムを加えながら、芸術としての特性を前面に出す、ハイブリッドなジャンルが構築されているのである。

「競技化」というスポーツ化の分流としての取組みは、カポエイラそのものの文化的固有性の創造として、「カポエイラ芸術」という形式の開拓に至っている。そして、カポエイラ芸術としての特性を担保するのは団体固有の身体技法に表象される流派のアイデンティティであった。

ゆえに、このような実践者レベルにおける文化的固有性の創造は、換言すれば彼らのアイデンティティ形成の一端として解釈できよう。その実践が繰り返される過程でカポエイラは変容してきたが、同時に実践者たちのアイデンティティ形成の一助となっているのである。

## 第 4 章

### アバダ・カポエイラにおける 「アマゾナス」のゲーム創造

#### 第4章 アバダ・カポエイラにおける「アマゾナス」のゲーム創造

アバダ・カポエイラにおけるカポエイラのゲーム種目は比較的駆引きの展開が重視される「アンゴラ」「ベンゲラ」と、見せ技が中心となるゲーム「イウナ」、速い蹴りを多用する「サオンベントグランジ」というゲームがある。

それらに加えて、2001年頃に「アマゾナス」のゲームが新たに創られた。そのゲームは、ビンバ師範による弦楽器ビリンバウの既存のリズム「アマゾナス」を基にしたものだった。このような新たなゲームの創造はアバダ・カポエイラ独自の取り組みであり、何らかの意図があることは想像に難くない。アバダ・カポエイラにおける新たなゲームの創造はどのような意味があるのだろうか。

よって、本章では「アマゾナス」のゲーム創造を、その契機や本拠地となった施設の活動理念の文脈に位置づけ、新しいゲーム創造の意味を論じる。

調査方法は、フィールドワークと文献研究である。参考資料はアバダ・カポエイラの刊行雑誌“Revista Abadá”2冊 (Abadá-Capoeira, 2005, 2010) と会員向けの会報“Jornal Abadá-Capoeira”5紙 (Sodré et al., 1997, 2003, 2009, 2011, 2013)、並びに公式ウェブサイト (Abadá-Capoeira, 2013c) である。

調査地は、ブラジルのリオデジャネイロ州イタボライー市 (Município de Itaboraí) (図3)、アメリカのカリフォルニア州サンフランシスコ郡サンフランシスコ市 (City and County of San Francisco)、日本国内は東京都武蔵野市、愛知県名小牧市である<sup>59</sup>。調査期間はブラジルが2009年8月10日～8月31日、2010年8月5日～8月26日、2011年8月5日～8月25日であった。アメリカにおける調査期間は2011年11月1日～7日である。日本国内は、2013年7月6日に東京で実施されたアバダ・カポエイラのブラジル人インストラクターによる講習会 (東京都武蔵野市) と2013年7月14日開催のアバダ・カポエイラ日本競技大会 (愛知県小牧市) が対象とされる。主に半構造化インタビュー調査、手記記録、動画・画像記録を行った。

これまでに、カポエイラにおける新たなゲームを創造し、組織的に体系化し、普及している流派はアバダ・カポエイラの他に例をみない。学術的研究対象として「アマゾナス」のゲーム創造についてインタビューを受けたことは初めて

<sup>59</sup> 調査地について、ブラジルのリオデジャネイロ州イタボライー市のメストレ・ビンバ・カポエイラ教育センター (CEMB) があり、そこでの講習会のために参加した。アメリカのサンフランシスコ市は、リオデジャネイロ市出身のマルシア師範代 (本名 Marcia Treidler, 2011 年当時 43 歳) がカポエイラ教室を開講している。彼女はカミーザ師範の弟子にあたり、リオデジャネイロで 8 年間カミーザ師範の基で修行をした後、1990 年からサンフランシスコでカポエイラの普及活動に尽力しており、インフォーマントとして重要であるため、サンフランシスコを調査地として選択した。

であると、この度のインタビューでカミーザ師範自身が述べていた。また、ブラジル国内で刊行された書籍・雑誌などで「アマゾナス」のゲーム創造について紹介されたこともないという。

したがって、ブラジル国内においてもアバダ・カポエイラの「アマゾナス」というゲーム形式創造について論じた研究は本章が初の論考となる。

## 第1節 メストレ・ビンバ・カポエイラ教育センター（CEMB）の理念

アバダ・カポエイラのカミーザ師範は、2003年にリオデジャネイロ州リオデジャネイロの東部に位置するイタボライー市のサンバエチバ（Sambaetiba）地域にある施設「メストレ・ビンバ・カポエイラ教育センター」（Centro Educacional Mestre Bimba、以下「CEMB」と省略）<sup>60</sup>で、その地域の生徒たちと共に「アマゾナス」を起案し、体系化した。

アバダ・カポエイラによって運営されている CEMB の公式ウェブサイトでは、CEMB の施設の成り立ちや活動理念等が紹介されている（図4参照）。本章における CEMB に関する記述は、特に断りのない場合は CEMB の公式ウェブサイト（Abadá-Capoeira, 2013c）が参照される。加えて Facebook の CEMB 専用のページを参照した場合は、適宜参照先が示される。

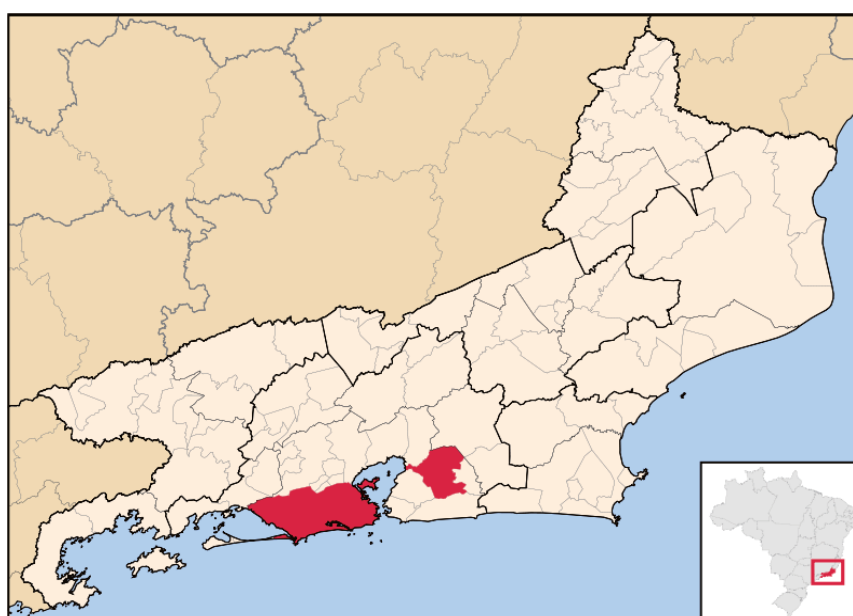


図3 リデジャネイロ市（左の半島部分）とイタボライー市（右の内陸部分）<sup>61</sup>

<sup>60</sup> 住所：116,km 14,5 lote 78 fazenda ecologica abada 28.680-000 Cachoeiras de Macacu, Itaboraí, Rio de Janeiro.

<sup>61</sup> <http://pt.wikipedia.org/wiki/Itabora%C3%AD> より引用（2013年10月10日参照）



図 4 メストレ・ビンバ・カポエイラ教育センターの公式ウェブサイト<sup>62</sup>

## 1. CEMB の活動理念



写真 3 現在の CEMB の全景 (Abadá-Capoeira, 2013c より引用)

<sup>62</sup> Abadá-Capoeira, <http://www.abadacapoeira.com.br/cemb/>, 2013 年 10 月 10 日 参照





写真 4 現在の CEMB のカポエイラ練習場(筆者提供, 松尾哲史撮影)



写真 5 現在の CEMB のカポエイラ練習場内(茅葺き屋根の半屋外施設)  
(Abadá-Capoeira, 2013c より引用)





写真 6 旧 CEMB のカポエイラ練習場とピリンバウを弾くカミーザ師範  
(Abadá-Capoeira, 2013a より引用)

CEMB は、自然愛好者であったビンバ師範への敬意を表して、カミーザ師範によって 2000 年に建設された理想的な空間であるという。2000 年当初はイタボライー市サンバエチバ地域に位置していたが、CEMB は石油会社ペトロブラスによる石油ポールの設置のため、2010 年に更に北東のカショエイラ・ド・マカク地域へ移転を余儀なくされた。写真 6 は移転前の CEMB の様子である。

CEMB では長閑な敷地に多種多様な動物が放牧されており、自然豊かな施設である（写真 3）。敷地内には 60 人分の宿泊施設とテント 100 張り分のキャンプスペースがあり、宿泊が可能である。

CEMB における活動とカポエイラについて、公式ウェブサイトには次のように明記されている。

CEMB では、不定期の講習会やトレーニング、会議、座談会、作業、生態系の散策（周辺の山を散策し、生態系を観察する）、植樹、乗馬、フットボールの試合、大衆的な余興（サンバやカポエイラの音楽、フォークダンスを楽しむこと等）、地元の慣習的パーティ、動物と触れ合う機会の提供、伝統的な薪ストーブをつかった料理の食事会、環境保全の学習が行われる。全ての活動は、個人の実践におけるカポエイラの動き向上につながる。こうした理念に基づき、自然からの恩恵を活用しつつ活動を発展させるために、ブラジルチガヤ、ユーカリ、岩で造られた（茅葺き屋根の）施設が建設された。

〔（ ）内の補足、訳出は筆者による〕

諸活動の経験がカポエイラの動きの向上につながるという理念の下、CEMBを拠点とした様々なイベントが開催されている。

そして、CEMBにおける活動は「カポエイラ環境と市民権プロジェクト (Projeto capoeira ecológica e cidadania)」という社会活動も行われており、次のように説明されている。

アバダ・カポエイラの特徴的な理念の一つとして、自然との結びつきがある。カポエイラの文化的価値は、その起源にもあるように、我々は環境や自由、社会統合の問題に対する役割を担っていることにある。

教育分野において教育学的手段としてカポエイラを利用することは、我々地球上の人類の存続のために社会的・生態学的に有益な環境の価値について自覚した人間を養成し、個々人の視野を広げることへとつながる。

CEMBにおいては、若者が不足しているリオデジャネイロ州サンバエチバ地域で、カポエイラ環境と市民権のプロジェクトを実現させている。(具体的には、この地域の)若者たちはカポエイラ芸術を学び、大西洋岸の森林の植林活動を行い、ゴミのリサイクルと、この地域の若者たちの日常的な権利の組織化などの活動である。彼らは、自身の人生とカポエイラ芸術が十分に発展するように、アバダ・カポエイラのカミーザ師範、先生、上級生によって行われるカポエイラ教室で(カポエイラの)ユニフォームや指導を無償で受けている。

普通に学校へ通学し、自然へ敬意を払うことが、カポエイラ環境プロジェクトに参加するための基本条件である。

(このプロジェクトは)立ち上げて5年がたち(2006年当時)、プロジェクトで能力が身についた卒業生11人を既に送り出している。彼らは地域における活動を発展させ、カポエイラ競技大会やエキシビションの参加を果たしている。

[( )内の補足、訳出は筆者による]

このように、アバダ・カポエイラは、「自然との結びつき」を理念として掲げており、カポエイラを通じて自然と共生できるような人間の育成を目指しているといえる。つまりカポエイラという文化実践を通して、人類の更なる発展に貢献しうる活動を志向し、具現化を試みている。CEMBの理念に基づいたシンボルマークもあり(図5)、カポエイリスタが逆立ちをしている足で木を支えている。カポエイリスタの身体は木の幹にも見立てられており、まさに自然と人間が一体になるという理念が投影されている。

地域社会への貢献と自然保護を活動の目的としており、「カポエイラを教育学的手段として利用する」ことで人間的成長が目指されている。そして、そのような活動の場としてCEMBの施設が位置づけられている。

カミーザ師範は「都会（リオデジャネイロ市メトロポリタン地区<sup>63</sup>）はカポエイラがやりづらくなった。いつも忙しく、警察もたくさんいて騒々しいし、規則も多くて自由な雰囲気ではカポエイラができない」（2011年8月ブラジルの講習会にて）とかつて話していた。これは単に時間的なゆとりの無さを悲観しているだけでなく、カポエイラをする上で視覚化されない様々な制約に対するストレスを意味していたと会話の文脈や表情から判断された。今となっては発言の真意は定かではないが、CEBMの設立目的や活動目標を考慮すれば、カポエイラを行う上での何らかのゆとりをCEMBに求めていたと考えられ、カミーザ師範にとってCEMBは特別な思い出のある場所と判断される<sup>64</sup>。

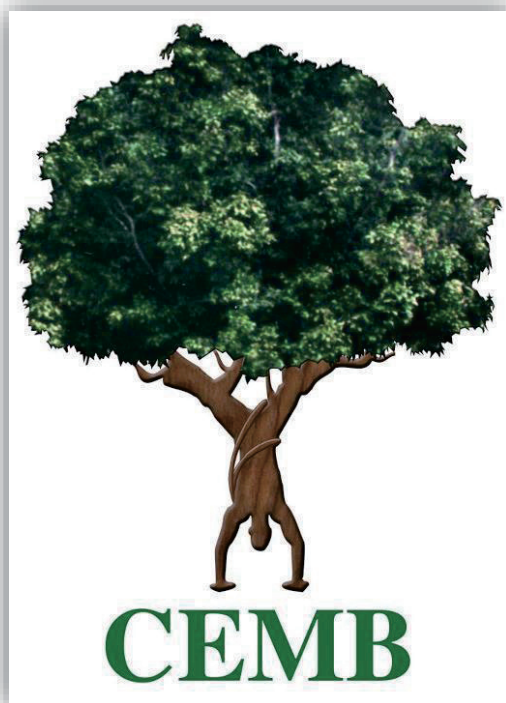


図 5 CEMB の理念に基づいたシンボルマーク  
(Abadá-Capoeira, 2013b より引用)

## 2. CEMB の理念の公的評価

2011年5月5日、カミーザ師範（José Tadeu Carneiro Cardoso）は、ミ

<sup>63</sup> メトロポリタン地区とは、観光地で有名なコパカバーナ海岸がある地区であり高級ホテルや観光客向けの宿泊施設が多く立ち並ぶ。ファベラと呼ばれるスラム街も隣接している。メトロポリタン地区の中心部は日常的に交通渋滞が多いが、近年インフラの整備が進んでいる。

<sup>64</sup> 2013年10月現在も、週二回はCEMBにおいてカミーザ師範はカポエイラ指導をしている。

ナスジェライス州にあるウベルランジア連邦大学において名誉博士号

(Doutor Honoris Causa) <sup>65</sup>を授与された。ウベルランジア連邦大学の学則<sup>66</sup>の第2章の名誉称号の項において「第224条 大学委員会は、自己推薦あるいは学内学術委員会によって次の称号を授与することができる。(中略) 第3項 名誉博士号：これは文化、科学、哲学、文学の際立った功績、あるいは国民に認知された善行によって、優れた個人へ与えられる」(筆者訳出)と明記されている。カミーザ師範への博士号授与に関する同大学における見解は次のとおりである。

カポエイラは2008年にブラジル歴史芸術遺産研究所(IPHAN)のブラジル無形文化遺産として登録された。ウベルランジア連邦大学化学研究所の教授であり、同大学のアフロブラジル研究センターのコーディネーターである Guimes Rodrigues Filho が説明したように、カミーザ師範は人間開発と環境保全を目指したブラジル文化活用とカポエイラ教育の提案に関する様々なアイデアを統合した。この学位証書は、この遺産を保存する役割の学術的な証明である。「カポエイラは基本的に口述伝承であるように、師範たちは(彼らの知恵や理念を伝えるための)知恵の宝庫<sup>67</sup>といえるのである」。

(UFU, 2013年)[訳出、( )内の補足は筆者による]

これに加えてカミーザ師範がアバダ・カポエイラの創設者であり、これまでもヘジオナウ流カポエイラの世界的普及において重要な貢献をしていたことも踏まえてのことだったと同大学ウェブサイトには明記されている(UFU, 2013)。2003年にも同大学はアンゴラ流カポエイラの師範であるジョアン・ペケーノ師範(João Pereira dos Santos)に名誉博士号の称号を授与している。

2008年のIPHANによるブラジル国内無形文化遺産としての登録には、カポエイラのホーダそのものだけでなく、カポエイラの師範や師範の理念・知識も対象となっている(IPHAN, 2008)。そのような観点から、カミーザ師範の理念、すなわちCEMBで具現化している活動の源流が評価されたといえよう。また、引用文の最後の「師範たちは知恵の宝庫といえる」という言葉は、

<sup>65</sup> ブラジルにおける名誉博士号(Doutor Honoris Causa)は、大学から著名人に授与される称号である。必ずしも大学卒業証書の所有は必要なく、特定の領域(芸術、科学、哲学、文学、平和促進、人道主義活動)において優れた人物に対して、家族や個人、機関を超えて成されるサービスや善行、良い評判を元に与えられる。歴史的に名誉博士号は従来の方法で博士号を取得した人と同じ扱いをうけ同じ権限を取得する。

<sup>66</sup> [http://www0.ufu.br/documentos/legislacao/Regimento\\_Geral\\_da\\_UFU.pdf](http://www0.ufu.br/documentos/legislacao/Regimento_Geral_da_UFU.pdf)

<sup>67</sup> *libraria* という単語が用いられており、直訳では「図書館」となるが、師範らの知恵や経験自体も重視されているため「知恵の宝庫」と意識した。



無形文化遺産としての価値を改めて示している。

## 第2節 「アマゾナス」のゲーム創造経緯

本節では、半構造化インタビュー並びに対象団体が刊行した雑誌や新聞資料における「アマゾナス」のゲームに関する言説に着目し、「アマゾナス」の創造経緯を明らかにする。

### 1. 弦楽器ビリンバウのリズム「アマゾナス」

ビリンバウの伝承は、これまで口述伝承が主流である。しかしながら、研究対象としてビリンバウのリズムが楽譜に起こされて記録され（Mouraes, 2009; Shaffer, 1977）、段階的な練習方法を紹介するテキストも出版されている（Mouraes, 2009）。本節では 1977 年に当時のブラジル文化教育省から出された『腹部を使ったビリンバウ<sup>68</sup>とそのリズム』（Sheffer, 1977）において紹介されているビンバ師範の「アマゾナス」のリズムを引用する。腹部を使ったビリンバウとは、写真 6 の様子のとおりである。

弦楽器ビリンバウによる「アマゾナス」のリズムは、ビンバ師範が創った「7 つのリズム」のうちの一つである。アマゾナスはベンゲラと同程度のリズムで、次の図 6 の楽譜における四分音符の速さは 63 拍／分 である。

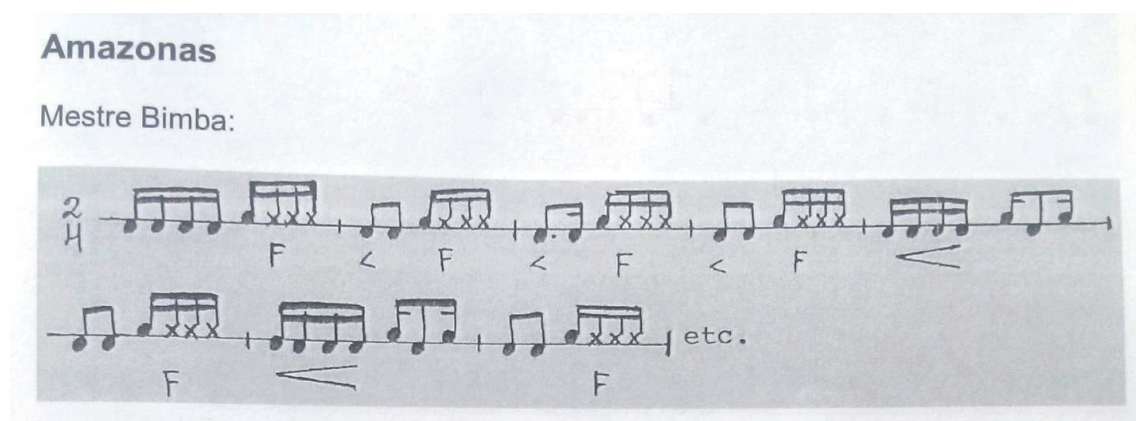


図 6 ビンバ師範の「アマゾナス」のリズム

(Shaffer, 1977, p.48-49 から引用)

<sup>68</sup> Shaffer によると、ビリンバウは口で弾く場合（Berimbau-de-boca）と、台上に置いて弾く場合（Berimbau-de-bacia）もある。「腹部を使った」とは、ひょうたんの口を腹部に押し付けることで、ひょうたんを共鳴させて音を出す方法である。これは現在のカポエイラの主流な演奏方法である。

図中の×印の音符は、弦をバチで叩くと同時に石を軽くあてることによって出す破裂音である。「アマゾナス」のリズムでは 3 回連続で破裂音を出すことで、独特のリズムが生み出される。他のリズムとの比較は本研究では行われないうが、「アマゾナス」のリズムの特徴としては、一連の流れにおける破裂音の連続（図中の「F」の箇所）が独特の味わいを与えている。連続した破裂音が定期的に奏でられることで、連続部の前後のゆとりのある演奏部とのコントラストが生まれる。そして、そのようなパターンの繰り返しが、聴いている人々に心地よさを与える。また、スタッカートのかいた音色が、時々アレンジされて不規則に出現することで、人々のプリミティブな感性に働きかけるといえよう。

## 2. カミーザ師範の言説によるゲームの創造経緯

次の表 21 にあるように、ビンバ師範のビリンバウの 7 つのリズムにおいて、4 つのリズムに対応するゲームは存在するが、アマゾナスには対応するゲームは元来存在していなかった（表 22 参照）。

表 22 ビンバ師範のビリンバウの「7 つのリズム」と対応ゲームの有無

リズムの名称	ポルトガル語表記	対応するゲームの有無
サオンベントグランヂ	São Bento Grande	○
ベンゲラ	Benguela	○
カバラリア	Cavalaria	×
サンタマリア	Santa Maria	○
イウナ	luna	○
イダリーナ	Idalina	×
アマゾナス	Amazonas	×

（Shaffer, 1977, p35 を元に筆者作成）

カミーザ師範へのインタビュー（2013 年 10 月電話による）によれば、「アマゾナス」のリズムは広大な自然や動物の姿を想起させるため、カミーザ師範はそのリズムを非常に気に入っていた。当時は「アマゾナス」というリズムだけで、それに対応するゲームは存在していなかったため、「アマゾナス」のリズムを表現するゲームはどのようなものか想像をめぐらせていた。

そこで、カミーザ師範はカポエイラの起源に着目した。それは N'golo というシマウマをモチーフにした頭突きのダンスが元といわれており、動物を模した儀礼ダンスである。こうして動物をモチーフにした動きのゲームを発想し、動きを創り出す事に着手した。カミーザ師範の着想は、カポエイラの軌軸となる



動きの起源に目を向けることで、カポエイラの本質的な特性を浮き彫りにしようとしたと考えられよう。

創作方法は、生徒と共に自由な発想のもとで CEMB にいる動物を模しながら動きが創られた。カポエイリストらが動物をイメージしながら動き、互いに動きを確認する。更にカミーザ師範からのトレーニング効果や動きやすさを考慮した上でのアドバイスに基づき、動きが改善され、動物の動きの「型」として明確にしていく。その上で、ゲームを実際に行い、どのような動きの展開が可能であるか実験的にゲームを重ね、「アマゾナス」のゲーム形式を創り上げる。このような作業は、「表現」することを軸にして新たな動きを創り出す活動といえる。

2003 年には既に、世界各国の生徒が世界競技大会のため 8 月に CEMB で講習会が開催された時に、「アマゾナス」のゲームの動きが教えられており<sup>69</sup>、ゲームとして体系化されていた。カミーザ師範自身は、1998 年頃から「アマゾナス」のゲームの動きを創り始め、2001 年頃にはゲームとして体系化されたと述べている。

現代のカポエイラ実践者たちにとって先人の創り出したリズム「アマゾナス」を引き継ぎながら、新たな要素を加え発展させていく営みこそが、「アマゾナス」のゲームの創造であるといえる。

### 第 3 節 「アマゾナス」のゲーム形式と動きの詳細

#### 1. ゲーム形式と特徴

動物の動きは、サル、カエル、キリン、クモ、ゴリラ、かたつむり、犬、クマ、サソリ、ヘビ、バッタ、トカゲ、イグアナ等である（表 22 参照）。多種多様な動物や生物が対象とされている。アマゾナスはあくまでもゲームであるため、二人で行う形式である。互いに様々な動物を次々に真似ながら、蹴りや頭突きという攻撃をしかけ、相手はよけるという攻防を行う。したがって、動物の真似というのは、静止のポーズではなく、移動を伴う一連の動きとなる。例えば、表のサソリの動きは、しっぽに見立てた足を更に地面に近づけることで、相手への攻撃の蹴りに転じる。あるいは、表中左のサルは、バック転の動きそのものであるが、相手の蹴りが来そうな時に、即座に後ろにバック転を行うことで、よけの意味を担うことになる。また、キリンの動きは主に相手との距離

---


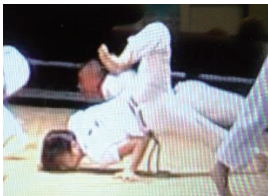

<sup>69</sup> 筆者は 2003 年 8 月 5 日～9 月 1 日まで、リオデジャネイロ市において同団体の活動に参加しており、8 月 23 日～8 月 25 日に CEMB において開催された講習会に参加した。

やタイミングを調整し、移動として行われるが、どのような体勢にも移すことが可能なため、応用が利く動きといえる。このように、様々な動物の真似をしながらも、常に相手との距離やタイミングを意識し、蹴りやよけ、そして相手との駆け引きを行うゲームが「アマゾナス」のゲームの特徴である。

カミーザ師範とアマゾナスを考案したインストラクターサニャッソによれば、ブラジルに生息していない動物や昆虫でも、各国独自の生き物を模した動きを各国の生徒が考案することができ、カミーザ師範に見せて許可ができれば、アマゾナスのゲームで実施できる（2013年7月来日時インタビュー）。

そのインストラクターの指導中の言葉かけによると、ゲーム時のポイントは「動物をまねる」のではなく、「動物になる」ことであるという（2013年7月6日来日時参与観察）。ただし、あくまでもカポエイラのゲームであるため、攻防で重視されている「問いかけと返答」のやりとりは常に行われなければならない。そして、他の種類のゲームにおける蹴りやよけを行っても構わないという緩やかなルールである（表23参照）。

表 23 「アマゾナス」のゲームにおける動物の動きの例

動物の動きの例	 <p>サル</p>	 <p>サソリ</p>	 <p>キリン</p>
説明	バック転を行う。	片足をさそりの尻尾に見立てている。	両足の膝を伸ばしながら前進する。キリンの足を表現している

（2013年8月愛知県小牧市にて、写真筆者提供、表筆者作成）

## 2. 「再現」から「表出」表現へ

先述した「動物をまねるのではなく、動物になる」というインストラクターの言葉にあるように、カポエイラの「アマゾナス」におけるゲームでは、明らかに他のゲームとは異なる要素が必要とされている。それは、動物を「表現」ということである。ゲームを行う上で相手との関係（距離やタイミング、動きの駆け引き）を意識することは同じであるが、動物を真似る、あるいは動物になるという新たな要素が含まれる。

アバダ・カポエイラで行われているゲームの一つに、「アンゴラ」というゲー

ムがある<sup>70</sup>。「狡猾で戦略的なゲームであり、時として最も危険である。遊びのような動きでカモフラージュされる闘いである。(ゲームは)遅いリズムで行われ、ラダイーニャという歌い手の独唱によって場が統率される。カポエイリスタの多様な身体表現が必要とされ、(ゲームでは)相手の前で時には大きく、時には小さく振舞う。その攻撃(の基本姿勢)は完全に崩れており、移動しながら行われる」(Abadá, 2010, p.13-14)という特徴を有するゲームである。特に「アンゴラ」のゲームでは、カモフラージュするために喜劇役者のように演技をする必要があり、ゲーム中に演技をしながら観客の笑いを誘うというシーンは多くの流派において馴染み深い光景である。

したがって、既に演じるという「表現」はカポエイラのゲームにおいて重要なテクニックであるとされているといえる。

しかし、アマゾナスのゲームは、具体的な動物を模倣する。ここで、カッシーラーの「表現」概念をみてみると、「表現」とは狭義の意味で「表出(Ausdruck)」と「再現(Darstellung)」を含意している(カッシーラー、1991)。「表出」とは無意図的な感情の発露を意味する。その一方で「再現」は、形式をなぞって再び現すということである。

これに依拠すると、「アマゾナス」は動物を「再現」するゲームといえる。しかし、先述したインストラクターの言葉である「動物を真似るのではなく、動物になる」という意味は、「再現」だけでなく「表出」すること含意していると考えられよう。つまり、動物としての「自然さ」を表現するという意味で、無意図的な動物の感情が発露されるように動くということである。換言すれば、「表出」することによって、「アマゾナス」のゲームにおいて動物性を身体という境界を越えて発するということである。

#### 第4節 新たな表現形式の創造と文化的固有性

アバダ・カポエイラにおける新たなゲーム形式「アマゾナス」の創造について、その理念と経緯、創作過程、動きの詳細を検討してきた。創造されたゲーム形式は、動物の模倣を通して、動物らしさの「表出」表現を伴う新たな形式として捉えられ、カポエイラ独自の表現領域の創造と模索が確認された。

これについて、第3章までのカポエイラの変容を今一度振り返ると、教育に取り入れられ、競技化というスポーツ的性格を帯びつつ志向されたのは、新た

---

<sup>70</sup> アバダ・カポエイラの「アンゴラ」というゲームは、カポエイラ三大スタイルの「アンゴラ流カポエイラ」に源流を持つものである。「アンゴラ流カポエイラ」の多くの団体で行われるゲームと根本的なゲームの特徴は同じである。

な表現領域の模索であった。

そして、僅か 100 年ほど前までは、奴隷文化として周縁へ追いやられ、社会的排除の対象であったカポエイラは、現在改めてアフロブラジル文化の象徴とされることで、国民に共有されるものとして肯定的な意味合いを帯びることとなった。

「奴隷の文化」に対して自国の歴史を知るという意味において、解釈は好転したとしても、揺るがない事実として「奴隷の文化」という使い古されたレッテルはいずれにしても強化されてしまったことには変わらない。

これらを踏まえて、「アマゾナス」という「表出」表現を伴う新たな形式としてのゲーム創造は、これまでの奴隷文化＝カポエイラの均衡を崩すべく投じられた一石であったのではないだろうか。

つまり、奴隷制度という抑圧の状況を足場にして創造されたカポエイラは、「奴隷の文化」としてあまりにもその概念が国民へ普及し、定着してしまった。したがって、

従来どおりのゲーム形式から一步踏み出すことで、新たな局面を見出そうとしているといえよう。その具現化されたものが、新たな表現的要素が付加された「アマゾナス」のゲームであった。

新たな表現形式の創造で、カポエイラ独自の表現領域、表現方法を確立しようとしているといえ、まさに奴隷文化としての抑圧から、カポエイラ独自の表現領域の模索が始まったといえる。

## 第 5 章

### 劇場のショーにおける カポエイラのエンタテインメント化

## 第5章 劇場のショーにおけるカポエイラのエンタテインメント化

本章では、ブラジルにおける劇場でショーとして行われているカポエイラが対象とされる。エンタテインメントという用語の概念は敢えて規定せず、むしろどのような変化が生じているのかその内実を描き出すことによって、カポエイラのエンタテインメント化の特徴を導き出す。

具体的には、劇場の舞台においてショーとしてのカポエイラを行うために、演出によってどのような構成や動きが行われているのかに着目する。また、二人のプレイヤーのゲーム中の空間利用にも目を向ける。そして、サルバドルのショーとの比較によって、リオデジャネイロにおけるショーとしてのエンタテインメント化の特徴を明らかにする。

サルバドルとリオデジャネイロは、ともにカポエイラが普及している地域である。特にバイア州サルバドル市はアフリカ系住民の多い地域であり、アフロブラジル文化発祥の地とされる。そのため、先述したようにアフリカ系住民のエスニックグループのアイデンティティが他の地域と異なる意味合いを帯びている。ブラジル内においても、サルバドルはアフロブラジル文化を資源とした観光地であり、外国人観光客だけでなく、多くのブラジル人観光客も集める。一方、リオデジャネイロは周知のごとくブラジルの随一の観光地である。外国人観光客が多く、サンバカーニバルやサッカーの聖地として人気が高い。それゆえに、劇場ショーにおいても、観光客向けに演出されると考えられる。

本章では、このような観光客の属性が異なる二つの都市のショーにおけるカポエイラが、観光化の文脈で何らかの影響を受けていると捉える。二つの都市のショーがどのような観光目的に立脚して象徴とされているのかに迫ることも本章の目的とする。

### 第1節 調査概要と分析方法

フィールドワークは、サルバドルでは2008年3月14日に実施され、リオデジャネイロでは2013年3月2日に行われた。ショーを行う団体は、それぞれの劇場における契約ダンサーである<sup>71</sup>。

ショーの内容は動画・画像記録と手記記録を行った。また、パンフレット資

---

<sup>71</sup> 第2章から第4章までの調査はアバダ・カポエイラを対象としていたが、本章における調査対象はアバダ・カポエイラのプレイヤーではない。



料、バイアのダンスカンパニー「バイア・バレエ・フォークロア BALÉ FOLCLÓRICO DA BAHIA」(以下、略称「BFB」とする)、並びにリオデジャネイロの劇場プラタフォルマ (Plataforma) のウェブサイト参照した (Plataforma, 2013)。

本章で分析対象となる上演内容は、二つである。一つ目は、サルバドルの約1時間の上演内容のうちの演目「カポエイラ」(4分間)である。二つ目はリオデジャネイロでの上演内容の演目「カポエイラ」(10分20秒間)である。

カポエイラは、ゲームにおいて相手の動きに沿うように動く一方で、対照的に動くことも良いゲームに必要な要素とされる。一人が蹴り足を高く上げていれば、もう一人は対照的に低くよけながら動くという具合である。それゆえにカポエイラのゲームは「空間のネゴシエーション」と例えられることもあり、ゲームにおける空間の使い方が重視される(写真7参照)。

また、楽器ピリンバウによる演奏速度の違いによって、ゲームの種類が異なり、膝関節を90度以上屈曲させて地面に近い位置で動く場合と、膝関節は90度以上伸展させて腰を高い位置に保ったまま動く場合がある。本章において、前者を「低」空間の利用、後者を「高」空間の利用とする。そして、ゲーム内容を明記した表を作成し、ゲーム中の空間利用を視覚化する。「低」空間の場合には表中のセルを網掛け表示し、これにより本章で対象としたショーとしての空間利用に基づくカポエイラゲームの特徴が導き出される。



写真7 左のプレイヤーのわき腹に、頭突きの攻撃をしているところ

(2012年東京にて筆者撮影)

更に、本章において考察するにあたり、基準となる一般的なカポエイラのゲームについて明らかにしておかねばならない。これまで各章で述べられてきたように、現代的カポエイラの一流派であるアバダ・カポエイラにおいて、一般的なホーダという集会形式で行われるカポエイラにおける明確な「良いジョゴ」の観念が共有されている。それは、(1)攻防の展開の多様性（第3章第2節-4参照）、(2)ゲームにおける動きの呼応性（第2章第3節-2項参照）、(3)相手の動きを引き出す姿勢（第3章第2節-1参照）に集約される。そのような駆け引きが可能なゲームが本論文でいうところの「一般的なカポエイラにおけるゲーム」（以下「一般的なゲーム」と略す）である。これに基づくゲーム内容の比較によって、ショーとしてのカポエイラの特徴が導かれる。

## 第2節 サルバドルの劇場におけるショー

### 1. バイア州都サルバドル市概要

バイア州は26州1連邦区の一つでありブラジル北東部に位置する。2009年のIBGE調査によれば人口は約1469万7000人であり、白人23.0%、黒人16.8%、混血者59.8%、黄色人・先住民0.3%である。特に州都サルバドルは、人口378万1000人で、白人17.7%、黒人29.4%、混血者52.5%、黄色人・先住民0.4%となり、非白人率が82.9%である。これはブラジルで最も高い割合である。ちなみにリオデジャネイロは、人口約1580万1000人で、白人55.8%、黒人11.3%、混血者32.6%、黄色人・先住民0.4%であり、非白人率は44.2%となりサルバドルのおよそ半数程度である。その他の概要は第1章第2節を参照されたい。

### 2. ダンスカンパニー「バレエ・フォークロリコ・ダ・バイア (Balé Folclórico da Bahia)」概要

バレエ・フォークロリコ・ダ・バイア (Balé Folclórico da Bahia、略称「BFB」) は1988年結成以来、国内外ツアーが多く行われ、1990年にはブラジルの最優秀ダンスカンパニーに送られるフィアット賞を受賞した。その後も欧米中心に世界中の主要劇場で上演を果たした。2006年にはブラジル観光ジャーナリスト協会からバイア州の最優良な観光文化サービスとして表彰され、観光サービスの一つとして認知された (Balé, 2013)。

当カンパニー公式サイトによると「ダンサー、ミュージシャン、シンガー等の38名のメンバー一座が、スレイブダンス、カポエイラ、サンバ、そしてカーニバルの祝祭ダンスを含むアフリカ起源の『バイア的』フォークダンスを披露

し、当一座はその大衆的な『バイアの』起源を彷彿とさせる、当地域で最も重要な文化的事象を表現している」とある（Balé, 2013）。ここで着目すべきは、彼ら自身が文章中においてかぎ括弧で強調しているように、「アフロブラジルの（Afro-baileiro）」という語句を用いずに「バイアの（Bahian）」という表現を用いている点である。これはエスニシティの境界を考える上で重要な見解とみなされる。後の本節における考察にて詳述される。

### 3. 調査結果

対象演目が含まれる公演は、2008年3月14日にサルバドルの下町ペロウリーニョにあるミゲル・サンタナ劇場（Teatro Miguel Santana）<sup>72</sup>において20時から上演された。劇場の最大収容客数は100名で小規模なイタリア式額縁舞台<sup>73</sup>の劇場であった。

公演内容はバイア起源のダンスやアフロブラジル民族信仰のカンドンプレにおけるダンス等の6演目であった。当公演はブラジルにおいて唯一のプロのフォークダンスカンパニーBalé Folclórico da Bahiaによるものであった。

パンフレットの表紙には、カポエイラダンサーが左右開脚の跳躍姿が載っている（図7）。パンフレットの下部にはバイアの民俗衣装を着た女性ダンサーの姿も見られる。現代的カポエイラのスタイルでは、ユニフォームは多くの団体で白いTシャツにジャージ素材のズボンに、ひも状の段位を表す帯を装着することが練習や昇段式において一般的なスタイルである。屋外パフォーマンスやステージパフォーマンスにおいて、華やかさを出すために異なる衣装を身に着けることがある。それを踏まえるとパンフレットのカラフルな衣装も舞台上の演出の一つとみなされる。



図7 2008年3月14日公演の  
BFBのパンフレット表紙

<sup>72</sup> 館長：Walson Botelho、住所：Rua Gregório de Matos, 47/49, Pelourinho Salvador BA

<sup>73</sup> 客席から演劇空間が一枚の絵のように見える舞台。

表 24 2008 年 3 月 サルバドルの劇上における上演内容

上演順	内 容
1	オリシャ達のパンテオン : カンドンブレの一部。アフリカの神オリシャと共にトランス状態に入った後、ダンスでそれぞれの神の特徴を表現する。
2	ファイヤーダンス : 火と雷の神シャンゴへの誓いのダンス。
3	漁師のダンス Puxa da Rege : 海の神タイエマンジャが出現する有名な演目。漁師たちがダンスや歌で安全かつ大漁を祈願する。
4	マクレレ Maculelê : ブラジル植民地時代のサトウキビ収穫終了祝いのために奴隷が踊った劇的なダンス。このダンスの戦闘性が高く、雇い主に対する護身のために行われたと言われている。
5	カポエイラ Capoeira : ブラジル植民地時代のアンゴラ人奴隷によってブラジルに持ち込まれたアフリカンファイト。
6	フェイナーレ

(2008 年 3 月 14 日のパンフレット記載内容を基に筆者作成)

上演内容は、オリシャ達のパンテオン／ファイヤーダンス／漁師のダンス／マクレレ／カポエイラ Capoeira／サンバ・ジ・ホーダの演目順であった(表 24 参照)。全体上演時間は 1 時間弱で、カポエイラは 4 分間で、その他の演目は 10 分～12 分程度であった。

表中の上演順「1」「2」「3」は、アフロブラジル民間信仰カンドンブレで行われる神々に纏わるダンスの一部である。パンフレット上ではカポエイラは「アンゴラから持ち込まれたアフリカンファイト」と説明が付されていた。上演順「5」の「カポエイラ」(以下、演目「カポエイラ」と略す)に着目し、動画等の比較により身体技法と構成の特徴を次項で挙げる。

#### 4. 上演内容の考察

演目「カポエイラ」では、図 7 のパンフレットの表紙に見られるように、高い身体能力と軽快な身のこなしで展開されるアクロバットと、連続する回転蹴りのスピード感が強調された構成だった。演目「カポエイラ」の概要とソロ演技の内容は表 24 のとおりである。

演技構成について「一般的なゲーム」と比較すると、2 つの特徴が見受けられた。「②ソロ演技」においてアクロバットが多用された(表 25 の右枠)ことと、「③ゲーム」において一般的なカポエイラの基本の構えとステップの体勢時の腰位置に比べ、ゲーム中は蹴りを中心とした腰位置が高い動きが多用された

(表 26) ことである。

表 25 演目「カポエイラ」概要とソロ演技内容詳細

上演時間	4 分間
演技者	6～8 名
使用楽器	弦楽器ビリンバウ(登場時のみ)
演技構成	<div> <p>①楽器演奏約 20 秒</p> <p>②ソロ演技約 10 秒×4 名</p> <p>③ゲーム 約 15 秒～30 秒×3～4 組</p> <p>④高速回転の蹴り合い 約 15 秒×5 組</p> </div> <div> <p>②ソロ演技内容(アクロバットの内容)</p> <p>バック転+後方宙返り</p> <p>手無し側転(アラビア宙返り)</p> <p>片手倒立、片手倒立 1 回ひねり</p> <p>バック転 3 回+伸身後方宙返り等</p> </div>

(筆者作成)

表 26 動画における 1 組のゲームの構成内容(約 15 秒～約 30 秒×3～4 組)

	1 組目のゲーム 31 秒間中、基本ステップ以外の動作
演技者 A	3 種類の蹴り、1 種類のよけ、2 種類の床に近い技、2 種類の見せ技
演技者 B	2 種類の蹴り、1 種類のよけ、2 種類の床に近い技、1 種類の見せ技

(筆者作成)


蹴りとよけの攻防は、のべ 5 組のゲームで行われたが、平均ゲーム時間は 14 秒であった。その間に蹴った回数は、一人当たり平均 8.2 回であり、1 回あたりのけりは 0.93 秒であった。つまり、回転蹴りが連続的に構成され、動きも「一般的なゲーム」よりも高速であった。

身体技法と構成の特徴として①高い腰位置、②連続する回転蹴り、③アクロバットの多用、④動きの高速化が挙げられ、カポエイラの多種多様な特性のなかでも、日常的に行われている土着的な動きやゲームにおける勝敗を曖昧にし、駆け引きの面白さを重視した展開よりも、身体技法のスピード感と華麗さに特化されていた。伝統派カポエイラ支持者からは批判的な見方もあるが、バイア起源の身体文化を表象する「バイア的アフリカンファイト」としてカポエイラは観光資源として位置づけられながらも、高速かつアクロバティックを志向する技法に変化するという内実のエンタテインメント性が高められていた。



表 27 2つのゲームにおける演技内容

	ゲーム①		ゲーム②	
秒	演技者 A(緑)	演技者 B(青)	演技者 C(短髪)	演技者 D(長髪)
00	ホレイ(左へ)	アウー	側宙	フェイント(右へ回転)
01			ジンガ(右へ)	ジンガ(右へ)
02				
03				
04		ジンガ		
05	ジンガの体勢	カディラ	蹴りの構え	けり(右足ベンソ)
06	ホレイ(右へ)	ジンガ	蹴り(左足アマーダ)	けり(右足アマダ)
07	ネガチバ		蹴り(右ケシャーダ)	よけ(右へ)つつ
08	ホレイ(右へ)		よけ(右へ)	けり(左足コンパソ)
09	ジンガ(左へ)	ジンガ(右へ)	蹴り(左足コンパソ)	ジンガ(左へ)
10	ジンガ(右へ)		ジンガ(左へ)	蹴り(左足マテロ)
11		フェイント(左へ右へ)	蹴り(左足アマーダ)	蹴り(左足コンパソ)
12	よけ(左へ)	蹴り(左足メリアルア)	蹴り(右足ケシャーダ)	
13	蹴り(左足メリアルア)	よけ(左へ)	よけ(右へ)つつジンガ	蹴り(右足アマーダ)
14		ジンガ	蹴り(左足マルテロ)	ジンガ(左へ、前へ)
15	ジンガ(右へ)		ジンガ(右へ、後ろへ)	蹴り(右足ジョエリヤーダ)
16	しゃがみながらネガチバ			
17	ホレイ(右へ)	デスタバチカ	右へよけつつジンガ	蹴り(左足コンパソ)
18	ジンガの体勢	トロッカ・ネガチバ	蹴り(左足コンパソ)	蹴りフェイント(右アマダ)
19	アウー(左へ)	ホレイ	よけ	から、右マテロ
20		ジンガ	よけ(左へ)	蹴り(右足アマダ)
21	ジンガの体勢	アウー(左へ)	ジンガ(前へ)	ジンガ(左へ)
22	蹴り(右ケシャーダ)		蹴り(左足ピザオンホダ)	よけ(立って)
23	ジンガの体勢(切替し)			
24	蹴り(左コンパソ)	ジンガ	演技者 C(短髪)	演技者 D(長髪)
25		よけ(右へ)	側宙	フェイント(右へ回転)
26	見せ技(コンパソキープ)		ジンガ(右へ)	ジンガ(右へ)
27				
28		蹴り(右コンパソ)		
29	ジンガの体勢			
30		カディラ		
31	握手	握手		

※ 網掛けのセル  が「低」空間の動作である。ゲーム②では「低」空間の動作は皆無であった。

(筆者作成)

また、上演プログラムの内容は、全て「アフロブラジル」文化の民間信仰やカポエイラ、ダンス等であった。そして、先述したように、ダンスカンパニー BFB ウェブサイトでは、「アフロブラジル」文化ではなく「バイア」文化と明記されている。

当事者が自分の属性をどのように呼称するかは、エスニシティの問題において最も注視されるべきことである。エリクセンによれば「エスニシティは社会的接触を通して構築されている」のであり、「自分たちが文化的に独自だとみなしている成員から成る諸集団の間に存在する、制度化された関係性を前提にしている」(エリクセン, 2006, p.49)。ゆえに、彼らが他のエスニシティやナ



ショナリティという他のアイデンティティとの接触によって、より強固に意識されていると考えられる。サルバドルの場合は、発祥の地としての「バイア」へのこだわりが見受けられ、「バイア」という土地をエスニシティの境界線とみなしていると判断される。

それゆえに、バイアにおけるショーとしてのカポエイラは「アフロブラジル」というエスニシティを「バイア」という土地によって区別することによって、創造された異なるエスニシティの固有性の表象であるといえる。しかしながら、そのショーとしてのカポエイラは高速の動きと超絶技巧によって特徴付けられるエンタテインメント化が見受けられた。したがって、バイアのショーとしてのカポエイラでは、土地に根ざしたエスニシティという根源的な繋がりを求めつつも、本来のカポエイラの形式から離れ、エンタテインメント化の変容がもたらされるという矛盾を孕んだ実体が認められたのである。

### 第3節 リオデジャネイロの劇場におけるショー

#### 1. リオデジャネイロ州都リオデジャネイロ市概要

リオデジャネイロは、1975年に至るまで約200年間、植民地時代、帝政時代、共和政時代のブラジルの首都だった。年間の外国人観光客数は、ブラジルにおいて最多で、特に2012年は2011年と比較して、外国人観光客が543万3354人から567万6843人へ、4.5%増えた。特にリオデジャネイロは最も変動が大きく、2012年に116万4187人の外国人観光客が訪れ、2011年の104万4931人と比べると、11.4%の上昇であった（Globo, 2013）。

また、リオデジャネイロにおいて19世紀半ばからカポエイラは近代化されたといえ、カポエイラの発展においては、新たな潮流を起こした重要な土地ともいえる。現在もリオデジャネイロのカポエイラは、実験的な試みがなされながら、それを受容しつつ進化させるという風土があるといえる。

#### 2. 劇場「プラタフォルマ（Plataforma）」概要

プラタフォルマは、リオデジャネイロ州リオデジャネイロ市のレブロン地区に位置するレストランを併設した劇場である<sup>74</sup>（写真9）。レストランでは洗練された落ち着いた雰囲気、メニューの料金設定から判断するに、富裕層あるいは外国人観光客向けと見受けられた。プラタフォルマの劇場におけるショーは、ブラジル観光の多くのガイドブックにリオデジャネイロの名所として掲載

---

<sup>74</sup> 住所：Rua Adalberto Ferreira, 32, Leblon, Rio de Janeiro, RJ

されており、コパカバーナ沿岸の高級ホテルの多くはプラタフォルマまでのシャトルバスを運行している。劇場はレストランの二階にあり、ショーの観覧チケットは 140 レアルで、当時の日本円で 7000 円程度であった。

プラタフォルマの公式ウェブサイトによれば、「本物のブラジルの民間伝承」が見られ、「最大かつ最も伝統的な光景」がショーでは楽しめると謳っている。また、「ブラジルのポピュラー音楽は文化的起源であるポルトガル、先住民とアフリカ間の混雑の結果である」と明記しており、「多様な人種や文化のルーツの物語」としてショーを位置づけている。

ショーで用いられている衣装の色は、ブラジルの国旗の色であり、ブラジルの歴史や文化の象徴であると述べられている。緑が「森や林」を意味し、黄色が「金や国の富」を意味しており、更に青は「空と星座」であり、白は「平和」という意味であるという（Plataforma, 2013）。

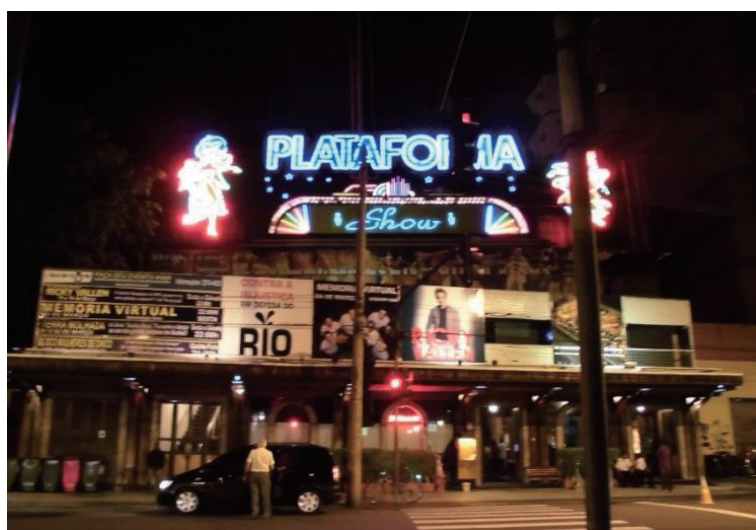


写真 8 プラタフォルマの外観（筆者撮影）

### 3. 調査結果

上演は 22 時から開始され、全上演時間は 2 時間ほどだった。パンフレットにはプログラム内容の詳細は記載されておらず、アフロブラジル文化のフォークロアショーであると明記されていた。

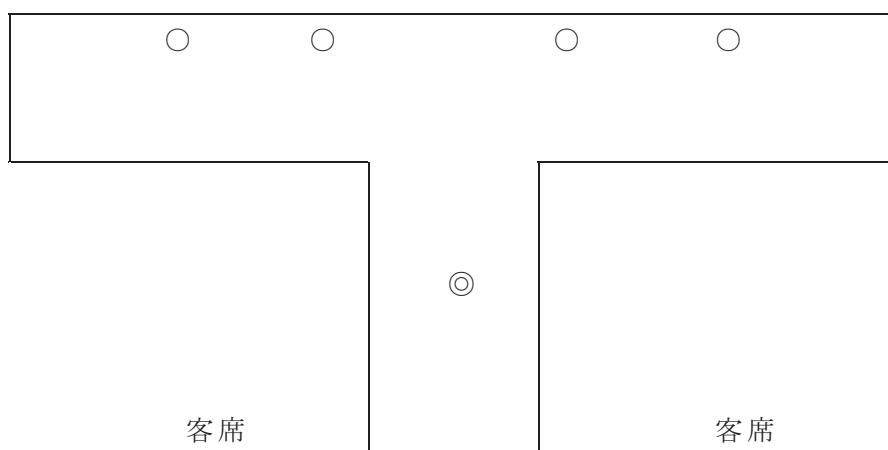
額縁型舞台のエプロン型<sup>75</sup>（写真 9・図 8 参照）で、縦 7m、横 12m であった。最大収容客数は 320 名であった。カポエイラの上演順 1（表 28 参照）では、○印の箇所のカポエイリスタ 4 名がジンガというステップを踏み、◎印の箇所にカポエイリスタ 1 名が楽器を演奏していた。

<sup>75</sup> エプロン型ステージとは、客席に大きく張り出した舞台のことである。

上演されたプログラム全体は約 2 時間であり、演目は開演前の余興と観客との交流をかねたカラオケも含めて 15 演目あった。開演後、カポエイラは 3 番目に上演された。



写真 9 プラタフォルマ劇場のエプロン型舞台 （筆者撮影）



※ ◎印は楽器演奏をする出演者の位置、○印はステップを踏む出演者の位置






図 8 演目「カポエイラ」のオープニングシーンの出演者の位置  
(筆者作成)

表 28 プラタフォルマの上演プログラム






	演目	実際の様子
1	女性によるサッカーのリフティング 緞帳が上がる前の 10 分間、1 人の女性が一度もボールを落とすことなく、様々な体勢でリフティングを続けた。	 
2	ブラジルのフォークダンス「ボイ・ブンバ(Boi-bumbá)」(ブンバ・メウ・ボイ(Bumba meu boi)とも呼ばれる)。主にブラジル北部、北東部のダンス。	
3	有名なボサノバ曲「ブラジルの水彩画」のサンバ風アレンジの曲に合わせボイ・ブンバのダンサーとサンバダンサーが共にサンバを踊る。	
4	カポエイラ	(別表で詳述する)
5	民間信仰カンドンブレの神々の踊り。	
	カンドンブレの海の神であるイエマンジャ役の女性がサンバダンサーの格好で踊る <sup>76</sup> 。	

<sup>76</sup> 通常のイエマンジャの衣装は全身が覆われたワンピースのタイプである。



6	ブラジルのフォークダンス「シリリ(Siriri)」、ブラジルの西中央地区(マツグロッソ州、マツグロッソドスル州)のダンス。	
7	ブラジルのフォークダンス「フォフォー(Forró)」、ブラジル北部のダンス。	
8	宗主国ポルトガルに由来するブラジルのフォークダンス「チュラ(Chula)」。ウルグアイに隣接するブラジル南部リオグランデドスル州のダンス。	
9	男性サンバソロダンサー「パシスタ(Pasista)」の踊り。	
10	ランバダ	



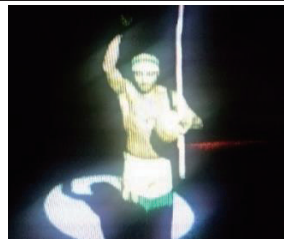

11	サンバ(ダンス)	
12	サンバ(楽器隊「バテリア」)	
13	タップダンスをしながらポイの 芸を披露する	
14	司会者が国名を呼びあげ、各 国の観光客を舞台に上がらせ る。始めに日本人が呼ばれ、 坂本九の「上を向いて歩こう」 のカラオケを合唱する。その 後、各国の観光客を舞台に 上げ、各国で有名な曲を歌う よう司会者が促す。(右写真 は中国人観光客)。	
15	「ポルタ・バンデイラ」、カーニ バルにおけるサンバチーム (エスコージャサンバ)の旗を 持って踊る女性のことを指 す。	
16	フィナーレ	

(写真撮影・表作成ともに筆者による)

プラタフォルマの上演プログラムでは 16 の演目のうちフォークダンスの演目は上演順「3」「6」「7」「8」の 4 演目であった。アフロブラジル民間信仰カンドンブレの演目は、上演順「5」のみで、上演時間は約 8 分間であった。カポエイラ以外の演目は、バイアに限らず、北部、北東部、南部、西中央地区のそれぞれのフォークダンスが行われていたことが特徴的だった。また、サッカーやサンバという世界的に共有されているブラジルのイメージを担保する身体文化が紹介されていた。





次に、演目「カポエイラ」の上演内容詳細をみていく（表 29）。出演者数は 5 名であり、それぞれ青、緑、黄色の異なる色のズボンをはいていた。上演順「1」「2」以降は、ソロ演技が続き、T 字型舞台奥の横断と、T 字型舞台先端まで移動するという 2 パターンの移動が中心であった<sup>77</sup>。

表 29 プラタフォルマにおける演目「カポエイラ」の上演内容



上演順	分‘秒’	上演内容詳細	実際の様子
1	0'00"~0'51"	暗転の中で 1 人がピリンバウを演奏（右写真参照）	
2	0'52"~1'20"	徐々に明るくなり、奏者の後ろで他の出演者 4 名が板付きで登場して太鼓の音にあわせて手拍子をする	
3	1'21"~1'38"	カポエイラの基本ステップジंगाを踏む。通常のカポエイラのリズムではなく、アレンジされたリズムで手拍子をする	
4	1'39"~1'58"	民間信仰カンドンブレで奏でられるドラムのリズムに合わせてジंगाを踏む。4 人が舞台奥で踊り、1 人目がソロ演技を行い始める（表の「⑤振付けられた動き」に該当）。	


<sup>77</sup> 舞台におけるショーでは、舞台上をどのように出演者が動き、空間を使うかという観点が作品の特徴となる場合もあるため、明記した。

5	1'59" ～2'35"	<b>1 人目</b> (T 字のセンターで)とび回し蹴り 1 回-回転蹴り 2 回 ※ 半回転蹴り 2 回／立位からブリッジ／ブリッジの応用 連続技(右写真参照)／床倒立※ ※他の 4 名の出演者は、振付けられた動きを行う (表 の「⑤振付けられた動き」に該当)	
6	2'40" ～4'15"	<b>2 人目</b> タンブリング(アクロバットの連続を意味する)3 本 (上手から)ロンダード-バック転 2 回-バック宙※ (下手から)ロンダード-バック転-伸身バック宙※(右 上写真) (上手から)ロンダード-バック転-伸身バック宙※ 側転-跳び回し蹴り-側転-回し蹴り 2 回 T 字の前へ倒立で歩く(20 秒間) 飛び込み前転-首はね飛び起き 3 回(右下写真) ※他の 4 名の出演者は、振付けられた動きを行う (表 の「⑤振付けられた動き」に該当)	
7	4'16" ～4'53"	<b>3 人目</b> タンブリング 5 本 (下手から)ハンドスプリング片足-ロンダード-バック転 (右写真参照)-伸身片足バック宙-側転※ (上手から)ロンダード-バック転 3 回-伸身宙返り(右 上写真) (下手から)回転跳び蹴り-側転-伸身バック宙片足 着地 (上手から)側転／立位から片足抜きバック宙返り (T 字センターから前に)倒立-バック転 3 回-ポーズ (右下写真) ※他の 4 名の出演者はソロ演技者に注目するポーズ をとる (表 の「⑤振付けられた動き」に該当)	

8	4'54 ～6'29"	<div>4 人目</div> タンブリング 3 本 (上手から)舞台を走って横断する (下手から)ロンダード-バック転 5 回-バック宙 (上手から)ロンダード-バック転-バック宙片足着地 (下手から)アラビア宙返り(側宙)-走り抜ける (T 字センターで)下肢 1/2 ひねり側転(エリコプテロ) 5 回連続-前後開脚で着地 (T 字の先端)3 点倒立でそらした状態を保持(右写真参照)	
9	6'30" ～7'07"	<div>5 人目</div> タンブリング 3 本 (上手から)ロンダード-バック転 9 回-バック宙 (下手から)ハンスプリング片足着地 (上手から)アラビア宙返り 2 回 (下手から T 字の先端へ)倒立で 10 秒間歩く(右写真参照)	
10	7'08" ～7'24"	センターあたりでゆるやかに集まる 客席に向かって手拍子をあおる	
11	7'25" ～7'35" ↓ 表 30 の ゲーム①	二人組みでゲーム(右写真参照) 7 秒間、回転蹴りの応酬。 その後、お辞儀をする	
12	7'36" ～8'03"	隊形移動、舞台床上の汗を布で拭く 客席の手拍子をあおる	
13	8'04" ～8'36"	舞台上の立ち位置を 4 名は確認する。1 名(1 人目)はアクロバットの準備(歩数あわせ)をする アクロバットの組技として、ロンダード-伸身バック宙で、4 名の人垣を飛び越える(表の「③アクロバットの組技」に該当)	



14	8'37" ～9'07" ↓ 表 30 の ゲーム②	二人組みでゲーム(7 秒間) 合計 12 回連続の蹴りの攻防が行われる 二人とも倒立のままで向かい合う(8 秒間) 更にもう一人が倒立で加わり 3 人で倒立キープする(10 秒間)	
15	9'08" ～9'20"	5 人が舞台上に点在し、それぞれのソロの動きを行う	
16	9'21"～ 10'17"	暗転になり、曲が始まると同時にスポットライトが 2～3 つ舞台上をはしる・ バーデン・パウエル「ビリンバウ」という曲の速いアレンジ版に合わせ、手拍子をあおる。 全員が同じ動きで一斉に動く(右写真参照)(表の「⑤振付けられた動き」に該当)。ジンガー半回転蹴り 2 回-バック転／ソロで動く。手拍子をあおり、客席に向かって挨拶後、はける。	

※網掛けしたセル  はカポエイラのゲームが行われたことを意味する。

(写真撮影・表作成ともに筆者による)

#### 4. 上演内容の考察

リオデジャネイロにおける演目「カポエイラ」の概要をまとめると、次の表 30 のとおりである。バイアの演技内容と比べると、「③アクロバットの組技」と「⑤振付けられた動き」が新たな演技内容として認められる。「③アクロバットの組み技」とは、表 28 の上演順「13」の内容である。また「⑤振付けられた動き」は表 28 の上演順「4」「5」「6」「7」「16」の内容を指す。「④二人のゲーム」に関しては全て高速の蹴り技で、表 31 のとおり「低」空間の利用は皆無だった。











表 30 プラタフォルマの演目「カポエイラ」の演技内容詳細

上演時間	10 分 20 秒間	演技構成	①楽器演奏	50 秒間
演技者	5 名		②ソロ演技	5 分間
使用楽器	弦楽器ビリンバウ(登場時のみ) アフリカン太鼓(アタバキ)		③アクロバットの組技	32 秒間
			④二人のゲーム	40 秒間
			⑤振り付けられた動き	20 秒間

(筆者作成)

表 31 プラタフォルマの二つのカポエイラゲームにおける演技内容

秒	ゲーム① (表 28 の上演時間 7'25"~7'35"部分)		ゲーム② (表 28 の上演時間 8'38"~8'45"部分)	
	演技者 A	演技者 B	演技者 C	演技者 D
00	蹴り(左ケシャダ)	蹴り(左ケシャダ)	避ける	蹴り(右アマダ)
01	蹴り(右ケシャダ)	蹴り(右ケシャダ)	蹴り(右アマダ)	避ける 蹴り(左ケシャダ)
02	蹴り(左ケシャダ)	蹴り(左ケシャダ)	蹴り(左ケシャダ)	蹴り(右アマダ)
03	蹴り(右ケシャダ)	蹴り(右ケシャダ) 蹴り(左ケシャダ)	蹴り(右アマダ)	蹴り(左ケシャダ)
04	蹴り(左ケシャダ) 蹴り(右ケシャダ)	蹴り(右ケシャダ)	蹴り(左ケシャダ)	蹴り(右アマダ)
05	蹴り(左ケシャダ)	蹴り(左ケシャダ)		蹴り(左ケシャダ)
06	上体を右へ倒す 蹴り(右コンパソ)	蹴り(右アマダ)	蹴り(右跳びケシャダ)	
07	前に出てお辞儀	前に出てお辞儀	倒立で姿勢保持	倒立で姿勢保持
08				
09				
10				

(筆者作成)

以上を踏まえて「一般的なゲーム」並びにカポエイラの形式と比較すると、次の 5 点が相違点として挙げられた。

- ①上演中、カポエイラで通常演奏される音楽ではなく、アフロブラジル民間信仰カンドンブレの神々にまつわるダンスとともに演奏される太鼓のリズムが常に流れていた。
- ②全上演時間のうち、カポエイラのゲームを行ったのは、表中「上演順 11」の 10 秒間と上演順「14」の 7 秒間であり、合計 17 秒となった。これは演目「カポエイラ」の全上演時間 10 分 20 秒中、わずか 2.7%であった。
- ③二人のゲームにおける動きは全て蹴り技で、「低」空間の利用の動きは皆無だった。
- ④上演時間の過半数がソロ演技に費やされた。
- ⑤ソロ演技において、宙返り系、倒立系、ブリッジ系などの超絶技巧が多用された。

このように、高度なアクロバットを中心とした構成となり、二人のゲームよりも個人技が重点的に披露されていた。また、通常カポエイラで演奏される音楽は用いられず、カンドンブレにおけるドラムのテンポの早い演奏が常になされていた。また、演目「カポエイラ」の後半では有名なボサノバ曲をアップテンポにアレンジした曲が使用されていた。また、ソロ演技の間に他の 4 名の出演者が、リズムに合わせて振付けられたダンスを全員で揃えて踊っており、ショーとしてあらかじめ演技構成が考えられていた様子が看取された。ゆえに、リオデジャネイロのプラタフォルマにおける演目「カポエイラ」は、「一般的なゲーム」とかけ離れ、サーカスのような超絶技巧のアクロバットを中心に構成され、エンタテインメント化による変容が確認できた。

結果として、リオデジャネイロのプラタフォルマにおける上演プログラムでは 16 の演目のうち 4 演目がブラジルの北部、北東部、南部、中央部地区のフォークダンスであり、ブラジル全地域のフォークダンスが上演されていた。また、インディオの踊り（1 演目）、アフロブラジル民間信仰カンドンブレ（1 演目）、開演前のサッカー、オープニングとフィナーレのサンバという身体文化が演目とされていたことから、ブラジルの多様性が意識されていたといえよう。これはプラタフォルマの公式ウェブサイトにも明記されているように、確かに「多様な人種や文化のルーツの物語」が意識されているといえよう。しかし「本物のブラジル民間伝承」と謳っている点については、カポエイラのエンタテインメント化や、カンドンブレの演目における過度な露出の衣装などがエンタテインメント性を高めるための演出によるものであることは自明である。

このように、ブラジルの多人種・多文化のルーツが意識されながらも、ショ

ーとしての演出が施されており、特にカポエイラに関しては「一般的なゲーム」とはかけ離れたエンタテインメント化がなされていた。そして、プラタフォルマのウェブサイトで明記されていたように、ショー全体を通じて衣装はブラジル国旗の色が用いられ、ナショナルなイメージが意識されていたといえる。換言すれば、リオデジャネイロのショーとしてのカポエイラは、ナショナルなアイデンティティである多人種・多文化性を表象し、カポエイラを行う形式はエンタテインメント化という変容を伴った上演内容であった。

#### 第4節 劇場ショーとしてのカポエイラ変容と表象

演目「カポエイラ」に関するバイアとリオデジャネイロの違いは、上演時間と演技構成であった。上演時間はバイアが4分間、リオデジャネイロが10分20秒間であった。演技構成としては、「楽器演奏」「ソロ演技」「二人のゲーム」は両者に共通しており、リオデジャネイロの演目「カポエイラ」では、更に「アクロバットの組技」「振付けられた動き」が行われていた。

ショーとしてのカポエイラの上演内容を見る限りでは、2つの事例ともに、その演技構成の特徴から、「技の高速化」「超絶技巧化」というエンタテインメントとしての志向が確認された。しかしながら、ショー全体を通して何を表象しようとしていたかは、方向性をまったく異にするものであった。バイアでは、「バイア」という土地を境界線とする「アフロブラジル」<sup>78</sup>のルーツが意識され、リオデジャネイロでは「アフロブラジル」を含むナショナルなレベルでの「多人種・多文化」性が志向されていた。

両者とも、上演は劇場の舞台であった。本章で明らかにされたショーとしての高速技と超絶技巧によるエンタテインメント化が、ホーダではなく劇場の額縁舞台で行われたこととの因果関係の解明までは、本章の調査では及ばない。しかし、高速技と超絶技巧がエンタテインメント性を高めるための一手段であったと捉えることは妥当であろう。そして、エンタテインメント性を向上させる一つの要因として、より良いショーを行うことで観客に楽しんでもらいたいという純粋な舞台人としての動機に発端があったと想像される。つまるところ、バイアとリオデジャネイロのエンタテインメント化の内実は、カポエイラの演技構成と技を見る限りでは、同質であったと結論づける。

しかし、それぞれのショー全体のテーマは、バイアのショーではエスニシティのルーツであり、リオデジャネイロはナショナリティを構成する多様なエス

---

<sup>78</sup> 本稿 p.23 参照。

ニシティの一部として、他のエスニシティ（先住民や諸フォークロア）との接触によって際立った「アフロブラジル」というエスニシティであった。つまりエスニシティの起源的な視点からのショーと、多様な文化の一部として他のエスニシティとの差異によって照射されたショーという、まったく異なる観点からそれぞれがショーとして演出された結果、同質のエンタテインメント化したカポエイラが創造されたといえる。

表 32 演目「カポエイラ」に関するバイアとリオデジャネイロの比較

	バイア(サンタミゲウ劇場)		リオデジャネイロ(プラタフォルマ劇場)	
所要時間	4 分間		10 分 20 秒間	
演技構成	①楽器演奏	20 秒	①楽器演奏	50 秒
	②ソロ演技	40 秒	②ソロ演技	5 分間
	③二人のゲーム	1 分 45 秒	③アクロバットの組技	32 秒間
	④高速回転の蹴り合い	1 分 15 秒	④二人のゲーム	40 秒間
			⑤振り付けられた動き	20 秒間
何が表象されたか	「アフロブラジル」のエスニシティの「バイア」というルーツ		ブラジルの「多人種・多文化」性	

(筆者作成)

結果的に二つの事例において民族スポーツ、カポエイラのエンタテインメント化の内実は同質（高速技と超絶技巧）であった。これはいかなることを示唆しているのか。それは、カポエイラが位置づけられる文脈において、カポエイラの実体に関わらず、いかようにも色付けして価値付けられるということではないだろうか。バイアにおけるルーツ的「エスニシティ」の表象として、リオデジャネイロの多文化のうちの一つとして差異化によって強化される「エスニシティ」の表象として、ほぼ同時代にカポエイラが異なるアイデンティティ表象の装置として機能しているのである。

## 結 章

# 創造されるカポエイラの 文化的固有性



## 結 章 創造されるカポエイラの文化的固有性

### 第 1 節 制度からみるカポエイラの社会的役割

ブラジルのイデオロギーの転換に伴い、カポエイラは 1930 年代には人種混淆による同質化を意味する「混血」のナショナルアイデンティティの象徴とされる一方で、1980 年代から現在にかけては人種混淆における個々の差異を照射した「アフロブラジル」のエスニシティの象徴とされるという対照的な位置づけがなされた。また、公的政策において、2003 年に学校教育基本法の改正法令 10639 号によって基礎教育段階（初等教育と中等教育）においてアフリカ並びにアフロブラジル文化歴史教育が義務化された。そして、2008 年には文化省下部組織のブラジル歴史芸術研究所（IPHAN）によってカポエイラがブラジル無形文化遺産として登録された。現在、ブラジル政府は多文化主義国家として大衆教育を通じて「アフロブラジル」というエスニシティを共有し、新たなナショナルアイデンティティの創造に着手しており、カポエイラがナショナルアイデンティティ形成へ一役を担うという社会的役割が明らかにされた。

また、学校教育という制度にカポエイラが布置されることによって、新たに見出されるカポエイラの教育的価値が考察された。「国家カリキュラム方針」と「国家カリキュラム方針実施と国家計画」の制度上では、アフロブラジル文化歴史教育は、豊かなブラジル国家の発展へ向けて、ブラジル社会の根深い人種主義の撲滅が最終的な目的とされた。そのために国、州、市の異なる行政レベル間の連携の重要性が国家計画に明記された。

以上のことから、カポエイラはナショナルアイデンティティ形成の一助となるべく、学校教育に取り入れられ、ブラジル社会の人種主義の撲滅が目指されたのであった。

### 第 2 節 リオデジャネイロにおけるカポエイラ文化的固有性

#### 1. カポエイラにおける文化的固有性の内実

これまで見てきた様に、異なる文脈における実践者レベルでなされるカポエイラの文化的固有性の創造に照射してきた。異なる文脈において捉えた文化的固有性は、それぞれが異質ながらも、支配権力の及ばない領域に置いて、最終的にカポエイラ自体が発展していくための民族スポーツである身体文化として

の価値を見出す作業であったと捉えられる。

第2章では、学校教育という制度にカポエイラが布置されることによって、新たに見出されるカポエイラの教育的価値が考察された。教育的な工夫が最も必要とされる幼児教育段階に着目し、リオデジャネイロ市の私立J幼稚園の教育実践の場において実証的に教育内容の検討を行った。その結果、技の完成度よりも行為そのものに意味があり、ゲームの基軸となる「問いかけと返答」という意味を重視する傾向が認められ、教育内容の重要な観点となると考察された。

第3章ではカポエイラの競技化としてアバダ・カポエイラにおける1998年から2013年の競技大会に着目した。競技規則の前文で「カポエイラの特徴を最大に維持するための競技の実現」を目指すことが明記され「文化的アイデンティティ」を理解することが競技や心得として掲げられた。そして「支配権力の及ばない領域」でカポエイラの基底をなすカポエイラ独特の世界観を明文化することによって、その世界観が「カポエイラ芸術」の固有性として意識され、保存されていることが明らかになった。

第4章で扱ったゲーム形式の創造においては、アバダ・カポエイラにおける新たなゲーム形式「アマゾナス」の創造について、その理念と経緯、創作過程、動きの詳細が検討された。創造されたゲーム形式は、動物の模倣を通して、動物らしさの「表出」表現を伴う新たな形式として捉えられ、カポエイラ独自の表現領域の創造と模索が確認された。

第5章のエンタテインメント化では、劇場におけるショーとしてのカポエイラを元に動きと作品構成を検証し、ショーの象徴するアイデンティティの位相について考察した。リオデジャネイロにおいては、ショーのカポエイラにおける動きは高速化し、超絶技巧が作品構成の中心をなしていた。しかし、ナショナルアイデンティティを構成するエスニシティとして、先住民や他のフォークロアとの接触によって浮き立つ差異によるエスニシティがショーを通して表現されていた。

以上のことから、制度では「アフロブラジル」のエスニシティの象徴としてナショナルアイデンティティ形成に寄与する社会的役割がカポエイラに付帯された。その一方で、実践者によって文化的固有性が創造される現況が改めて捉えられた。

すなわち、制度へ取り込まれることによって改めてカポエイラの教育的価値が既存理念より抽出された。そして競技化によって文化的アイデンティティが実践者に意識され、カポエイラの特徴が競技規則として保存された。また、ゲーム形式の創造では表現領域への開拓が模索され、エンタテインメント化ではショーにおいてカポエイラの動きや構成は高速かつ超絶技巧化しつつも、エス

ニシティの象徴として位置づけられた。

このような実践者レベルにおける固有性の創造は、カポエイラという身体文化としての固有性の模索の表れともいえ、カポエイラそれ自身が発展するというコンテキストの中で新たな価値を創造しながら柔軟に適応していく生の姿として捉えられた。

## 2. カポエイラにおける文化的固有性の位相

エリクセンのいうように、「多文化主義にかかわる疑問は世界的なことからであり、各地で独自の枠組みと表象が展開されている」（エリクセン，2011，p.280）。ブラジルではカポエイラを通じた「アフロブラジル」というエスニシティがナショナルアイデンティティを構成する一部として表象されている。バイアのダンスカンパニーの事例では、「アフロブラジル」のエスニシティの境界をめぐる実践者の帰属意識が垣間見られた。「アフロブラジル」のエスニシティがナショナリズムに取り込まれることによって少数派といわれる集団内部において固有性が意識されていることは想像に難くない。しかしながら、ショーにおけるカポエイラの実態はエンタテインメント化しており、観光化の文脈における変容が捉えられた。このようなエスニシティとしての表象が、エンタテインメント化という実態の志向性と異なる矛盾を孕んだ現状を本研究によって捉えることができた。

すなわち、カポエイラにおける文化的固有性は、実践者の帰属意識によって、異なる位相で表現されていると考えられる。バイアのダンスカンパニーのショーカポエイラでは、実態はエンタテインメント化していながらも、ダンスカンパニーのスタンスとしては「バイア」という地域を境界にしたエスニックアイデンティティが意識されており、カポエイラも「バイア」の表象の一部として位置づけられている。

他方で、リオデジャネイロのショーカポエイラでは、「ブラジル」の多文化主義・多人種性を表している「アフロブラジル」という一つのエスニシティとして位置づけられることで、「アフロブラジル」というエスニシティが「ブラジル」を表象している。

つまり、カポエイラはエスニックの境界を越えてブラジルにおいて共有される文化として普及しており、その文化的境界線は多元的である。ゆえにカポエイラはすでにエスニック集団の文化的単位の象徴だけにとどまらない。「アフロブラジル」というナショナルアイデンティティの一部の象徴として、その文化を共有することによる新たな帰属意識の形成を企図していると考えられる。

## 文献一覧

- Abadá-Capoeira.(2005) Revista Abadá Capoeira. 1(1), FLUXO 5  
COMUNICAÇÃO: São Paulo.
- Abadá-Capoeira.(2010) Revista Abadá. 1(1), Abadá-Edicoes Brasil: São  
Paulo.
- Abadá-Capoeira.(2013a)公式ウェブサイト <http://www.abadacapoeira.com.br/>(参照日 2013 年 9 月 15 日).
- Abadá-Capoeira.(2013b)公式ブログ <http://abadacapoeira.com.br/blog/> (参照  
日 2013 年 9 月 20 日).
- Abadá-Capoeira.(2013c)CEMB 公式ブログ <http://www.abadacapoeira.com.br/cemb/> (参照日 2013 年 10 月 10 日).
- Abadá-Capoeira Links.(2013)アバダ・カポエイラのリンク一覧ウェブサイト,  
<http://www.abadalinks.info/index.html> (参照日 2013 年 9 月 10 日).
- アビビ, ペドロ・ホドルフォ・ジュンジェルス.: 前田和子訳(2010)8.カポエイラ  
の神秘と魔術. ブラジル連邦共和国外務省編, Texts of Brazil カポエイラ.  
駐日ブラジル大使館: 東京, pp.71-78.
- Abrão, Lelber Ruhena.(2011) A capoeira na educação infantil. Jogando  
dentro do ambiente escolar. EFDeportes.com, Revista Digital. Buenos  
Aires, 16(159), Agosto de 2011.
- アブレウ, フレデリコ・ジョゼ・ヂ.: 前田和子訳(2010)3.カポエイラ弾圧時代.  
ブラジル連邦共和国外務省編, Texts of Brazil カポエイラ.駐日ブラジル大  
使館: 東京, pp.35-42.
- Alves, Leonardo Prata & Montagner, Paulo César.(2008) A esportivização  
da capoeira: reflexões teóricas introdutórias. CONEXÕES: Revista da  
Faculdade de Educação Física da UNICAMP, 6, pp.510-521.
- アンダーソン, ベネティクト.: 白石隆・白石さや訳(2007)定本 創造の共同体  
—ナショナリズムの起源と流行. 書籍工房早山: 東京.
- アンジョス, エリアニ・ダントス・ドス.: 前田和子訳(2010)9.カポエイラの「動  
き」とメタファー. ブラジル連邦共和国外務省編, Texts of Brazil カポエ  
イラ.駐日ブラジル大使館: 東京, pp.81-85.
- 荒井芳廣(1983)ブラジルにおける宗教研究と文化的アイデンティティの探求  
(I): 中南米文化史に関する覚学. 幾徳工業大学研究報告, A, 人文社会科学  
編, 7, pp.45-51.
- Assunção, Matthias Röhrig. (2005) Capoeira ; The History of an Afro-

- Brazilian Martial Art. Routledge, Taylor & Francis Inc : New York.
- 東裕・鶴沢隆(2010)日本のコンテンポラリーダンスにおいて舞台化される非舞台空間について—伊藤キム、平山素子の作品を通して—. 日本建築学会大会学術講演梗概集, pp.923-924.
- Baccino, Marcelo Pamplona (2010) “Educação patrimonial na capoeira : Proposta de ensino de toques de berimbau,” Anais da III Jornada de Pós-Graduação da FIBRA, setembro de 2010 ; pp.8-20.
- Balé Folclórico da Bahia 公式サイト <http://www.balefolcloricodabahia.com.br/> ,(参照日 2013 年 9 月 17 日).
- Balé Folclórico da Bahia 公演パンフレット, (2008 年 3 月 14 日入手)
- Beltrão, Kaizô Iwakami. and Novellino, Maria Salet.(2002)Alfabetização por Raça e Sexo no Brasil Evolução no Período 1940-2000. Instituto Brasileiro de Geografia e Estatística-IBGE.
- Bonfim, Genilson César Soares(2010)A prática da capoeira na educação física e sua contribuição para a aplicação da lei 10.639 no ambiente escolar: A capoeira como meio de inclusão social e da cidadania. Revista Brasileira de Ciências do Esporte.
- ブラジル連邦国外務省: 前田和子訳(2010)Texts of Brazil カポエイラ. ブラジル外務省広報室.
- Campos, Hélio. (2001a)Capoeira na Escola. EDUFBA, Bahia.
- Campos, Hélio. (2001b) Capoeira na Universidade: Uma trajetória de resistência. EDUFBA, Bahia.
- カッシーラー: 木田元訳(1991)シンボル形式の哲学(二). 岩波書店: 東京.
- コンドウル, ギリエルミ・フラザオン.: 前田和子訳(2010)カポエイラの国際化. ブラジル連邦共和国外務省編, Texts of Brazil カポエイラ. 駐日ブラジル大使館: 東京, pp.21-33.
- Correio, Livia de Paula Machado Pasqua., Bortoleto, Marco Antonio Coelho., Paoliello Elizabeth.(2012)Competições de capoeira: Apontamentos preliminares sobre os jogos regionais realizados pela fecaes e pela Abadá-Capoeira no estado de São Paulo. Pensar a Prática, Goiânia, 15(2), pp.272-550.
- DA SILVA, Luiz Walter CARLOS.(2013) RESGATE HISTÓRICO E CULTURAL AFRO-BRASILEIRO: CONTRIBUIÇÃO PARA CONSTRUÇÃO DA IDENTIDADE NACIONAL. Ph.D.dissertation, Instituto de Arqueologia Brasileira.
- Dawson, C.Daniel.(1994) Capoeira: An exercise of the soul, in Rosen, Roger.



- and Sevastiades, Patra McSharry (eds.), *Celebration: Visions and voices of the African diaspora*, The Rosen Publishing Group; New York, pp.13-28.
- デ・カルヴァーリョ・フィーリョ, モイゼス・クルク.(2008)第9章ブラジルの教育: 多様性の国における希望, 富野幹雄編. グローバル化時代のブラジルの実像と未来. 行路社: 滋賀.
- DE QUEIROZ, Maria Isaura Pereira; ISAURA, Maria.(1989) *Identidade cultural, identidade nacional no Brasil*. Tempo Social (São Paulo: Universidade de São Paulo), 1, 1.1.
- エリクセン, トーマス・ハイランド.: 鈴木清史訳(2006)エスニシティとナショナリズム: 人類学的視点から. 明石書店: 東京.
- Falcão, José Luiz Cirqueira.(2007) A produção do conhecimento na educação física brasileira e a necessidade de diálogos com os movimentos da cultura popular. *Revista Brasil Cinecia Esporte*, 29(1), pp.143-161.
- Falcão, José Luiz Cirqueira., Paraíso, Cristina Souza., Stotz, Marcelo Backes Navarro., Savenhago, Daniel Cristiano., Gaspar, Rafael Affonso.(2009)A Capoeira na Roda Científica Brasileira (1980 a 2006): Panorama e Perspectivas da Produção Strito Sensu sobre a Capoeira no Brasil in GONÇALVES, Alanson M. T. *Capoeira em Perspectiva*. Editora Tradição Planalto; Belo Horizonte, pp. 43-62.
- フレイレ, ジルベルト.: 鈴木茂訳(2005a)大邸宅と奴隷小屋〈上〉—ブラジルにおける家父長制家族の形成. 日本経済評論社: 東京.
- フレイレ, ジルベルト.: 鈴木茂訳(2005b)大邸宅と奴隷小屋〈下〉—ブラジルにおける家父長制家族の形成. 日本経済評論社: 東京.
- Freitas, Jorge Luiz de.(2007a)Capoeira infantil: a arte de brincar com próprio corpo(2.ed). Profressiva: Curitiba.
- Freitas, Jorge Luiz de.(2007b)Capoeira na educação física: como ensinar?. Profressiva: Curitiba.
- Freitas, Jorge Luiz de (2008) *Capoeira Pedagógica: Para crianças de 3 a 6 anos*. Editora Progressiva, Curitiba.
- Frigério, Alejandro(1989) Capoeira: de arte negra a esporte branco. *Revista Brasileira de Ciências Sociais*, 4.10, pp.85-98.
- Galindo, Márcia Cristiane da Silva., Galindo, Alexandre Gomes. (2011)As questões etnicorraciais na região amazônica: reflexões sobre a implementação da lei 10.639/03 no município de Santana-Estado do Amapá-Brasil. *Revista Ibero-americana de Educação*, 54(6), p.1-14.

- Gasoar, Fábio de Assis.(2013)Na roda dos direitos: o agendamento público da capoeira (2003-2010). Ph.D.dissertation, Universidade de Brasília.
- ゲルナー,アーネスト.: 加藤節他訳(2000)民族とナショナリズム. 岩波書店:東京.
- ギルロイ, ポール.: 上野俊哉他訳(2006)ブラック・アトランティック—近代性と二重意識—. 月曜社: 東京.
- Globo, ウェブサイト新聞記事 2013 年 4 月 23 日付け <http://oglobo.globo.com/pais/numero-de-turistas-no-rio-cresce-114-em-um-ano-brasil-tem-aumento-de-45-8188539>(参照日 2013 年 10 月 1 日).
- Gomes, Wilson de Sousa.(2011) A cultura, a educação e a capoeira: Considerações acerca de alguns conceitos, Revista Expedições Teoria da História & Historiografia, 1(2), pp.79-97.
- Governo Federal do Brasil. (2013a)Portal do planalto: Presidência da república casa civil. [http://www.planalto.gov.br/ccivil\\_03/\\_ato2007-2010/2008/lei/l11645.htm](http://www.planalto.gov.br/ccivil_03/_ato2007-2010/2008/lei/l11645.htm)(参照日 2013 年 9 月 5 日).
- Governo Federal do Brasil. (2013b)Portal do planalto: Senado federal: subsecretaria de informações. <http://www6.senado.gov.br/legislacao/ListaTextoIntegral.action?id=240893&norma=261827> (参照日 2013 年 9 月 5 日).
- Governo Federal do Brasil. (2013c) Portal do planalto: <http://www.brasil.gov.br/sobre/cultura/cultura-brasileira/cultura-afro-brasileira/print> (参照日 2013 年 9 月 4 日).
- Governo Federal do Brasil Ministério de Educação.(2009) “Plano Nacional de Implementação das Diretrizes Curriculares Nacionais para Educação das Relações Étnico-Raciais e para o Ensino de História e Cultura Afrobrasileira e Africana.” : Brasília.
- Heringer, Rosana., Pinho, Osmundo.(2011)Afro Rio Século XXI: Modernidade e relações raciais no Rio de Janeiro.Garamond Ltda; Rio de Janeiro.
- ホブズボウム, エリック・テレンス, レンジャー.: 前川啓治・梶尾景昭他訳 (1992)創られた伝統. 紀伊國屋書店: 東京.
- 堀坂浩太郎(2012)ブラジル跳躍の軌跡. 岩波書店: 東京.
- Educação Infantil IBGE(Instituto Brasileiro de Geografia e Estatística)(2002)“Alfabetização por Raça e Sexo no Brasil Evolução no Período 1940-2000.”
- IBGE(2010a)População residente, por cor ou raça, segundo o sexo e os

- grupos de idade-Brasil-2010. Instituto Brasileiro de Geografia e Estatística web site, [http://www.ibge.gov.br/home/estatistica/populacao/censo2010/caracteristicas\\_da\\_populacao/tabelas\\_pdf/tab3.pdf](http://www.ibge.gov.br/home/estatistica/populacao/censo2010/caracteristicas_da_populacao/tabelas_pdf/tab3.pdf) (参照日 2013 年 9 月 10 日).
- IBGE(2010b)População total e respectiva distribuição percentual, por cor ou raça, segundo as Grandes Regiões, as Unidades da Federação e as Regiões Metropolitanas-2009. Instituto Brasileiro de Geografia e Estatística web site, [http://www.ibge.gov.br/home/estatistica/populacao/condicao\\_de\\_vida/indicadores\\_minimos/sintese\\_indicadores\\_sociais\\_2010/SIS\\_2010.pdf](http://www.ibge.gov.br/home/estatistica/populacao/condicao_de_vida/indicadores_minimos/sintese_indicadores_sociais_2010/SIS_2010.pdf)(2013 年 9 月 10 日参照).
- IBGE ウェブサイト, <http://www.ibge.gov.br/home/>, (参照日 2013 年 10 月 10 日).
- IBGE ウェブサイト, [http://www.ibge.gov.br/home/geociencias/cartografia/default\\_territ\\_area.shtm](http://www.ibge.gov.br/home/geociencias/cartografia/default_territ_area.shtm), (参照日 2013 年 11 月 1 日).
- 池上秋彦、金田弘、杉崎一雄、鈴木丹士郎、中嶋尚、林巨樹、飛田良文編(2013 年 12 月 24 日更新)デジタル大辞泉. 松村明監修, 小学館: 東京.
- IPHAN(2008) Processo nº 01450.002863/2006-80 Registro da Capoeira como Patrimônio Cultural do Brasil. IPHAN. PDF データ <http://portal.iphan.gov.br/portal/baixaFcdAnexo.do?id=1388> (2013 年 3 月 3 日参照)
- IPHAN (Instituto do Patrimônio Histórico e Artístico Nacional) 公式ウェブサイト, <http://portal.iphan.gov.br/portal/montarPaginaInicial.do>, (2013 年 2 月 4 日参照).
- 石橋純(2009)第 9 章「黒人」から「アフロ系子孫」へーチャベス政権下ベネズエラにおける民族創生と表象戦略, 竹沢泰子編. 人種の表象と社会的リアリティ. 岩波書店: 東京, pp.244-265.
- 石川栄吉・梅棹忠夫・大林太良・蒲生正男・佐々木高明・祖父江孝男編(1993) 縮刷版文化人類学事典, 弘文堂: 東京.
- 伊藤秋仁(2010) ブラジルにおける人種意識の変遷: 人種民主主義から人種主義へ. 京都ラテンアメリカ研究所紀要, 10, pp.43-61.
- Jaqueira, Ana Rosa., De Araújo, Paulo Coêlho.(2012)Considerações histórico-sociais sobre as primeiras propostas de regulamentação desportiva da capoeira. Revisra de Artes Marciales Asiáticas, 7(2), pp.12-26.
- Jaqueira, Ana Rosa., Araújo, Paulo Coêlho de.,(2013)Considerações histórico-sociais sobre as primeiras propostas de regulamentação

- desportiva da capoeira. *Revista de História do Esporte.*,6(1), janeiro-junho de 2013, pp.1-40.
- 金七紀男・住田育法・高橋都彦・富田幹雄(2000)ブラジル研究入門. 晃洋書房: 京都.
- 北森絵里(2011)第4章ブラジルのブラック・ディアスポラーリオデジャネイロのファンキにみる言説と身体の政治学, 駒井洋監修. ブラック・ディアスポラ. 明石書店: 東京, pp.208-231.
- Kraay,Hendril. 1998. *Afro-Brazilian Culture and Politics: Bahia, 1790s-1990s*. M.E.Sharpe. New York.
- 久保原信司(1997)カポエイラ野地位上昇過程について: 黒人奴隷のシンボルから国家的スポーツへ. 名古屋大学 1996 年度修士論文.
- LAESER IE/UFRJ (2012) TEC 2010 12 - Distribuição dos grupos de cor ou raça e sexo pelos ramos de atividade econômica.
- LIGIÉRO, Zeca.(2012)O conceito de “motrizes culturais” aplicado às práticas performativas Afro-Brasileiras. *Revista Pós Ciências Sociais*, 8.16.
- Maranhão, Fabiano., Gonçalves Junior, Luiz., Corrêa, Denise Aparecida.(2007) Jogos e brincadeiras africanos nas aulas de educação física: construindo uma identidade cultural negra positiva em crianças negras e não negras. XV Jornadas de Jóvenes Investigadores Asociación de Universidades Grupo Montevideo, Asunción.: AUGM, 2007.(CD-ROM):p.1-8.
- 政岡勝治(2007a)アフロ・ブラジル文化のカポエイラ(前半). 芦屋大学論叢 (45), pp.65～78.
- 政岡勝治(2007b)アフロ・ブラジル文化のカポエイラ(後半). 芦屋大学論叢 (47), pp.35～44.
- Matory, James Lorand.(2005)*Black Atlantic religion: tradition, transnationalism, and Matriarchy in the Afro-Brazilian Candomblé*. Princeton University Press; Princeton, N.J.
- 松井健(1991)認識人類学論攷. 昭和堂: 京都.
- Melo, Sálvio Fernandes de.(2007) Cantigas de capoeira: uma fonte de saber e ensino da história e cultura afro-brasileira.*Revista do GT de Literatura Oral e Popular de ANPOLL*, 2007:p.1-15.
- Ministerio do Educação(2004) Diretrizes curriculares nacionais para a educação das relações étnico-raciais e para o ensino de história e cultura afro-brasileira e africana.
- Ministerio do Educação(2009) Plano nacional de implementação das

- diretrizes curriculares nacionais para educação das relações  
 etnicorraciais e para o ensino de história e cultura afrobrasileira e  
 africana.
- Mouraes, Rodrigo(2009)A Percussão do Berimbau de Barriga. Abadá  
 Edições; Americana.
- Municipal de Educação, Secretaria Especial de Políticas de Promoção da  
 Igualdade Racial(2004)Diretrizes Curriculares Nacionais para a  
 Educação das Relações Étnico-Raciais e para o Ensino de História e  
 Cultura Afro-Brasileira e Africana.
- Municipal de Educação(2010) Plano Nacional de Implementação das  
 diretrizes curriculares nacionais para educação das relações  
 etnicorraciais e para o ensino de história e cultura afrobrasileira e  
 africana.
- 中牧弘允(1992)『陶醉する文化—中南米の宗教と社会—』平凡社: 東京.
- オルティス, レナット(1999)講演会: ブラジル文化とナショナルアイデンティ  
 ティー. Encontro Lusófonos, 創刊号, pp.3-5.
- 小槻文洋・原一樹・伊多波宗周共訳(2012)観光研究の主要概念-"Key Concepts  
 in Tourist Studies" 抄訳. 神戸夙川学院大学紀要(3), pp.2-56.
- Plataforma 公式ウェブサイト <http://www.plataforma.com/novo/index.asp>  
 (参照日 2013 年 9 月 1 日).
- Rego, Waldeloir.(1968)Capoeira Angola: um ensaio sócio-etnográfico.  
 Editôra Itapua.
- Reis, André Luiz Teixeira. (2001) Educação Física & Capoeira: saúde e  
 qualidade de vida. Thesaurus Editora, Brasília.
- Reis, Letícia Vidor de Souza.(1996) Negros e brancos no jogo de capoeira: a  
 reinvenção da tradição. Dissertação (Mestrado de História),  
 Universidade de São Paulo.
- Reis, Vagner Ferreira., Pereira, Jascqueline da Silva Nunes.(2011) A cultura  
 afro-brasileira como conteúdo a ser ensinado nas aulas de educação  
 física. Encontro Internacional de Produção Científica Cesumar., VII  
 EPCC; Centro Universitário de Maringá.
- RICHARDS, Greg (ed.).(2007)Cultural Tourism: Global and local  
 perspectives. Routledge.
- Ribeiro, Darcy. (1995)"O povo brasileiro: a formação eo sentido do  
 Brasil".Companhia Das Letras; São Paulo.
- Rocha, Luiz Carlos Paixão da.(2006)“Políticas afirmativas e educação: a lei



- 10639/03 no contexto das políticas educacionais no brasil contemporâneo.” Ph.D. dissertation, Universidade Federal do Paraná: Curitiba.
- 佐々木重洋(2008)感性という領域への接近—ドイツ美学の問題提起から感性を扱う民族誌へ—. 文化人類学 73(2), pp.200-220.
- 佐藤郁哉(2002)フィールドワークの技法—問いを育てる、仮説をきたえる. 新曜社: 東京.
- Secretaria de Estado de Educação do Rio de Janeiro.(2009) “Plano estadual de educação do Rio de Janeiro. ”
- Selka, Stephen. (2007) Religion and the politics of ethnic identity in Bahia, Brazil. University Press of Florida; Florida.
- Shaffer, Kay(1977)O berimbau-de-barrifa e seus toques. Ministério da Educação e Cultura, Secretaria de Assuntos Culturais, Fundação Nacional de Arte, Instituto Nacional de Folclore.
- 新村出編(2008)広辞苑第六版. 岩波書店, 電子辞書 CASIO EX-word.
- 塩川伸明(2010)民族とネイション—ナショナリズムという難問(第 4 版). 岩波書店: 東京.
- Silva, Lucas Contador Dourado. and Ferreira, Alexandre Donizete. (2012) Capoeira dialogia; o corpo e o jogo de significados. Revista Brasileira de Ciências do Esporte., 34(4), p.665-681.
- Silveira, Marta Iris Camargo Messias., Silveira, Paulo Roberto Cardoso da., Alves, Giovani da Rosa.(2011) O movimento social negra, o educação como instrumento de combate a desigualdade racial: caso da lei federal 10.639/03.XI Congresso Luso Afro Brasileiro de Ciências Sociais, pp.1-13.
- Smith, Melanie; Macleod, Nicola; Robertson, Margaret Hart. (2010)Key concepts in tourist studies. Sage,
- Sodré, Muniz., Soares, Carlos Eugênio Líbano., Moura, Flávio dos Santos Gomes e Jair.(1997)Jornal Abadía-Capoeira., 2(13)julho / 1997.
- Sodré, Muniz., Soares, Carlos Eugênio Líbano., Moura, Flávio dos Santos Gomes e Jair.(2003)Jornal Abadía-Capoeira., 8(44)agosto-setembro / 2003.
- Sodré, Muniz., Soares, Carlos Eugênio Líbano., Moura, Flávio dos Santos Gomes e Jair. (2009)Jornal Abadía-Capoeira., 14(55)agosto / 2009.
- Sodré, Muniz., Soares, Carlos Eugênio Líbano., Moura, Flávio dos Santos Gomes e Jair. (2011)Jornal Abadía-Capoeira. 16(57)agosto / 2011.

- Sodré, Muniz., Soares, Carlos Eugênio Líbano., Moura, Flávio dos Santos Gomes e Jair. (2013) *Jornal Abadá-Capoeira*. 18(59)agosto / 2013.
- 寒川恒夫編著(1994)スポーツ文化論. 杏林書院: 東京.
- 寒川恒夫(2002)民族スポーツの概念化. 日本体育学会大会号(53), p.629.
- 寒川恒夫(2004)教養としてのスポーツ人類学. 大修館書店: 東京.
- 住田育法(1979)「ブラジリダーデ」の文化的性格. ラテン・アメリカ論集, 13, pp.59-81.
- 住田育法(2005)第 11 章ブラジル, 国本伊代・中川文雄編, ラテンアメリカ研究への招待. 新栄堂: 東京, pp.301-344.
- 鈴木茂(2009)第 11 章多人種・多文化社会における市民権—ブラジルの黒人運動とアファーマティヴ・アクションをめぐって—. 立石博高, 篠原琢編. 国民国家と市民—包摂と排除の思想—. 山川出版社: 東京都, p.273-298.
- Taffarel, Celi Nelza Zulke. (2005) Capoeira e projeto histórico, in Silva, Ana Márcia.&Damiani, Iara Regina(eds.), *Práticas Corporais Gênese de um movimento investigativo em Educação Física, Nauemle Ciência & Arte, Florianópolis*.
- 田所清克(2004)予備的研究 大西洋を介したアフリカとブラジル: カポエイラに表徴されるアフロ・ブラジルの世界. *Cosmica: area studies* / 京都外国語大学機関誌編集委員会編(34), pp.65-84.
- 高内正子(2009)子どものこころとからだを育てる保育内容「健康」. 保育出版社: 大阪.
- 田村克己編(1999)20 世紀における諸民族文化の伝統と変容 4 文化の生産. ドメス出版: 東京.
- テルズ, エドワード・E.: 伊藤秋仁・富野幹雄訳(2011)ブラジルの人種的不平等 多人種国家における偏見と差別の構造. 明石書店: 東京.
- 宇土正彦監修(1995)学校体育授業事典. 大修館書店: 東京.
- 宇土正彦監修(2009)幼児の健康と運動遊び. 保育出版社: 大阪.
- UFU(ウベルランジア連邦大学)公式ウェブサイト, “UFU entrega título de Doutor Honoris Causa a mestre de capoeira,” <http://www.dirco.ufu.br/content/ufu-entrega-t%C3%ADtulo-de-doutor-honoris-causa-mestre-de-capoeira>(参照日 2013 年 9 月 1 日).
- VASSALO, Simone Pondé.(2004)Capoeiras e intelectuais: a construção coletiva da capoeira autêntica. *Revista Estudos Históricos*, 2.32: 106-124.
- ヴィエイラ, ルイス・ヘナト., アスンソン, マティアス・ローリグ.: 前田和子訳(2010)1.カポエイラ近年の挑戦. ブラジル連邦共和国外務省編, *Texts of*

- Brazil カポエイラ. 駐日ブラジル大使館: 東京, pp.9-19.
- 山下晋司(1996)観光人類学. 新曜社: 東京.
- Zubaran, Maria Angélica., Silva, Petronilha Beatriz Gonçalves e.(2012)  
“Interlocuções sobre estudos afro-brasileiros; Pertencimento étnico-racial, memórias negras e patrimônio cultural afro-brasileiro,”  
Currículo sem Fronteiras, 12(1); pp.130-140.

## 謝 辞

本論文を執筆するにあたり、終始暖かい激励とご指導、ご鞭撻くださいました早稲田大学スポーツ科学学術院教授の寒川恒夫先生に心より感謝申し上げます。2007年に早稲田大学大学院に入学して以来、寒川先生の研究への姿勢や、指導して下さったことから、大変多くを学ぶことができました。そしてスポーツ人類学研究へ導いてくださいましたことを心より感謝申し上げます。

また、早稲田大学スポーツ科学学術院教授の志々田文明先生、友添秀則先生には、お忙しい中、審査員として多くのご指摘とご指導をいただいたことには、心より感謝申し上げます。

そして、本研究に関してお世話になりました天理大学教授田里千代先生、上智大学講師瀬戸邦弘先生、鹿児島大学講師中嶋哲也先生、早稲田大学大学院スポーツ科学学術院研究助手小木曾航平先生、同大学院スポーツ科学研究科スポーツ人類学研究室博士課程の田邊元さんをはじめとする院生の皆さん、立命館大学教授の遠藤保子先生、フェリス女学院大学准教授の高橋京子先生、東京学芸大学教授の神戸周先生、早稲田大学教授の杉山千鶴先生、帝京平成大学講師の菱田慶文先生には、論文執筆の助言、校正のアドバイス、発表準備等、長期間にわたる研究活動において、様々な形でお世話になりました。その他にもお世話になりました皆様も含め、改めて感謝の意を表します。

そして、アバダ・カポエイラのメストレ・カミーザ、メストレ・コブラ、メストラ・マルシアをはじめとする現地調査に協力してくださいましたブラジルやアメリカのカポエイリスタ、日本のカポエイリスタの皆さまにも心より感謝申し上げます。

また一方で、四国大学に勤務する傍ら博士論文の執筆を応援くださいました四国大学関係者の皆様にも心より感謝申し上げます。

実に多くの方々に支えていただいたお陰で本研究に取り組むことができましたことを改めて実感しております。

最後に、いつも気にかけてくださり、陰ながら応援して下さった父、母、弟へ深く感謝いたします。本当にありがとうございました。

2014年1月6日

細谷洋子